VICTOR NOVELS

女神異聞録ペルソナ

神取の野望

南原 順

KAZ

VICTOR NOVELS
神取の野望
女神異聞録ペルソナ
南原 順
KAZ

女神異聞録ペルソナ

神取の野望

南原 順

カバーイラスト／原　画：金子一馬

CG製作：㈱サンダイアル

本文原画／金子一馬

協　力／㈱アトラス

プロローグ　前夜

夜の御影町を一台のパトカーが走っていた。
「静かすぎるな」
助手席に座った中年の男が、ぽつりとつぶやいた。
フロントガラスのむこうに見えるジョイ通りに人影は少ない。
いつもなら、この駅近くに位置するショッピングアーケードは、夜遅くまで、にぎわっているはずなのに。
「何か、空気のかんじが、いつもと違うと思わんか、松本巡査」
「空気……、ですか、服部警部？」
松本と呼ばれた若い警官は、グレイのスーツを着た男の顔をマジマジと見つめた。
「そうだ」
彼は、真剣な顔で頷いた。
「どうも、いつもと気配が違う気がする」
「そうですかねぇ」
ハンドルを握った松本は、首をひねる。
「単に、例の事件の影響じゃないですか？」

例の事件……。
それが、町を騒がせている奇怪な事件のことを指しているのは言うまでもない。
ここは、瀬田区御影町。
考古学に興味のある人間には、町の北西部に位置する御影遺跡で知られた町である。が、それ以外の人間にとって、この町は、地下鉄御影町駅を中心に発展してきた郊外型のベッドタウンにすぎない。
そう、どこにでもある普通の町、それが、御影町だった……。
しかし、一ヶ月前から、この町は揺れていた。深夜のアラヤ神社で見つかった五つの死体をきっかけにである。
体をズタズタにひきさかれ、内臓や体液をあたり中に散らしたそれは、深夜、近辺にたむろしている不良グループの少年たちのものであった。
猟奇殺人との噂の中で進められた捜査の結果、鑑識は、周辺に残された足跡や、体毛から、彼らは、虎や豹に類した動物の鋭い爪や牙で引き裂かれた可能性が高いと発表した。
だが、御影町には、動物園を始めとして、そういった動物を収容している施設はない。考えられるのは、個人で所有されていた肉食動物の仕業であったが、それも、特に当てはまるものはなかった。捜査は、難行していた。
「あれだけの事件が続いたら、普通の人間だったら、夜は外出なんかしませんよ」
巡査は、当然といった口調で、彼の顔を見た。

「今朝も、高速道路の下で、ＯＬらしい死体が見つかったんでしょ？」
「ああ」
彼は、自潮気味に答えた。
死体は、まるで何かに頭から食われてしまったように、見事に首から上がなかった。
「虎か狼でも潜んでいるんですかねぇ、警部？」
「さぁな」
服部は言葉を濁した。
事件は、それだけではなかったのだ。
不良グループ殺人事件が新聞の紙面を飾り、御影署が全力を上げて事件の捜査を開始したと同時に、次々に奇怪な殺人が起ったことを、この若い警官は知らない。
あまりの奇怪さに、それは一部の捜査員だけの秘密とされていた。
御影病院内で、早朝発見された焼死体。……全身が、まるで地獄の業火にでも焼かれたように炭化していた。地下鉄構内で見つかった凍死体。……北極の氷の中に封じ込められたような状態だった。それ以外にも、何者かに押しつぶされたような圧死体。劇薬に全身の肉を溶かされたような白骨死体など、十五体以上の変死体が、町の至る場所で見つかっていた。
最初、警察は、これらすべてを連続殺人事件と見当をつけた。
事件が立て続けに起ったこと、それから、すべての犯行に共通する猟奇性からである。しかし、被害者からは、町の住人ということ以外の共通点を見つけることはできなかった。

その上、変死体からの手がかりが、捜査陣を混乱させた。
全身にガソリンをかけて焼き殺したとしても、完全に人間を炭化させることは難しい。そして、人が焼けるときに、発する異臭の強さ。
しかし、現場では、異臭を感じた人間はおろか、周囲に火の痕すら発見できなかった。
それは、まるで人間だけが、一万度の高熱でもあびせられて瞬時に炭化したとしか説明できなかった。
凍死体も同様であった。
当初は、どこかで凍死させた死体を現場に捨てたと思われていたのだが、死体には、凍死特有の症状、凍傷の痕がなかった。鑑識の報告には、超低温の液体チッソを全身にあびせない限り不可能な殺害と記されていた。
要するに、常識的に考えて、普通の人間には、不可能な犯行なのだ。
〈しかし……〉
服部の視線がフロントガラスの向こうに移った。
パトカーは、右手のジョイ通りを抜け右折して直進している。
〈誰かがやったんだ……〉
二本目の交差点で、パトカーは再び右折した。
少し走ると、右手に長い塀が見えた。
「相変わらず、あそこだけは夜も昼もないようですね」

巡査は、感心したような声を出した。
塀の向こうには緑が植えられ、右手には壮麗な噴水、そして、左手に巨大なパラボラアンテナが空を向いたドーム建築。その奥には、空から見たらS字型に見える五階建てのビルがそびえている。今、そのビルのほとんどの階の窓からは光が洩れている。まるで、不夜城といった趣きであった。
「そのようだな」
彼は、関心なさそうに、新しそうな建物を一瞥した。
それは、しばらく前に御影町に出来たセベクのビルである。
セベクとは、『S・E・B・E・C』、つまり『佐伯・エネルギー&バイオロジカル&エレクトロニクス・コーポレーション』の略称で、日本を代表する企業家佐伯孝三が会長を務めるコングロマリット『佐伯グループ』の一社である。そしてセベクは、『佐伯グループ』の新規事業の核をなす企業として世間に知られている。
特に、この御影町に出来た支社には、世界でもトップクラスといわれる研究者たちが数多く集められ、さまざまな研究が行われているらしい。
〈あるいは……〉
突然、服部の頭の中に、一つのことが閃いた。
〈セベクほどの設備があれば……〉
鑑識の人間は、普通の人間には不可能だと言った。しかし、最先端の科学技術を使ったとしたら？
だが、何のために？

「研究所なみの設備を持った異常者が犯人か……」
そんな奴はテレビか映画の中だけの話だ。現実にはありえない。
服部は、その考えを一蹴した。
と、その時、服部の体に大きく揺れが襲いかかった。
「どうした！」
松本が、急ブレーキをかけ車を停めたのだ。
「警部、あ、あれを！」
フロントガラスの向こうに、人影が見えた。
黒いリボンに黒い服の幼女が、車道の真ん中を彼らに向かって歩いて来ている！
「こんな夜遅くに！」
「とにかく、危険だ。保護しよう」
服部は、ドアを開けて飛び出した。
が、今さっき目の前にいたはずの彼女の姿がない。
「どういうことだ」
「き、消えました。たったいま、僕の目の前で！」
ハンドルを握ったまま松本は、おびえた声を上げた。
「バカな。どっかに走っていっただけだ」
「い、いいえ、本当です。たった今、ボーッと煙のように」

「見失ったんだろ。黒い服に、この闇だ」
服部は、左右を見回した。
車が止まったのは、ちょうどアラヤ神社近くだった。このあたりは、メインストリートから奥まった場所だけに、この時間は街灯ぐらいしか灯りがない。黒い服を着ていたとしたら、姿を見失っても不思議はない。
「僕の顔を見て、笑いながら消えたんです……」
半信半疑といった顔で、巡査がドアの外に出る。
「何か、冷たい笑いでした」
「パトカーを見て、怯えたんだろ。相手は、子供だ。とにかく見つけて保護しなくては」
黒服の幼女を保護すべく、服部たちは彼女の姿を探していた。
しかし、あたりには、人影ひとつなかった。
「いませんねぇ」
松本は、懐中電灯であちこちと照らした。
「子供の足だ。そんな遠くへ行ったとも思えないが……」
「ひょっとして、警部、このへんの家の子供だったんじゃないですか?」
「そうかもしれんな」
さっと、家の中に駆けこんでしまったというのなら、それは頷けることだった。
だとしたら、心配する必要はない。

と、服部が思いなおした時、その耳に地の底から響くような音が聞こえた。
「お、おい」
「い、今のは……」
服部だけではなく、松本にも、聞こえていた。
それは、生物的な響き、野獣の雄叫びに似ていた。
「アラヤ神社の方だったな」
巡査は、こわばった表情で頷いた。
服部の頭に、ピンとくるものがあった。刑事のカンというやつである。
「行ってみよう。ひょっとして、アラヤ神社の事件の手がかりがつかめるかもしれん」
「ま、まさか」
「いや、わからんぞ。念のため、君はパトカーに戻って署に連絡してくれ」
「警部は?」
「俺は、先に神社に向かう。署との連絡がすんだら、君も来てくれ」
「はっ」
巡査は、敬礼で答えた。

アラヤ神社は、町の南西部、御影一丁目の住宅地の真ん中にある。ここは、『人の心の中に住む神』をまつった神社として知られている。

服部は、正面にそびえ立つ大鳥居をくぐり、狛犬の横を抜けた。
一本の街灯がついているだけの境内は、薄暗かった。
その暗がりの向こうで、彼は、さっきの黒服の幼女を見つけた。
「こんなところに……」
よりにもよって、こないだ惨殺事件のあった場所にと、服部は思った。
そして、彼女を保護しようと彼は近づいた。
と、よく見ると、その傍らには大人の男が立っているではないか。
〈なんだ、父親が一緒にいたのか〉
彼は、安堵した。
が、なぜ、こんな時間に、こんな場所にいるのか？
〈誘拐という可能性もあるな〉
彼は、その親子に向かって声をかけようと歩みよって行った。
「君たち……」
そう、声をかけた時、服部の目に信じられない物が飛び込んできた！
「な、なんだ、これは！」
親子の目の前で、見たこともない異形の物が舞っていた。
「ば、化け物！」
それは、これまで彼が見てきたどんな動物でもなかった。

紫と金色の羽を持った鳥に似ているそれの首から上には、老人の顔があった。
そう、頭から上が老人の鳥！
それが、二羽、目の前の親子の頭上で、今にも親子の喉笛を、その鋭い爪の餌食にせんとしていた。
「危ない！」
服部は、すかさず左胸に吊ったホルスターから拳銃を抜いた。
そして、発砲した。弾は化け物鳥の一羽に命中した。そいつは断末魔の叫びをあげて地面に落ちた。
残りの一羽が、服部に向かってきた。
「け、警部！」
後ろから松本の驚く声が、聞こえた。
「な、なんです、この化け物は！」
化け物鳥の目が、かっと見開いた。
と、同時に衝撃波が彼等に向かって襲いかかってきた。
「松本、気をつけろ！」
服部は、すかさず、狛犬の陰に隠れた。
が、松本の体は、その衝撃波を食らった。
瞬間、彼の体は、まるでギロチンで切断されたように腹からスッパリと二つに切り裂かれた。

「ま、松本巡査ーっ！」
松本の上半身が、血と内臓をあたりにぶちまけながら地面に崩れ落ちた。
「け、警部……、いったい、何が……」
上半身だけになった松本は、そう言って、絶命した。
その下半身は、一〜二歩、前に足を動かしたのち、バランスを崩して倒れた。
「くっそーっ！」
服部は、撃った。
こいつがバラバラ殺人の犯人だったとは！
信じられない思いを残しながらも、残りの弾丸すべてを、その怪物に叩き込んだ。

「大丈夫か」
服部は、自分が守った親子に声をかけた。
彼の耳には、化け物鳥の断末魔が、耳に焼きついていた。
「ここは、危険だ。私と一緒に……」
彼は、父親の方に向かって話しかけた。
薄明りの下で見える父親もまた、幼女と同様に、黒い服を来ていた。
が、彼の前で幼女の姿は、闇に吸い込まれるように、フッと消えてしまった。
「いったい……！」

言葉にならなかった。
しかも、父親の方は、娘が消えたことを何とも思っていないという様子だった。
薄明りの下で、黒服の男の顔が見えた。
〈この男の陰気な目。どこかで見た……〉
どことなく、服部は、その顔に見覚えがあった。
が、男は、彼の疑念など気にするようすもなく、足元に落ちている死骸に目を落とした。
「なかなかの腕前ですな」
その声に、服部は、男の名前を思い出した。
〈神取鷹久。セベク御影支社長……!?〉
間違いない。何度か顔を見たことがある。
〈まさか、今までのことは、すべてセベクの!?〉
では、この鳥は………。
服部の頭の中で、テレビで見た遺伝子実験の光景が浮かび上がった。遺伝子と遺伝子をかけあわせて、新たな生命を作り出す実験。この鳥の化け物はセベクに作られたのか!?
アラヤ神社で起った五人の不良殺害はセベクが作った鳥の仕業だとしたら!?
いや、他の殺人もすべて、そうなのかもしれない!
しかし、一企業がなんのために?
企業は、利潤を上げるために、結果として人間を殺すことはあっても、殺人のための殺人を犯す

ことはない。それが、セベクのような研究機関的会社になればなるほど、そういったことからは遠ざかっていく……。

しかし……。

一つの言葉が浮かんだ。

〈人体実験!?〉

「どうやら、私が誰か、わかったようですね」

男は、薄気味の悪い笑みを浮かべた。

「神取鷹久、参考人として署まで同行願いたい」

が、神取は、答えるかわりに、口の中でなにかをつぶやいた。

それは、服部の耳に、こう聞こえた。

ペ・ル・ソ・ナ

「!?」

神取の背中から霧のようなものが現われた。霧は、生きているかのように、彼の体を包んでいった。

「な、なんだ、この霧は!」

服部は、神取が、彼から逃げるために何かの細工で、目くらましをしたのだと思った。

が、次の瞬間、信じられない光景が服部の目を覆った。

「ここは……!?」
月明りの下で霧に包まれたはずの彼は、夜の闇以上の深淵の中にいた。
それは、闇、闇、闇、に包まれていた。
いや、ただの闇ではなかった。
上下もなければ左右もない空間の中に、浮いているとしか形容できなかった。
そして、その向こうに神取が浮いていた。
「大いなる闇の深淵に、ようこそ」
神取は、冷たい笑みを浮かべた。
「まもなく、世界はこの闇そのものとなる」
だが、彼は、その言葉をすべて聞く事はできなかった。
服部の目が、神取の背中から現われた影を見た瞬間、心臓の鼓動が停止してしまったからである。

「支社長、これは」
その背後から、黒服の男たちが現われた。
そして、彼等は、神取の前にある二つの死体に気がついた。
「ただのゴミだ」
言い捨てる口調には、蔑みの色があった。
「それよりも、奴らは？」

神取は彼らに尋ねた。
「はっ。支配に成功したものは、すべて収容しました。残りは、なんとか……」
「処分したか」
「はっ」
神取は、スラックスのポケットに左手を入れた姿勢で、地面に転げるタクヒの死骸を見下ろした。
「惜しいところだった。こいつの力も、もう少しで手にはいるところを」
こいつらさえこなければ、交渉は成立した。
「……目撃者含めてすべて処分も完了」
「よし、引き上げる」
「支社長、例の黒い服の幼女が、いたと思いましたが……」
「あきのことか……。気にするな。我々の邪魔にはならん」
神取は、満足そうに頷いた。
と、その時、神取の胸ポケットから電子音が、響いた。
「どうやら、準備は、出来たようだな」
彼は、そうつぶやいて、胸ポケットから携帯電話を取り出した。
「私だ」
電話に、向かって、彼は、そう言った。
「そうか……、臨界点に達して安定したか。で、ドクターは、何といっている。大丈夫だと言うの

だな」
それだけ言って、彼は電話を切った。
問題は、ドクター・ニコライが、どこまで外部のエネルギー波を遮断してデヴァシステムを起動させることができるかだと神取は思った。例の波動の影響は最小限におさえておきたい。そして、その時こそ、自分の本当の目的が達成される。
それは、ここにいる彼の部下たちですら知らない。いや、知る必要すらないのだ。
「いよいよ、裁きの時が始まるのだ。これから逃れられる者はいない………」
いつのまにか悪魔の死体は消え、後には二つの死体だけが残されていた。

第一章　神取鷹久の光と影

1

十ヶ月ほど前

御影町二丁目にあるセベクビルの大ホールで、セレモニーが行われていた。

それは、新しい支社の完成を祝ったパーティといってもよかった。

そこには、セベク幹部社員は当然のこととして、佐伯グループ幹部社員や、セベクと取り引きのある企業の代表者、マスコミなどがゲストとして集められていた。

会場の中央には、一流ホテルの厨房で作られた和洋中様々な料理が並べられ、それを囲むようにビールやジュースの置かれた二十個ほどの丸テーブルが配置されている。

そして、それぞれのテーブルを囲んだゲストたちにグラスに入ったシャンパンが男女十数人のホール係たちによって配られ始めていた。

彼等は、この日のために来て貰った一流ホテルのホール担当だけあって、その動きは、整然として滞りがなかった。

そのかろやかに動く彼等の中に、一人だけ、落ち着きなくあたりを見回しながらシャンパングラスを配って歩いている男がいた。

レモンイエローの上品なスーツにワインレッドの棒タイは、他のホール係と一緒の格好であったが、どことなく、荒々しさが背中から漂っていた。
「城戸くん、困るよ」
神経質そうにメガネに手をあてた男が、小声で彼の耳もとでささやいた。
「うちのホテルは格式で有名なんだからね」
「は？」
彼は、意味がわからないという顔で、男を見た。
「いくら、臨時のバイトでも、もう少し、優雅に動いてくれなきゃ」
注意する男の胸についたホテルの従業員を示すプレートには、荒川と書かれていた。
今回のパーティのホテル側の現場チーフである。
「そのつもりなんですが、チーフ……」
「とにかく、きょろきょろと人の顔を覗き見るようにするのだけでもやめてくれ。いいな」
「わかりました」
「それから、君、向こうのお客様にもシャンペンを」
「はい。ただちに」
頷くと、城戸は、シャンペングラスの乗ったトレーのバランスに気をつけながら、ゲストたちの人ごみを縫いながら、チーフの前を立ち去った。

またたくまに、二百名ほどの出席者全員の手にグラスが握られた。
用意されたシャンパンは、最高級の物であり、最高の飲み頃に冷やされていた。
そして、今、グラスを持った彼等の視線は、正面のステージに集められていた。
ステージ正面のマイクの前に猫背気味に立つでっぷりと肥満した男にである。
それは、通産大臣の小森尋康（こもりやすひろ）であった。
「……と、いうわけで、私も常に科学技術の発展を指揮する立場として、この佐伯グループの核をなす、セベクの発展につきましては、常に、多大な期待を寄せるものでありまして……」
次の選挙も近い小森は、ここぞとばかりに自分をアピールしていた。
ホール係の城戸たちは、スピーチの終了に備えて壁際に整列している。
終了と同時に、ワインや、水割り、ソフトドリンクをゲストにサーブするためである。
「まいったな」
城戸の隣に立つ、チーフの荒川が、小声で嘆いた。
「政治家のスピーチが長くなるのは計算の上でシャンパンの温度を設定していたのに」
荒川は、ホールの正面に据え付けられた時計を見た。
「五分のスピーチが十分になるまでは計算していたが、もう、二十分を超えているぞ。これじゃ、ビールもなにもぬるくなってしまう……」
が、城戸の耳には、そんな嘆きは一切聞こえなかった。
彼の目は、ものすごい勢いで、会場のあちこちをサーチしていた。全神経は、その作業に集中し

ていたのだ。
「……しかも、佐伯会長の手腕のすばらしいのは、この御影文社の文社長に二十八歳の若手のホープを据えたことです……」
その言葉に、城戸の耳がピクリと動いた。
あいつだ……。
あいつのことだ……。
城戸は、思わず眉間にしわを寄せた。
彼の額にくっきりと残る十字の傷が、ピクリと動いた。

2

小森大臣の長いスピーチが続いている頃、同じ建物のある場所では、秘密の実験が行われていた。
鋼鉄の扉でロックされた一室には、見たこともない複雑な構造の電子機器が、あちこちに並べられている。そこでは、白衣姿の研究員たちが、それぞれにコンピュータディスプレイを覗きながら、キーボードを叩いていた。
そのディスプレイの向こう側の壁には、巨大な液晶スクリーンが広がり、何かの装置の映像を映し出していた。
一人の老人が、感慨深げにそれを眺めている。
画面の向こうの装置は、ゆうに三フロアー分の高さはある空間の奥まった場所に置かれていた。

その形状は、円錐の先端を切り落としたようであった。何かに例えるなら、かつてNASAで使われていた宇宙ロケットの大気圏突入ポッドにも、それは似ていた。
正面には、鋼鉄製のドアらしきものがついていた。
その周りで、五人ほどの白衣の研究員や技師たちが、少し左手前にある装置をとりかこんで、赤と青のボタンを交互に押していた。ボタンが彼等によって押されるたびに、装置のドアが開閉していた。
［ニコライ博士、システムのゲート機構の調整は完了しました］
ディスプレイに向かっていた女性が、顔を上げ、白衣の老人に英語で報告した。
メガネをかけた理知的な雰囲気の白衣の女性である。
［これで、D・V・A（デヴァ）システムの回路は、すべて接続できました］
［完成したか……］
ニコライ博士と彼女に言われた老人は、年の頃は、三十代半ばといった彼女を振り向いた。
［電力ユニットの稼働チェックを始めますか？］
その言葉に老人は満足そうに頷いた。
［よろしい、セツコ・ソノムラ。エネルギーサプライをスタートしてくれたまえ］
「イエス、ドクター」
園村節子は、ディスプレイにエネルギー供給プログラムを呼びだした。
彼女の指が、スタートキーを叩く。

ディスプレイ上に白色の十本のバーが現われた。

十基ある発電ユニットの稼働状況をモニターしたものである。

白色のバーは、それぞれ左から順に緑色に変わって行く。緑は、システムに電力が送られ始めた証しである。そして、この緑のバーが右から赤くなり、赤い部分がバーの五十%を超えると自動的に電力はカットされる仕組みとなっている。赤は、出力過剰を表わしているのだ。

[オール・グリーンです、ドクター]

[オーライト、予定通りだ]

ニコライ博士は、満足そうに、液晶スクリーンの向こうの装置を見つめた。

3

「……と、いうことで、では、乾杯!!」

ようやく大臣が、グラスを頭上にかざした。

出席者全員が、唱和し、グラスに口をつけると、あちこちから大きな拍手が鳴り響き、ホール係は、さまざまな飲みものをサーブしたり、灰皿を取り替えたりと、それぞれに動き出した。

荒川だけが、渋い顔で、この後の段取りを計算しなおしている。

「ぼっちゃま、料理をとって参りましょうか」

乾杯の後の歓談が始まると、ほぼ白髪の老人が丁寧な口調で、隣の青年に言葉をかけた。目には、老眼鏡とおぼしきメガネ、そして、口元には品よく蓄えられた髭（髪同様に、ほとんど白くなりか

けている）といった容貌である。
彼の、青年に対する態度は、何かにおつかえするといったうやうやしさにあふれていた。
「頼む、山岡」
青年は、メガネの奥のきついまなざしを和らげながら頷いた。
聖エルミン学園のグレイの詰め襟の首もとから目の醒めるブルーのスカーフを垂らし、オールバックに整えた髪の一部をライオンのたて髪のようにわざと後ろに立てた髪の彼。
彼の名前は、南条圭。
南条コンツェルンの御曹司であり、当然のことながら、南条コンツェルン次期総帥となるべき人物である。
今日は、海外視察に出かけている父親に代わって、執事の山岡を連れて、セレモニーに出席しているのであった。
南条コンツェルンの歴史は古い。
その歴史は、室町時代にまで遡ると言われている。
南北町の動乱から、戦国時代、そして江戸時代に至るまで、南条家は宮中や大名たちと繋がってきた。そして、明治維新に際しては、新政府を財政的な部分で支えるまでの働きをしたと言われている。
戦後、ＧＨＱの財閥解体指令によって、あまたある企業グループのほとんどをコンツェルンから独立させたが、尚、現在でも、それらの企業群を始めとして、政財官界に対しても大きな指導力を

有している。
「しかし……」
ソフトドリンクの入ったグラスを片手に南条は、ステージ前で先程の大臣と握手している男を見た。
「あの男が支社長とは……」
それは、他のゲストにとっても意外だったようで、彼のまわりでも、小声でささやかれていた。
「しかし、常務派が黙っていないのじゃありませんか、この人事」
「佐伯グループの中で、最も力のない会社とはいえ、あの若さで支社長とは驚きですな」
「どうやら、会長のお気に入りだそうですよ」
「ほーっ、それでですか」
「でなくては、到底、こんな地位にはつけませんなぁ、あそこでは」
「おっと、言葉には気をつけて下さいよ」
「そうそう、誰が聞いているかわかりませんからなぁ……」
男たちは、声を潜めた。
それ以上の会話は、南条には聞こえなかった。
〈どうやら、佐伯の内部も、いろいろとあるようだな……〉
なんとはなしに、そのニュアンスは南条にも伝わった。どこの会社も同じということなのだろう。

そこへ、山岡が料理を乗せた皿を持って戻ってきた。
「ぼっちゃま、ささ、召し上がって下さい」
「ありがとう」
南条は、グラスをテーブルに置き、山岡から皿を受けとった。
「おや、支社長のスピーチが始まるようですね」
ステージ上では、司会者が、セベクの新しい支社の支社長の名前を告げていた。
その言葉に、南条もステージに視線を移した。
黒服の男が、ドリンクのグラスをホール係の女性に渡し、ステージに続く階段をゆっくりと上っていた。
「あの佐伯会長が、どうして、ここまで、あいつを……？」
南条には信じられなかった。
黒服の男の名前は神取鷹久。
若干二十八歳にしてセベクの新しい支社の支社長となった男である。
イギリス、オックスフォード大学院卒。経済学・法学・社会学の博士号取得という経歴は、それだけで、ビジネスエリートとして扱われるにふさわしいステイタスであった。
「気にいらんな……」
ポツリとつぶやいた。
それは、二十八歳で支社長になったということに対してではなく、なんとなく神取そのものの持

つ気配に対して向けられたのだが、山岡は、そう受けとらなかった。
「佐伯会長は、神取様のお父上にはお世話になっておりました。それもあるのでございましょう」
神取の父親は、政治家だった。
そして、神取は帰国後、父親とよしみの深かった佐伯孝三のもとに身を寄せたのである。
「山岡、そんなことは、よくある話だ。それは悪いことではない」
南条は思う。
自分も、おそらく大学を卒業した後には、どこかに留学に出されて、その後、南条コンツェルンの後継者として、同じような道を歩むかもしれん。それに、それを他人から見て羨ましいとか、ずるいとかいうのは間違っている。
なぜなら、そのことが与えるプレッシャーのことを人は見逃しているのだ。
人は、それを維持するために、どれだけの代償を払っているかについて、あまりに無関心だと彼は思う。
たとえば、自分だ。
南条コンツェルンの御曹司ということで、得たものは数多くあるだろう。そのことは、否定しない。しかし、そのことが、自分からどれくらいのものを奪っているのか、山岡以外はそのことに気づいていない。
が、南条は、そんなことは、おくびにも出さずに、言葉を続けた。
「ただ、なんとなく、あの男からは悪意のようなものを感じるんだ」

「悪意ですか？」
「おまえは、あいつの目を見たことがあるか？」
山岡は首を横に振った。
「僕も、こうしていろんなパーティに出ているおかげで、政治家や実業家や役人、それに芸能人まで見てきた」
「後継ぎとして必要な、人間観察です」
「だから、観察もしてきたさ」
南条は、頷く。
「しかし、あの男の目だけは、好きになれない」
人は、目の奥に光りを持つ。
ことに、上昇志向の強い者は、その目に太陽のように燃えたぎったものを持つ。
それは、どんな人間にも見られる。
南条は、山岡の言う人間観察を続けてきた。
パーティ会場で、紹介された人間の目を見れば、その人物の生命力がわかると山岡はいう。目の輝きの強い者は、まだまだ伸びる。そして、目の輝きの弱さは、すなわち心の弱さだと、山岡は、そう教えてくれた。
南条が神取について、あまりいい感情を持っていないのは、その目であった。
「まるで、何かを隠しているような目だ」

「野心家とは、そういうものです」
「……」
南条は、それに反論しなかった。
確かに、神取は野心家といっていい。
支社長になって、それが今まで以上に強くなったというのは、遠目で見ていても感じられる。
〈それならば……〉
なぜ、あいつの目には死んだような暗い光しかないのだ。
生命感が感じられないというのだろうか、神取は、まるで死神のように……。
とにかく、これ以上、あの目を見たくはなかった。
南条は、皿をカチャリとテーブルに置くや、山岡の耳にささやく。
「山岡、帰るぞ」
が、壇上では、神取のスピーチが始まっていた。
「し、しかし、ぼっちゃま。今、スピーチが……」
山岡は、慌てた。
「かまわん。おやじの代理役は、もう果たした」
「は、はぁ、確かにそうでございますが」
皿をテーブルに置くと、南条はスタスタとドアに向かって歩き始めた。あわてて、山岡が、その後を追いかけた。

〈とにかく、あいつだけは、どうも虫が好かん……〉

4

神取は、ステージ上で、自信に満ちた態度でスピーチを続けていた。
「……山の中の人里離れた場所での研究など無意味です。すべての研究成果は、人間の生活向上に役立つ方向に持って行かなくてはなりません。御影町に最高の実験施設を持った支社を誕生させたのは、そのためです」
神取は、招待客たちを見回した。
瀬田区長ら、セベクの進出を歓迎している招待客のほとんどは、神取のスピーチに満足そうに頷いている。
「最新のテクノロジーの成果を、セベクは、この町に還元するとお約束しましょう」
神取は、スピーチの最後を、そう締めくくった。
割れんばかりの拍手の渦が、会場を包んだ。
神取は、一礼して拍手に送られる形でステージを降りた。
「支社長」
一人の美しい女性が、水割りの入ったグラスを片手に、彼のもとに歩みよってきた。
「ありがとう、宮下君」
神取は、差し出されたグラスを受けとる。

体にフィットした赤いスーツを身にまとい、タイトスカートからすらりと伸ばした脚の美女。
彼女の名前は、宮下真夜。
神取支社長の秘書を勤める二十五歳の女性である。
「なかなかのスピーチでしたわ」
「そうかね」
「その証拠に、あちらから……」
彼女は、グラスを持った神取に目配せした。
「区長たちか」
「早速、地元に貢献していただきたいご様子のようで……」
「ふん」
神取は、鼻で笑った。
「寄生虫どもが……」

「いやぁ、神取支社長」
頭の少し薄くなった中年の男が、腰の低そうな数人の男たちを連れて神取の周りを囲んでいた。
「これは、区長に、助役の皆さん」
神取は、手に持ったグラスを掲げるようにして、彼等に挨拶した。
「全くもって、素晴しいお話で深く感銘いたしました。セベクが、この町を活性化して下さること

を期待しております」
「セベクのような日本を代表する大企業が、このような場所に支社を出していただいたことを感謝いたしております」
「なにぶんにも、税収の少ない区でありますから……」
彼等は、揉み手をしながら、神取の機嫌を取る言葉を口にする。
「とりあえず……」
神取は、右手で、彼等の言葉をとめた。
「後日、セベクから、区に対して若干の寄付をするつもりです」
「ま、まことですか」
「すでに、会長の佐伯の許可もとってあります」
「感謝いたします、神取支社長」
「なに、企業が地元の発展のためにお金を使うのは、アメリカやヨーロッパの企業ではあたりまえのことです。私に言わせるのならば、日本の企業は、こういうことに無頓着すぎる」
神取は、鷹揚に頷いた。
「金額につきましては、後日、秘書の宮下から連絡させます」
その言葉に、彼等の視線が、宮下に集中した。
宮下は、それを意識するように、上品な笑顔を作って言った。
「けっして皆さんを落胆させないだけの額であることは保証いたしますわ」

その言葉に、彼等は安堵の表情を見せた。

5

そのやりとりを、じっと見ている男がいた。
ホール係の城戸である。
「この傷の恨みは忘れねぇ」
彼は、まるで、それを確認するかのように、額の上に左手の指をはわせた。
「やるなら、今だ」
城戸は、ドリンクを乗せたトレーを持ったまま、彼等のそばに近づいて行った。
「あ、君、水割りを」
助役は、近づいてきた彼に声をかけた。
しかし、城戸は、それには答えない。
「き、君」
助役は、自分が無視されたことに腹を立てたが、すぐ、その感情は、恐怖に変わった。
そのホール係の手には、鋭利な刃物が握られていたのだ。
「き、君ぃぃっ！」
助役は、悲鳴を上げて、その場にへたりこんだ。
と、同時に、ガシャリと、グラスの割れる音が響く。

城戸が、左手にかかえていたトレイを、その場に投げ捨てたのだ。
ホールで歓談していた人間全員に、その音は聞こえた。
彼等は、一斉に音のする方を見た。
そして、絶句した。
「神取ーーっ！」
静寂の空間に、大きな怒声だけが轟いた。
城戸の声だ。
憎悪のまなざしを向けながら、城戸は、神取にナイフを向けた。
それに気づいた周囲の客たちから悲鳴が上がる。
「死ねっ！」
全体重を両手で握りしめた刃物にかけた城戸が、神取の心臓を狙って迫る。
数歩の距離もない。
刃先が、光る！
その瞬間、誰もが、若き支社長に、その男の凶刃が突き刺さったと思った。
が、紙一重に、神取は刃をかわした。
「!?」
城戸の体が勢い余り、よろめいた。と、同時に神取の右手が手刀を作り、城戸の手に握られた刃物を叩き落とした。あっという間の出来事であった。

「また、貴様か」
神取は、冷ややかな態度で、彼を襲った男の目を見つめていた。その目には、あきらかにさげすみの色があった。
「こ、殺してやる、神取」
態勢をたてなおすや、城戸は素早く右の拳を神取に向けてうならせた。が、神取のアクションの方が早かった。
神取の右足が、城戸の腹部を大きく蹴り上げた。
「ぐっ」
靴先が、城戸のみぞおちにめり込んだ。城戸の顔が苦痛に歪み、神取の足元に前のめりに倒れかかる。勝負はついたかと思われた。が、城戸がニヤリと笑った。それは偽装だった。城戸の狙いは、倒れかかるふりを装って床のナイフを手にし、油断した神取の心臓を一瞬にして貫くことにあったのだ。
だが、神取は城戸の一瞬の笑みを見逃していなかった。
城戸の手がナイフを取る寸前のタイミングで、神取の靴先が、それを遠くに蹴り飛ばしていた。
「くだらんことを」
「ちっ……き、しょ……」
とっさに城戸は、残った力のすべてをこめて倒れかかる体の右足に重心をかけ、腰をひねりざま

に神取の顎に向けてカミソリのような鋭い左アッパーの一撃をくりだした。まさに、ケンカ慣れした彼ならではの攻撃だった。その場にいた誰もが、神取の顎が砕けると思った。
が、城戸の拳はむなしく空を切った。
〈ばかな!?〉
城戸には信じられなかった。間違いなくあたったはずだった。
「無駄なことを」
冷たく神取は、そう言い捨てると、無理な姿勢でのパンチにバランスを崩した城戸の無防備な右頬に、素早いパンチを送り込んだ。
「ぐっ」
苦痛のうめきが、城戸から漏れた。
その一撃は、城戸の意識を奪い、彼は頭からあおむけに床に崩れた。
「支社長、ご無事ですか！」
我に返った宮下が、神取に声をかける。
「ああ」
「また、例の少年ですか……」
「まったく、迷惑な話だ」
淡々とした様子で神取は、城戸の体を会場警備のために私服で入り込んでいたSS～セベク・セキュリティサービスの男たちに引き渡した。

「いつものように、表に叩き出せ」
「し、しかし、支社長の命を狙ったのですから……」
城戸の両腕を押えた二人の黒服のうちの一人が、その指示に信じられないという顔をする。
「かまわん。それよりも……」
「わかっております」
宮下は、神取に目配せをした。

6

［沼田助手、始めてくれ］
ニコライ博士は、液晶スクリーンのむこう側に待機する沼田助手、浅田助手以下五名のスタッフに実験開始を促した。
［了解しました］
デヴァシステムのコントロール装置の前に立った沼田が答えた。
彼等のやりとりは、マイクとスピーカーを通して、すべてのスタッフの耳に届く。
［では、実験施設の全フィールドの隔壁を閉鎖します］
園村の隣に座った研究員が、博士に報告した。
「しかし、大丈夫なのかね……」
見るからに神経質といった紺のスーツ姿の男が、ニコライ博士の横に立ち、この様子を見つめて

いた。
［ノープロブレム、山中］
ニコライは、不安げな表情の山中の肩を叩き、心配いらないという表情を彼に見せ、実験の内容についての説明を始めた。
「おい、園村君、博士は、なんと言っているのかね」
突然の説明に山中は、うろたえた。
彼は研究所長だが、英語ができなかった。
だが、園村は、実験のオペレーションに集中しているのか、山中の呼びかけが耳に入らないようだ。
「まぁ、いいか……」
山中は、やむなく、いつものように笑顔を作り、聞いているふりを装った。
〈どっちにしろ、ここは、博士のための施設だしな……〉
名目上、研究所の責任者とはなっているが、山中には、ここで何の研究をやっているのか、ほとんど理解できていなかった。彼は、天才肌のこの老人の研究のためのサポート役、いわば雑用係として所長をやっているのに過ぎないのだ。
彼の仕事は、研究予算やスケジュール管理であり、そのためだけに神取は総務部課長だった彼を抜擢したといっていい。それは、日頃の神取へのゴマすりが効を奏した結果と研究員たちからは軽蔑されているが、彼は全く気にしていない。

〈どうせ、何かあったって、それは、博士と神取支社長の責任だ〉
自分の知ったことではない。
山中は、いつもの通りにわりきることにした。
下手に詮索して、せっかく神取から与えられた特別の地位を捨てるなど、そんなことになるのはご免だった。

不測の事態に備えて、すべての研究施設の扉がロックされ、更に鉄のパイプがドアの前に伸び、ドアロックが補強されていく。そして、デヴァシステムの前の男たちが動きはじめた。
[ゲートをあけ、モルモットを入れます]
沼田が、コントロール装置を操作し、移送ゲートをあけた。
「君、こいつを、ゲートに」
彼が指さしたのは、金網のカゴに入れられた一羽の兎である。
兎は、カゴのまま、ゲートの中に入れられた。
ゲートが閉じられる。
ニコライ博士は、それをじっと見つめている。
[まもなく、デヴァシステム起動可能です]
老人は、大きく頷いた。
[しかし、いいのですか？　今日は、電力ユニットの出力テストということになってますが……]

［かまわんよ。実際にシステムを発動させて装置にかかるエネルギー負荷を知らないことには、今後の実験の支障になる。シミュレーションだけでは、わからんことも多いのでな］

C・W・ニコライと名乗るこのユダヤ人の老人。

空間位相研究に独自の理論を提唱する天才的科学者である。

その理論とは、空間に人為的なエネルギーを加えることで、空間と空間の相対座標軸を入れ替えることが可能となるという仮説である。

これが、実証されると物質の瞬間転移が可能となるのだ。

すでに、博士は、コンピュータによるシミュレーションで、計算上、その理論を実証し、各国の研究機関相手に、この装置の開発と実験を呼びかけてきたのだが、その画期的な研究内容とは裏腹に、受け入れる機関はなかった。

その理由は、実験に用いられるエネルギー量である。

大都市がまるまる一つ入るだけの電力が、この実験に必要となるのである。

これだけの電力が必要となることは、経済的な問題以外に、安全性の問題があった。

万が一、実験にトラブルが起こり、この電力エネルギーが暴走したなら、核爆発級の被害が予想される。博士の研究は、理論上は完成されていたが、この大きなリスクによって十年近く、宙をさまよっていたのである。そこに手をさしのべたのが神取であった。

そして今、セベクの全面支援により完成した実験装置～ディメンション・ヴァリアブル・アクセレーター・システム、すなわちD・V・A（デヴァ）システムが、いよいよ最初の実験に入ろうとしているので

ある。
「まぁ、今日の実験では、たいした収穫は望めないだろうがね……」
博士は、そう、つぶやくと、園村に指示を下した。

7

小学校から帰った玲司の前で、居間に伏して詫びる母親が、酔った父に、何度も足蹴にされていた。
「貴様など、貴様など、生きる価値もないくずだ！　死ね！　今すぐ死ね!!」
父は、悪鬼のような表情で母を蹴り続けていた。
「申し訳ございません、申し訳ございません」
母は、ただ、ひたすら父に向かって詫びていた。
「その程度で、この俺の怒りが解けるものか」
そう言いながら、父は、母の頭を足で踏みつけにした。
「母さんに、乱暴するなーっ！」
玲司は、背負っていたランドセルをはずすや、思いきり振り回して父親に向かって行った。
それは、玲司に背中を向けていた父親に意外なダメージを与えた。
バランスをくずした父は、床に足をついた。
「母さん、大丈夫!?」

すかさず、玲司は、母を助けあげる。
「貴様、玲司ーっ！」
恐ろしい怒りの顔が、玲司をにらんだ。
「玲司、なんてことを！　お父様に謝って」
助け起そうとする玲司の手を振りほどき、母は自分と一緒に玲司の頭をも床にこすりつけた。
「旦那さま、お許し下さい。この子のご無礼を、平に、平に」
母は、玲司をかばうかのように、必死で、その頭を床にこすり続けていた。
「うまく、玲司を手なづけおって……」
吐き捨てるように男は、言った。
「卑しい女のやりそうなことだ。俺の血の入った子供を使って、俺に手をあげさせるとはな……」
「け、けして、そのような……」
母と一緒に頭を床につけながらも、玲司の目は、あちこちに動いていた。
玲司には、わけがわからなかった。
どうして、母は何も抵抗しないのだ？
そして、どうして、父は？
少年は、上目遣いに父を見た。
いつのまにか、父の右手には、ゴルフクラブが握られていた。
それは、居間に置いてある練習用のクラブだった。

「智恵、顔を上げろ」
男は、ゴルフクラブで、母の頭をこづいた。
母は、顔を上げた。
「この裏切り者め」
父親は、鋭い眼光を母に向けた。
「貴様だけは、俺に忠実な女だと思っていたが……」
「お許し下さい。お許し下さい」
母は、あくまで、父に許しを乞おうと床に頭をこすりつけていた。それは、あまりにも、痛々しい姿だった……。
「いいや、許さん。こうしてくれる」
父は、狂ったような勢いで、ゴルフクラブを振り上げた。
「や、やめろーっ!」
玲司の目に、母に向かって物凄い勢いで迫るゴルフクラブの先端が見えた。
〈か、母さん!〉
死んでしまう!
このままじゃ、母さんが!
そう、思った瞬間、玲司は、母の体をつきとばしていた。
母を、かばいたい一心での無意識の行動であった。

次の瞬間、玲司は、頭に鈍い衝撃を感じた。
と、同時に、遠くで怒鳴り声がした。

「治療費だ。そこの病院で手当してもらうんだな」
ひらひらと舞い降りるものを見た。数枚の紙幣、一万円札だった。
「今度、こんな真似をしてみろ、ただじゃすまんからな」
ベンツの後部シートの窓から顔を覗かせていた黒いスーツの男が、いかつい顔で玲司に凄んで見せた。車は、そのまま、玲司の前から走り去った。
〈夢か……〉
玲司は、自分が倒れていることに気がついた。どうやら、殴られて気を失っているうちに、車から投げ出されたらしい。
「ちっくしょう……」
彼は、痛む体をかばうように、ゆっくりと起き上がろうとした。だが、苦痛に体の筋肉が動こうとしない。
「あの時に、比べりゃ、これぐらい……」
玲司は、塀に体を寄りかからせるようにしながら、必死で立ち上がろうとした。何度か足がふらついたが、それでも、立つことだけはできた。
城戸玲司は、愛人の子として生まれた。彼の母は男に囲われていたのである。

男が、玲司の家を訪れる時は、決まって、泥酔状態であった。
そして、夜遅くにもかかわらず、大きな声で、彼の母親を罵るのであった。
彼は、母親が、黙ってそれに耐えているのが不思議でたまらなかった。
そして、その男が、実は政治家として謹厳実直そのものという世評を聞いて、子供心にも信じられない思いをしたのである。
「神取賢介め」
玲司は、憎しみを込めて、一人の男の名を口にした。
その男の名を口にするたびに、玲司の額の十字傷が、疼いた。
神取賢介。
政界にはびこる汚職に対して徹底的な糾弾で臨み、さまざまな政治的圧力に屈することなく、時の総理大臣の汚職に対して逮捕命令を下した法務大臣で知られた若手政治家である。
その男を、彼は憎んでいた。
「俺とオフクロを、苦しめておきながら……」
神取賢介こそ、彼の額に十字の傷をつけた張本人なのだ……。
あの痛み……、俺は忘れない。
振り下ろされたゴルフクラブは、あの時、彼の額を血に染めた。
まともにあたっていれば、即死だった。
幸いなことに、額を切るだけで済んだ。

その代わり、彼の額には、一生、消えない十字形の傷が残った。
「貴様のおかげで、オフクロは……」
彼等母子は、日陰の存在だった。
神取賢介が政治家として脚光を浴びれば浴びるほど、それは深まっていった。悪徳政治家のスキャンダルや汚職を追及する名門政治家として注目を浴びてしまった以上、賢介にとって、彼等母子の存在は、自らの政治生命にかかわるアキレス腱と言ってよかった。
自分が、愛人の子供だと気がついたのは、そんな時だった……。
テレビに映った父親の姿……。
だが、名字が違っていた。
家の前に出ている表札は城戸と書かれていたのに、テレビに映った父の姿の下に出たのは、神取賢介という名前だった。
パパの名前をテレビが間違っていると、彼が母に言った時、母は何も言わずに玲司に向かって弱々しい笑みを浮かべたきりだった。あの時、母は心の中で何を思っていたのだろうか。玲司にも、想像できた。
きっと、悲しかったに違いない……。
神取賢介が、母に対して暴力をふるうようになったのも、その頃からだったように思う。
人目を忍ぶようにこっそり家にやってきては、母を相手に暴力をふるう神取賢介の事を玲司は憎んだ。その憎しみは、神取賢介の名前が、政界で大きくなるのに比例していた。

何が、法の番人だ。どこが高潔な政治家か。
額に傷をつけられてからというもの玲司の憎しみは募った。
神取賢介が生きている以上、母は一生、この男の陰で生きて行かなくてはならない。それならば、自分の手でこの男を殺して、母を自由にしてやる。
いつ、そう誓ったのか、玲司は覚えていない。
しかし、それは、叶えられなかった。
彼が中学に上がった年、神取賢介は遊説中に、急死してしまったのである。
死因は、急性心不全。過労が原因だった。
玲司の行き場のない憎しみが、その息子の神取鷹久に向けられるようになったのは、それからしばらくしてのことだった。
「神取一族は、俺とオフクロの仇だ。こんなことで、あきらめてたまるか」
玲司の目に、激しい色が浮かんだ。
「必ず殺してやるからな、神取……」

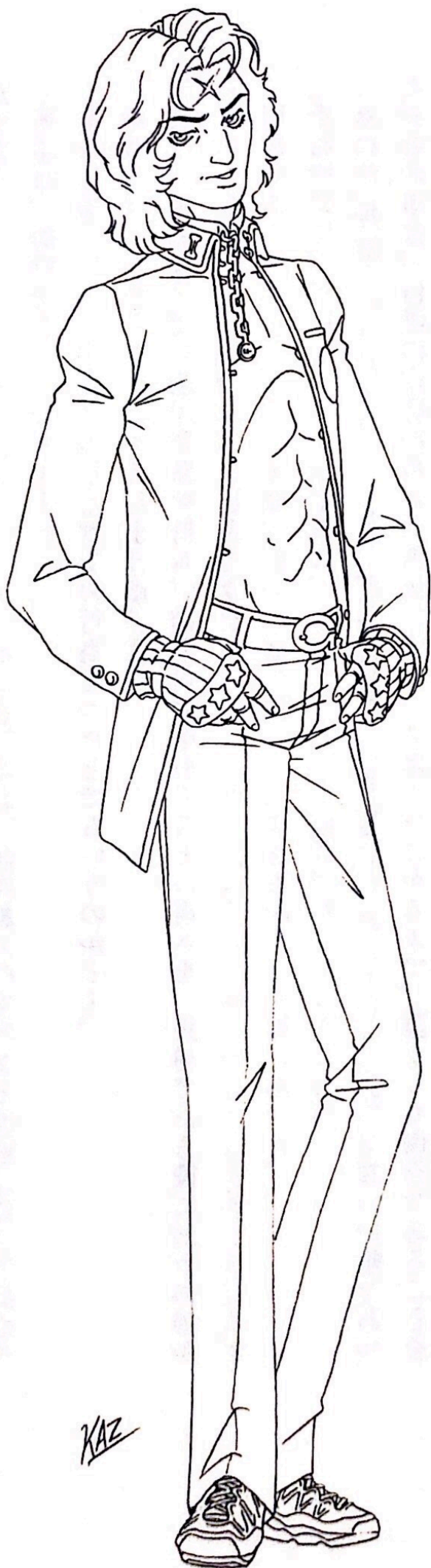
8

宮下真夜は、疲れた顔でエレベーターに乗っていた。
その後ろには、紺のスーツの男たちが、ぐったりした顔で立っていた。
やがて、エレベーターのドアが開いた。

「室長、私たちはここで」
「お疲れさま。私は、五階にいるから」
彼女は、一礼して立ち去っていく彼等に、そう言った。彼等は、宮下真夜の部下たちである。
宮下真夜は、セベク御影支社長、神取鷹久の秘書であるが、同時に支社長直轄の企画調整室の責任者でもある。企画調整室は、支社内部で行われている研究開発のすべての予算や人事を把握する一方、対外的な窓口でもあった。
「それにしても……」
真夜は、ため息をついた。
「いったい、あの少年は、どうして支社長を狙っているのかしら……」
真夜には謎だった。
〈それに、あの口ぶり。もう、何度も襲われているのに、あんな平然と……〉
よく考えてみると、真夜は、神取のプライベートな部分について、ほとんど知らなかった。
神取が、佐伯会長の紹介で入社し、彼女の勤務する佐伯商事秘書室に配属されたのは、今から二年前。真夜は、その頃、二十二歳。国立大学在学中に秘書検定にパスし、佐伯商事に入ったものの、秘書とは名ばかりで、ただの雑用に追われる毎日に飽き飽きしていた。
イギリスの大学院を卒業してきた二十六歳の神取と机を並べたのは、そんな頃であった。そして、秘書としての実務を教えるうちに、その怜悧な頭脳に魅せられ男女の関係となったのも、真夜にすれば当然すぎる成り行きだった。そこらの学歴や肩書きだけを鼻にかける連中と違って、神取には、

男として、そして真のビジネスエリートしての魅力があったからだ。
神取がセベクに異動し、今日の日を迎えるまで、真夜が密かに彼の出世のために、さまざまな手段を使って手を尽くしたのも、その魅力に惚れ込んだからである。
退屈な日常を刺激で満ち足りたものにするためにした行為は、今、彼女をもビジネスエリートのステップに上らせた。
「とにかく、このままにしてはおけないわ」
神取が、スキャンダルで失脚することは、彼女の失脚をも意味する。
それは、退屈な日常への逆戻りを意味した。
「冗談じゃないわ」
過去への憎悪をこめて彼女は、吐き捨てるようにつぶやいた。
これだけの騒ぎになった以上、ある程度、プライベートな部分も把握する必要がある。
彼女としては、仕事に関して以外に自分のことは、ほとんど語ろうとしない神取ではあっても、なにげない会話の中から、彼の人となりはわかってきたつもりではあった。が、彼が、セベクに入る以前の事、特に幼少時の事になると彼女にもさっぱりわからなかった。
エレベーターのドアが開いた。
〈とにかく、これからは、今までとは違うわ〉
そう、頷いて、彼女はエレベーターの外に足を踏み出した。

神取鷹久は、五階にある支社長室のデスクに向かっていた。
「支社長……」
秘書の宮下の声に、神取は顔を上げた。
「いったい、彼は……」
デスクの横に立った真夜が、少しすねた表情で彼を見つめていた。
「何の事かね」
「おとぼけにならないで下さい」
その口調には、少しとげが含まれていた。
「私は、支社長のことを御心配申し上げているのですよ」
切れ長の目が、ほんの少し、つり上がった。
「ようやく、ここまで来たのです。この大事な時に、支社長の身に万一の事があったら……」
「それについては、君には感謝している」
神取の右手が、彼女の白い手に重なった。
「君のまとめあげた鷹爪会のネットワークがなければ、いかに私とはいえ、この席に座ることはできなかっただろう」
「でしたら……」
宮下の指が、神取の指に絡み付いた。その目には、切なげな女の光りを宿していた。
「私に教えてください。いったい、あの青年は、何者なのですか。どういう関係で、彼は、支社長

を付け狙っているのです？」
「つまらん理由だ」
「しかし……」
真夜は、食い下がる。
「彼が支社長を襲ったのは、一度や二度ではありません。いずれも、大きな事件にならないように、処理してきましたが、このままでは、いつか、本当に……」
「確かに、少々、今回は、問題が残ったな……」
突然の凶行は、出席者すべての目を釘付けにした。
それは、彼等に大きな動揺を生んだ。
セベクの支社長が、パーティ会場で、刺殺されかけたのである。騒ぎにならない方が、おかしい。
「しかし、まさか、ああいった形で紛れ込むとはな。玲司も、考えたものだ……」
「それが、彼の名前ですか……」
神取は、無表情に頷いた。
城戸玲司。
彼は、神取にとって、十一歳ほど年の離れた弟であった。
異母兄弟である。
しかし、つい最近まで、神取は、その存在すら知らなかった。
そのことを知ったのは、父親の死んだ後のことであった。

家督を継ぐことになった彼に、顧問弁護士の口から、弟の存在を聞いたのである。
そう、城戸玲司は、彼の父が愛人に生ませた子供だったのだ。
あの厳格な父に、そんなもう一つの顔があったとは……。
玲司の存在を知った時、神取は、意外な気がすると同時に、父に対して、失望した感情を隠せなかった。
所詮は、俗物であったのか……。
それとも、自らも重圧に苦しんだ上の行為だったとでもいうのか……。
神取には、わからなくなってしまった。
父は、極端なまでの選民意識を持ち、神取の血を引くことの重さを、長男である彼に幼少の頃から、ありとあらゆる機会に叩き込んできた。
旧家である神取家は、戦前戦後、いや、遥か昔から人々を支配する立場にあった。
それゆえに、神取家の名を継ぐ者は、すべてにおいて優秀でなくてはならない。
それが、神取という選ばれた一族の血を受け継いだ者の証しであるというのが、父親の口癖であった。その事は、日常の立居振舞はおろか、学問、スポーツに至るまで、誰よりも優秀であることを彼に求めた。
その意味で父親は、完璧を絵に描いたような存在であった。
彼は、幼い頃から、その父親の重圧と戦っていたのだ。
どんないい成績をとろうと、褒められたことはなかった自分。

そして、誰でもする程度の失敗でも、神取の血を受け継いでいる以上、許されることはない自分。重圧でしかなかった。

その重圧は、高校を卒業するまで続いた。

ゆえに、父親の存在は、彼にとって憎悪の対象でしかなかった。

神取は、城戸玲司の憎悪に満ちた目を思い出した。

〈あの目は、あの頃の俺に似ている〉

〈だが、奴は、何故、俺を憎むのだ？〉

彼には、その理由がわからなかった。

父が、神取家の重圧から自分を解放するための、もう一人の自分を外で演じていたのだとしたら、城戸玲司は、自分よりも幸せだったのではないのか？

「支社長、せめて、その玲司という青年の調査だけでも……」

宮下の声に、神取は、我に返った。

「そんなに知りたいのかね、宮下君」

「支社長が、もっと大きな力を手にするためにも、私は、神取鷹久のすべてを把握しなくてはなりません」

真夜は、そう答えた。

「たとえ、プライベートであろうともです……」

「そうか……」

「文社長は、私をお信じにならないのですか……」
「いや」
彼は、首を左右にした。
「君ほど信じられる女性は、見たことはない」
「でしたら……」
「いいだろう」
神取は、頷いた。
「続きは、私のマンションで話すとしよう……」
彼は、有能な秘書の手をひき、自らの上に引き寄せた。

第二章　園村麻希の世界

1

土曜日の放課後、美術室では、肩まで降りた髪の少女が、一人、窓際でキャンバスを広げていた。時折、開いた窓のむこうから入ってくる風が、彼女の髪の上の赤いリボンをそよがせる。

「へーっ、それが、今年のポスター？」

キャンバスにむかっている彼女の後ろから、声がした。

「あ、千里」

「去年のポスターも、麻希らしい絵だったけど、今年は、ちょっと今までのとはイメージが違うのね。ちょっとシュールというか……」

「ちょっと、暗すぎるかしら？」

後ろで、彼女を覗き込む千里の意見を求める。

「んーっ、でも、こういうのも、いいんじゃないかしら。なんていうのかな、私たち高校生の心の中のイメージみたいで」

「心の中？」

「え、だって、そういうテーマで描いているんでしょ？」

「ううん。ただ、なんとなく浮かんだイメージなんだけど」
「ふーん？」
千里は、首を傾げる麻希をよそに、もう一度、絵をじっくりと眺めた。
「絶対そうよ。見る人が見れば、絶対感動するわ、この絵。この絵には、何か人の心の中にある漠然とした不安みたいなものを刺激するというか、せつない気持ちにさせるなにかがあるわ」
「そうかしら」
「でも、麻希は、いいわね。聖エルミン学園始まって以来の絵の天才だし……」
千里は、ハーッと、ため息をついた。
「それに、成績だっていいんだから。これだけの作品が描けるんだから、美大なら、どこだって合格よね。それに、ひきかえ、このあたしは……」
「あら、千里だって、たいしたもんじゃない」
「ううん。あたしには、麻希みたいな才能ないわ。ほんと、半年後には、三年だってのに、どうしよ、進路……」
「進路かぁ」
そういえば、麻希は、進路について考えたことはなかったと、改めて思った。
「私は、こうやって、絵さえ描いていられれば、それでいいんだけど……」
と、つぶやいた時、千里が、麻希の肩をポンと叩いた。
「来たわよ、彼が」

「え？」
「やぁ、まだ描いているのかい？」
美術室の入り口に、背の高い男が立っていた。
「陽介さん」
「クラブが終わったんだ、一緒に帰らないか？」
そう言いながら、彼は、麻希のもとに歩いてくる。
「じゃ、あたし、先に帰るわ」
小声で、彼女はささやいた。
「え、でも、千里」
「お二人の邪魔しちゃ悪いからね」
ニコッと彼女は、笑った。
「じゃ、麻希。また月曜日。内藤君、バイバイ」
内藤陽介と入れ違うように、彼女は、去っていった。
「なんか、僕が追い返しちゃったみたいだね。悪いことしちゃったかな……」
帰っていく千里の後ろ姿を、陽介は気にするように見送った。
「大丈夫よ」
「そうかい」
「千里は、親友だから」

麻希は、陽介にニッコリと微笑んだ。
「じゃ、僕たちも帰ろう」
「そうね」
麻希は、頷いた。
「ねえ、陽介さん」
「何？」
「実はね……」
麻希は、足元に置いた鞄から、二枚のチケットを取り出して、陽介に見せた。
「エッシャーの展覧会が、今日までなの」
「へーっ」
彼は、そのチケットを手にした。
「騙し絵で有名な画家なんだけど、陽介さん、興味ないかしら？」
「君の絵の勉強になるんだろ？　つきあうよ」
「ほんと!?」
「当然だよ」
「嬉しい!?」
麻希は、陽介の腕に抱きついた。
「じゃあ……」

顔を上げて陽介の顔を見ようとした瞬間、園村麻希の視界は、真っ白なものに遮られた。そこは、まっ白い壁に囲まれた家具も何もない部屋であった。

「陽介さん!?」

たった今まで一緒だった彼の姿は、そこにはなかった。

「ここは……!?」

彼女は、ベッドの上で横になっていた。

「何が、どうなっているの!?」

たった今まで、美術室にいたはずなのに!?

「……また、夢だったのね」

彼女は思い出した。

そして、一瞬にして、孤独が彼女を包んだ。

2

御影町の北側に、三階建ての総合病院がある。

御影総合病院。

彼女は、そこに入院していた。

「どんどん、リアルになっていくわ……」

彼女の名前は園村麻希。

聖エルミン学園二―四に在籍する高校生である。
しかし、その制服を彼女は、もう、半年近く身につけていなかった。
「まるで、どっちが現実かわからなくなってくるわ」
彼女は、恨めしげなまなざしで、まるで生活感のない、ただ清潔なだけの白い部屋を見回した。
「毎日毎日、同じことの繰り返し……」
朝の検温から始まって、規則正しい病院生活。夜九時には、消灯。ほとんどの時間を病院の個室で一人で過ごす毎日。
そんな生活と、比べたら、さっきの夢の方が、はるかに現実に生きているという実感があった。
「こっちの方が、夢だったらいいのに……?」
彼女は、ため息をついた。
春を迎え、二年に進級した直後に、彼女は、この病院に入院した。そして、ここ三〇二号室で、もう、半年を過ごそうとしている。
「高校生になって、やっと普通に学校に行けるようになったと思ったのに……」
幼い頃から病弱だった麻希は、小学校も中学校も、ほとんど病院のベッドの中で過ごした。そのおかげで、彼女は、運動会や遠足、それに修学旅行といった行事にも、ほとんど参加したことはなかった。
たまにしか学校に行くことのできない彼女には、親しい友達と呼べる者は、いなかった。
授業の時以外の彼女は、孤独な存在だった。

だから、彼女は、新しい生活にかけた。
高校では、普通の生活がしたい。丈夫になって、みんなと同じような学園生活を楽しみたい。その一念で、彼女は、治療に専心したと言っていい。
そして、彼女は、晴れて聖エルミン学園に入学した。
自由な校風で知られるこの私立高校は、学業以上にクラブ活動で数多くの実績を残していたため、さまざまなタイプの学生に人気があった。長期の病欠の際も、試験やレポートによって単位を取得させてくれるというのも、彼女がこの学園を志望した理由の一つであった。
彼女は、この学校が、今までの生活を変える最後のチャンスだと思った。
だから、入学式での、麻希の喜びは、他の入学者たちからは想像もつかなかった大きなものであった。小学校から、九年の辛抱の後に、病室のベッドの中で思い描いてきた学園生活を、今、ようやく手にすることができる。いや、手にしたいという願いが叶ったと思ったのだ。
そういった強い意志のおかげなのか、入学してからは、麻希は、週に二回の通院以外は、普通の学園生活を営むことができた。
定期的に受ける検査も、彼女の病状は、快方に向かっていることを裏付ける結果ばかりだった。医者のいいつけに従って、体力をつけることに専念したからか、それとも、体の成長とともに、病気への抵抗力がついてきたのか、それは、彼女にもわからなかった。
入学した彼女は、美術部に入った。
病院のベッドで、一人きりで過ごす時間の多かった麻希にとって、人と接するのは苦手なことで

あったが、ここでは、絵を通じて彼女にも友達ができた。
香西千里である。
そして、初めて憧れの男性とも出会った。
「今ごろ、どうしているのかしら」
麻希は、彼のことを思った。
内藤陽介、学園のナイスガイと呼ばれ、女子にも一番人気の青年である。
「夢の中では、毎日一緒なのにね……」
麻希は、そうつぶやいた。
入学してから、麻希にとって内藤は、心に秘めた存在であった。もちろん、内気な麻希には、そういった自分の想いなど口にできるはずもない。
彼女にできるのは、彼のいそうな場所を、さりげなく歩いてみせるくらいのものだった。たったそれだけのことでも、彼女にとっては、心臓が裂けんばかりの勇気のいることであった。
「でも、本当に、すべては夢だったのかしら……」
毎日、見る夢。
それは、必ず学園の夢であった。
その夢は、彼女が入院するまでの学園生活を、細かなところまでリアルに再現していた。
「もしかして、陽介さんと私は、本当につきあっていたんじゃないかしら……」
麻希は、陽介の姿を思い浮かべた。

自分と一緒にいる陽介……。
時々、手をつないでデートをしたり、また、遠足や学園祭では、みんなに、理想のカップルとしてうらやましがられる日々。
どれをとっても、ただの夢とは信じられなかった。
確かに、麻希は、陽介に片思いであった。
そういう記憶もある。
しかし……。
それ以後の記憶は、曖昧だった。
その後、自分が、どうしたのか覚えていない。
半年も入院しているおかげで、記憶がおかしくなっていると麻希は思った。
片思いだった自分に、陽介が声をかけてくれた記憶がある。
街で、バッタリ会った記憶がある。
美術室で、彼と一緒にいた記憶がある。
陽介から、家に電話があった記憶がある。
好きだったと告白された記憶がある。
陽介とデートするために、朝早くから手製のお弁当を作った記憶もある。
どこまでが夢で、どこまでが現実だったのか、麻希には自信がなくなっていた。
「いったい、どこまでが夢で、どこからが現実なのかしら……」

今いる病室にも、毎週のように彼が、花束を持って、お見舞に来てくれたような記憶もある。
今では、訪れる者もなくなった彼女の病室に、陽介だけは必ず毎週来てくれて、学園でのできごとを教えてくれる。
〈たしか、先週は、サッカーの試合の話を教えてもらったわ。そうよ、陽介さんのフリーキックで延長戦で勝ったって……〉
細かいところまで、記憶している。間違いない。
いや、本当に、そうだったろうか？
それは、夢の中での記憶ではないのか？
彼女は、自分の記憶を疑った。この記憶は、どこか違うような気がする。
「夢と現実の区別がつかなくなっているなんて……」
治療のために毎日飲まされている薬で頭が朦朧としているのに違いない。
だが……。
もしも、本当だったら……。
彼女の頬が、一瞬、赤く染まった。
が、すぐに、彼女は、首を振った。
〈やっぱり夢よ、夢なんだわ……〉
自分の現実は、この白い壁でおおわれた長方体の箱のような小さな世界だけなのだ。
と、その時、彼女の病室をノックする音があった。

ドアの向こうに人影。看護婦の検診の時間には、まだ早い。
ドアが開いて、花束を持つ男の影が見えた
もしや……。
〈陽介さん!?〉
夢ではなかったんだ……!?
そう、それは夢ではなかった。

3

黄色い帽子をかぶった男が花束をかかげて彼女に微笑みかけた。
「……稲葉くん」
「体の具合は?」
麻希は、彼の姿を見て、すべての記憶を取り戻した。
内藤陽介は、一度も病院に来たこともなければ、彼女とは口もきいたことはない。
すべては、夢の中での記憶に過ぎなかった。
毎週、花束を持って彼女をはげましているのは、この男、稲葉正男だったのだ。
「なんか、元気ない声だな」
「そんなことないよ」
「そうかな……?」

「ほんとは、ちょっと気分が悪かったんだけど」
「おい、大丈夫か。なんなら、俺、すぐ帰るからよ」
「ううん。でも、稲葉くんの顔を見たら、元気出て来た」
失望を押し殺しながら、麻希は、稲葉に笑顔を作ろうとした。
「ありがとう、稲葉くん」
「う、嬉しいな」
稲葉が照れた笑いを浮かべた。
「毎週のように来ているだろ。ひょっとして、園村、メーワクかななんて思っちゃったりしてさ、オレ……」
「稲葉くんが来てくれるのが、一番嬉しいわ」
麻希は、ニッコリ笑った。
「今日ぐらいには、来てくれるんじゃないかって、ずっと待っていたのよ」
稲葉の顔が、赤くなった。
「ほ、本当か、園村……」
稲葉の顔が、赤くなった。
「ほんとよ」
一生懸命作った笑顔で、稲葉に頷きながら、麻希は、冷静に稲葉を観察していた。
〈やっぱり、稲葉くん、私のことを……〉

麻希は、稲葉の態度になんとなく気づいていた。自分に気があるということを。だから、今、稲葉に言ったのは、それにあわせて言っただけにすぎない。
稲葉の気をひくために言った嘘であった。
だが、そうとは知らずに気をよくした稲葉は、麻希に学園であった出来事を話し始めた。
「今回のニュースはと……」
稲葉、頭に手をあてて、考えるしぐさをした。
「まぁ、あれだな。いつもどおりってとこかな。あいかわらずアヤセは、とっぴょうしもないことばっか言ってるってかんじだし……」
「そう」
思えば、入院して、最初の頃は、こうして入れ替わり立ち替わりに、いろんな人間が彼女の部屋を訪ねてきてくれた。そして、麻希が治って退院したら、あれをしよう、これをしようと言って元気づけてくれた。麻希も、すぐ退院できると思っていた。せいぜい、一ヶ月も入院したら、いつもどおりに学園に通えると信じていた。高校に入ってからは、病気も小康状態で、とりたてて体に異常を感じなかったからだ。
しかし、一ヶ月がたち、二ヶ月がたっても退院は、できなかった。それどころか、日に日に彼女が飲まされる薬の量は増えていった。たしか入院したばかりの頃は、錠剤とカプセル薬の二種類だったのに、今は、一日三回とも違う種類の薬を与えられていた。しかも、その薬も一週間すると、また違ったものに変えられていた。

そして、よく顔を見せていたクラスの人間も、その頃には訪れる姿も減っていった。そして、正式に休学するようになってからは、こうして週に一度、決まった時間に顔を出す稲葉を除いて、彼女のもとを訪れる人間は、いなくなっていた。

このままでは、私は完全に忘れられてしまう。

そうなったら……。

〈今までと同じになってしまう……〉

それだけは、絶対にイヤだった。

稲葉の気を引くような嘘を言ってでも、自分と外の世界を繋ぐものがほしかった。

そして、みんなに自分のことを覚えていてほしかった。

稲葉が来て、自分と話したことをクラスの誰かに話してくれれば、自分のことを、みんなは忘れない。そんな一念だけで、彼女は、稲葉の気持ちを利用していた。

いや、それだけではない。

彼女には、もっと別の理由があった。

「……まぁ、クラスの話っていうと、そんなもんだなぁ。あと、演劇部が伝説の芝居のなんとかを準備するとかって話があったなぁ。んーと、なんっていうタイトルだったっけ……」

稲葉は、しばし、考えこんだ。

「んーっ、だめだ思いだせねーや。オレ、頭、悪いからなぁ」

「ふふ。そんなことないわよ。こんなに、いろんなこと覚えているんだもん、すごいよ」

「そうかぁ」
少し照れつつも、うれしそうに稲葉は頭をかいた。
稲葉から語られる学園での出来事は、クラスでの話が中心だったが、時々、学園全体の行事やクラブの話もあった。
麻希の一番の目的は、その中から内藤陽介についての話題を聞くことにあった。
学園で行われたサッカーの練習試合での陽介の活躍ぶりを聞いては、その勇姿を思い描いてみては胸をときめかせ、稲葉が帰った後には、こっそり彼の活躍のイメージをスケッチブックに描いてみたり……。
むろん、麻希のそんな気持ちを、稲葉は知らない。
だから、内藤の話題になった時に、さりげなく聞く細かなことにも、彼は説明してくれた。
むしろ、自分の話で彼女が盛り上がっていると喜んでいた。
だが、麻希の本当の気持ちを知ったら稲葉は、どう思うだろう？
それでも、彼女のために毎週来てくれるだろうか？
それとも、彼は麻希への興味を失ってしまうだろうか？
それは、わからない。
稲葉は、それでも来てくれるかもしれない。
しかし……。
そうだったとしても、もう今のように内藤の話題を口にはしなくなるだろう。

そうならないためにも、自分の気持ちは、絶対に知られてはならない。

「あれ……？」

稲葉の喋りが止まった。

「なんか、見たことのある形だな」

彼は、初めて気がついたという顔で、窓の横にあるテーブルの上を指さした。

それは、中央に塔のようなものがあり、左右対象につくられていた。

「もしかして、これ」

「ええ」

麻希は、頷いた。

「聖エルミン学園か……」

しげしげと、稲葉は眺めた。

「うまくできているなぁ」

稲葉は、感心してみせた。

「園村が作ったのか？」

「退屈しのぎにね」

積み木で作られた聖エルミン学園は、麻希の心の安定剤になっているのを稲葉は知らない。

退屈しのぎと答えたが、麻希は、長い入院生活の中で学園の事を忘れていくのを恐れてそれを作っ

たのだ。
「壁の絵も新しくなっているや、新作か？」
「ええ。絵を描くぐらいしかすることもないし……」
「ふーん」
稲葉は、ベッドの後ろの壁にかけてあるその絵をみつめた。
「あいかわらず、園村、絵がうまいよなぁ」
彼は、感心した。
「これだけの才能があるんだから、将来は、画家でやっていけるよなぁ」
「どうかしら」
しかし、そう、褒められて満更でもなかった。
高校に入学したものの内気で引っ込み思案な麻希は、最初、なかなか友達を作ることが出来なかった。他人と、どうコミュニケーションをとっていいのかわからなかったのだ。
しかし、その不安は、意外なことから発露された彼女の才能によって解消された。
入部した美術部で描いた彼女の絵が、絵画コンクールで金賞をとったのである。
そして、彼女は、全校生徒の前で表彰され新聞にも写真が載り、全校で最も絵の才能のある生徒として有名になった。
不思議なもので、そうなると、絵のうまいクラスメートとして注目されるようになった。美術の時間になると、彼女のまわりには、男子も女子も、彼女の作品を見ようとして集まってくる。そし

て、彼女にアドバイスまで求めてくるようになった。
　また、運動会のクラスの旗のデザインや、文化祭のポスターなどは、絵のうまい彼女がクラスの責任者となって作るようにもなった。
「オレ、去年、文化祭用に作った園村のポスター、一枚失敬して部屋に貼ってあるんだぜ」
「まぁ、稲葉くん」
　麻希は、恥ずかしそうにうつむいた。
〈でも、今年は、どういうスケジュールなんだろう……〉
　麻希は、ポスターのことが、気がかりだった。
　文化祭の終了直前に、来年も頼むと生徒会から声をかけられていたのが、気になっていたのだ。
「そういや、……は、香西が描くみたいだな……」
「え!?」
　麻希は、稲葉が何について言っているのか聞き損ねた。
「千里が、何か描くの？」
　香西千里。
　同じ美術部にいる彼女の親友である。
　引っ込み思案の彼女に、最初に話しかけてくれた香西千里。性格は、麻希と正反対で積極性のかたまりみたいだったが、彼女の絵の才能を最初に認めてくれた一番の理解者だった。
「なんでも、園村の代わりにって立候補したみたいだぜ、文化祭のポスター」

「そ、そう」
麻希の声が、少し震えていた。
「入院している園村に負けないくらいの作品を作って、びっくりさせるって言ってたから、描き上がったら、きっと見せにくるんじゃねーかな」
「千里が描くんだ……」
「な、なんでも……ない」
「お、おい、どうした園村。顔色が……」
麻希は、稲葉の何気ない一言に、激しく動揺した。
「おい、園村」
自分よりも、いい作品を作る……!?
〈そんな……〉
だって、私が描くはずだったのよ……。
入院した時に、生徒会長だって、そう言ってくれたのに、どうして!?
誰にも言っていなかったが、麻希は、かなり前から今年の文化祭のポスターの準備をしていた。
去年以上のものを発表しようと力を入れて作品にとりかかっていたのだ。
彼女にとって、このポスター作りをしている時だけが、自分の病気への不安を忘れられる時間だった。ポスターを描いている時だけは、自分が病室ではなく、学園にいるような気持ちでいられた。
いわば、これがあったからこそ長い病院生活にも耐えてこれたのだ。

病室にいても、学園で最も重要な行事に参加している。
そして、この行事の顔を任されている。
そんな自負心に麻希は支えられていた。
が、そんなプライドは、たった今、崩れ去ってしまった。
〈私じゃなくてもよかったんだ……〉
よりにもよって、千里が描く……。
麻希の目の前が、真っ暗になった。
そんなはずは……、そんなはずは……。
もう、自分は学園に必要がないというのだろうか……？
いや、そんなはずはない。
そんなはずは……。
「お、おい、園村」
稲葉は、突然、糸の切れた人形のようになった園村に驚いた。
〈いったい、どうしちまったんだ!?〉
さっきまで、ニコニコしながら話を聞いていたはずの園村が!?
「園村!?」
「…………」
「!?」

「こんなの、……、じゃ……ない」
うつろな目で、麻希は、何かをみつめていた。
稲葉は、その視線を追った。
麻希の目は、積み木で作った学園に向けられていた。
「お、おい。どうしたっていうんだよ、園村」
こんな園村を見るのは、彼は初めてだった。
「園村、しっかりしろよ」
稲葉は、彼女の肩に手をかけた。
そして、はっきり聞いた。
「こんなの・わたしの・げんじつ・じゃ・ない……」

4

泣き声が聞こえる。
誰の泣き声だ。俺の？　いや、俺ではない。
では、誰の声だ。
彼は、何かを見ていた。
真っ暗な空間の中で、たったひとつだけ動いているものをだ。
それは、遠くでうずくまる黒いワンピースの少女……。

頭に黒いリボンをつけた五歳くらいの女の子が、自分に背を向けて泣いているのだった。
いったい、この少女は、なぜ、ないているのだろうと彼は思った。
父親にしかられたのか？　それとも、誰かにいじめられたのか？　しかし、それとは違う何かを彼は感じた。
どこかで、見たことのある情景だ。何かに似ていると彼は思った。少女は泣きながら何かを訴えているようだった。そして、彼はそれを聞こうと耳をすました。嗚咽の合間に聞こえる声は、パパ……パパ……と、言っているように聞こえた。
〈これは……〉
彼は、直感した。
この子は、何かに迷って泣いているんだ……。
少女は、泣きながら、誰かが正しい道を教えてくれるのを待っているのだ。
〈なぜ、それがわかる？〉
彼は、はっと気がついた。
〈どうやら、今、俺は夢を見ているんだな……〉
ここが意識と無意識の狭間であることに、神取は気づいた。
〈夢は、自分の意識の中を写す鏡と言うが……〉
そんな本を読んだ記憶があった。
〈だとすると、この少女はなんだ？〉

自分の無意識が作り出した幻影のようなものだというのはわかっている。
だとしたら、この子は俺の中のなんなんだ？
彼の頭の中の起きている部分が、分析しようと考えをめぐらせた。
〈わからん……〉
〈いったい、なぜ、こんな夢を見ているんだ……？〉

「文社長、どうかなさいましたか」
真夜の声が聞こえた。
「夢か……」
目の前に立つナイトガウン姿の真夜に、神取は気がついた。
彼女は、両手にブランデーグラスを二つ持っていた。
「まるで、うなされていたようでしたが……」
「ああ、そのようだ」
彼女の手から、神取はグラスをとった。
ここは、神取のマンションである。
二十畳はあるリビングのソファに崩れるように彼は座っていた。
「ここ、しばらくは、何かとお忙しかったですから、疲れが出たのですね」
彼女は神取の隣に腰をおろして、神取の手のグラスに自分のグラスを重ねた。

ソファの正面の大きな窓の外には、闇に包まれようとする街が見える。かすかに残った赤い太陽の光は、さっきまで燃えていた何かのあとのようだった。
「そうかも、しれないな」
彼は、頷いた。
「で、どんな夢ですの？　まさか、会社の夢ですか？」
神取は、首を左右にした。
「いや、とるに足らん夢さ」
が、不思議な夢だった。
「あまり、良い夢ではなかったようですね」
真夜の顔が、神取の目の奥まで入ってきた。
「こんなに、額に汗をかいて……」
彼女は、手のひらでやさしくそれをぬぐった。
「君は、やさしいな……」
「あら、今ごろお気づきになりましたの？」
「ああ」
「私にとって、支社長は……」
「君……」
神取が言葉を止めた。

「どうかしまして?」
「ここは、私のプライベートな空間だ。ここでは、支社長と呼ぶ必要はない」
「……はい」
真夜の美しい顔に、恥じらうような色が現われた。
が、その言葉は、彼女のプライドをも同時に満たした。
「では、これからは、そう呼ばせていただきます」
神取は、黙って頷いた。
「それから……」
真夜は、潤んだ目を神取に向けた。
「経理の人間が、ついに社長の隠し口座の秘密を掴みました」
「ほぉ」
真夜が言ったのは、セベクの神田社長の事である。
「興味深いな」
「今、密かに、この金の流れを追わせています」
「あいかわらず、君の仕事ぶりはたいしたものだ」
「おそらく、最終的には佐伯商事の森川常務のところに行きつくでしょう。そうなれば……」
「また、あの老人か。金の亡者だな……」
「とにかく、これは、連中を葬り去るチャンスです」

「そうだな……」
神取は、頷いた。
〈まず、醜い老人たちから滅んでもらわなくてはな……〉

5

「君も、呼ばれて？」
「まぁ、女史の誘いは断われないからな……」
「それにしても、今日は、いったい……」
大きな円形テーブルで隣り合った紺のスーツの男が二人、小声でささやいていた。
そのテーブルには、十五名ほどのビジネススーツの男女が着席していた。エリート然とした彼等は、すべて二十代後半から三十代前半といった年齢に見える。
「どうやら、みんなグループの社員みたいだな……」
「本当か？」
「ああ、俺たちの正面にいるのは、鉄鋼の総務だぜ。見たことがある。その二人隣にいるピンクのスーツの女は、商事の秘書課だと思ったがな……」
そこにいるのは、佐伯グループの中枢を担う企業で、総務や経理を担当している社員たちばかりのようだった。しかも、集まっているのは、皆、彼等二人と同じように、いずれも、一流と言われた大学を優秀な成績で卒業した生え抜きの社員たちのようだ。

彼等があたりの様子を伺っていると、オレンジ色のスーツの女性が入って来た。
「おっと、おでましだ」
一冊の大きなファイルを片手に入ってきたミニスカートの美人は、フロアにハイヒールのかかとの音を響かせながら、たった一つだけあけられた席に腰をおろした。
宮下真夜である。
「さて、そろっているみたいね」
彼女は、全員の顔を見回した後、ゆっくりとした口調で話しはじめた。
「今日、このホテルに秘密裏に集まってもらったのは、他でもないわ」
全員が、彼女に注目した。
「佐伯グループの危機について、総務・経理担当のあなたがたに教えておきたいことがあるからよ」
「危機……!?」
「どういう意味ですか?」
意外な発言に、皆、ざわめいた。
「この中に、倒産でもしそうな会社があるってことですか?」
「いえグループ各社は、単独で、それぞれ成長を続けているわ」
「じゃあ、いったい……!?」
「寄生虫よ……。佐伯グループは一部の寄生虫に食い荒らされているのよ」
その言葉に、全員がシーンとなった。

「どうやら、全員、うすうすは感じていたようね」
なめまわすように、真夜は視線を全員に、はわせた。
が、誰もが彼女の視線を避けるように、うつむいてしまった。

佐伯グループの歴史は浅い。
戦後、満州から引き上げてきた現会長の佐伯孝三が一代で築き上げたのである。
今では、立志伝中の人物として知られている彼も、かっては仲間とともに横浜や横須賀の進駐軍基地からの物資の横流しを受けては、渋谷や新宿の闇市で売ることで生計を立てていたのである。
そうやって得た金で彼は、小さな商事会社をスタートさせる。グループの発祥となった佐伯商事である。佐伯商事は、朝鮮戦争特需の影響を受けて急成長をとげた。それまで米軍内で培ってきたコネをフルに使い、軍用物資の調達を任されたのである。
軍からの大量の発注は、商品を右から左に流すだけで大量の利益を佐伯商事にもたらし、みるみるまに佐伯の名は実業界で大きなものになっていった。
「佐伯グループは、今や南条コンツェルンと日本を二分する勢いであるだなんてマスコミは取り上げているけど……。南条コンツェルンが、日本を代表する真のエスタブリッシュメントであるとしたなら、佐伯グループは、いまだに成り上がり企業でしかないわ」
宮下の言葉は続く。
「その理由が、徳心会を牛耳るあの男にあるのは、あなたたちだってわかっているでしょう?」

徳心会とは、佐伯会長の命名したグループの政策や戦略の協議機関である。企業の近代化のために、自らのワンマン会社からの脱皮を目指して佐伯孝三によって十年前に設立された。百社を超える佐伯グループの中で、中核となる十社の社長がメンバーとして選ばれている。

グループのオーナーである佐伯会長、それに佐伯商事社長の藤井、常務で佐伯情報通信社長を兼務する森川、佐伯電工の吉永、佐伯建設の岩沢に銀行、証券、鉄鋼、不動産の主要企業に、どういうわけかセベクの神田社長も最近になって加わっていた。

「誰のことかは、あなたたちもわかっているわね。佐伯商事の常務、森川隆雄のことよ」

森川は佐伯の片腕とまで呼ばれる男である。

衣類を作る縫製品工場を経営していた彼は、佐伯孝三の持つ強大な販売力に驚嘆し、自分の工場の従業員ごと佐伯商事入りした伝説を持つ。この工場のおかげで佐伯商事は、朝鮮戦争の際には、商品を右から左に流すブローカーから、米軍から受けた注文のシャツや靴下を自社工場で作るメーカーへと転換し、莫大な利益を上げたと言われている。

いわば、森川なくして、佐伯の成長は語れないくらいの功労者なのである。

その森川を真夜は、寄生虫と断言した。

「佐伯会長に忠誠を誓う表の顔に隠れて、グループの人事や事業計画を公正に評議すべき徳心会に自分の側近ばかりを送り込み、そして、グループ各社の人事では、自分の息のかかった人間にだけポストを与える。

あなたたちは、そうやって自分の頭を抑えられているよ」

真夜の言う通りだった。
彼等は、日本を代表するとまで言われた佐伯グループで、思う存分、自分の腕を振るおうと入社してきたが、数年で、皆、夢砕かれていた。
仕事の実力が、昇進に左右しない現実のおかげである。
どんなに大きな利益を上げようと、何かを成功させたとしても、そんなことよりも、あるグループに親しい人間にかなわなかった。また、上司や先輩で、能力的に優れた人間に限って左遷とも言われる人事を受け、替わってあるグループの息のかかった人間が後任としてその席についた。
そのグループの持つ力の強さに、誰もがあきらめていた。
その結果、実力のある者は、自分の取引先や研究ごとライバル会社に移り、そうでない者は、会社にあきらめの気持ちを持ったまま適当に仕事をするか、もしくは積極的にグループと接触して出世を狙うか、入社して数年するとその三つに別れた。
佐伯グループの主だった企業は、こういった倦怠感に包まれていた。
「しかし……」
「なぁ」
それぞれの席で、同様の反応が起った。
ここに集まった彼等もまた、あきらめに流された日々を過ごす者たちに変わりはなかった。
「この徳心会のメンバーの何人かが会長に隠れて共謀し、グループを私物化している証拠をわたくしは掴んだわ」

「本当ですか！」
「このファイルには、セベクの神田社長が、情報通信や鉄鋼といったグループ各社の紹介と称して資材取り引きを行った架空の会社の銀行口座への取り引きの記録が記されているわ」
真夜を囲んだ全員が、驚きの声を上げた。
「この架空口座こそ、森川常務たちの裏金作りのためのものに間違いないわ」
それは、大きな発見だった。
「どう？　これだけでも、彼等に打撃を与えることができるわ」
「し、しかし……、それを、いったい誰が……」
真夜は、おどおどした顔で彼女を見つめる男に、ニッコリと笑いかけた。
「心配いらないわ」
そして、ドアの向こうにむかってこう言った。
「そろそろ、お入りになって下さいな、神取支社長」
「!?」
そこにいる全員が、真夜の呼んだ名前に仰天した。

「……はっきり言おう。会長以外に、誰もグループの今後のことなど、考えていないのだ。
彼等が考えているのは、このグループを食い物にすることだけだ。
このことが、現在の佐伯グループに何をもたらしているかわかるか？」

彼等は、神取の言葉に聞きほれていた。
若手社員の彼等にとって、神取こそカリスマだった。
海外の大学院を卒業し、佐伯会長の秘書として仕えた後、グループのいくつかの会社で着実に実績を見せ、二十八歳という若さでセベクの支社長に任命された男。
佐伯グループのどこを捜しても、たった二年やそこらで、ここまで出世した人間はいなかった。
おまけに、神取は人の能力を見極め、その使い方がうまかった。実力本位で部下を評価し、能力のある者を大切にした。それが、若手の中での神取人気に繋がっていた。
「おびただしい不正、癒着は、グループをじわじわと腐敗させていっている。が、今はまだいい。会長という重しが彼等の頭の上にあるうちは……。だが、近い将来、佐伯会長が死んだとしたら？
その時、彼等は、今以上の力を手にするだろう。
その時、確実にグループは崩壊する。
そして、最もそのあおりを食うのは若い我々だ」
佐伯会長の死という言葉に彼等は敏感に反応した。
もし、本当にそうなったら……。
彼等の胸中は不安で充たされた。
「神取支社長、我々は、どうしたらいいのでしょう」
「正直に言って、今後が不安です」
「優秀な人間は次々に辞めていっていますし……」

口々に訴える彼等の目の奥にあるものを、神取は読みとっていた。
〈やはり、犬だな……〉
自分たちの餌の話になって、はじめて反応するとは……。
〈ただの犬だ〉
人間には、二つあると神取は思っている。
飼う側と飼われる側だ。
むろん、ほとんどの人間が後者であることは間違いない。
仕事はでき、多くの部下を使っている人間でもそうだ。
そして、ここにいる連中もまた、誰かに飼われたいと思っているだけだ。
森川という飼い主に選んでもらえなくて、他に餌をたくさんくれる飼い主がいないのか、森川よりも自分たちを可愛がってくれる主人はいないかと、会社という柵の中で、ものほしげに舌を出してウロウロしている。
その程度にすぎない。
佐伯グループが心配なのではない。自分の餌のことが心配なだけだ。
〈しょせん、くだらん連中なのだ……〉
だが、犬には犬なりの役割はある……。
「私も、君たちと同じ若手の一人として、今の状態に不安を感じている」
神取が、彼等の一人一人を見ながら、再び口を開いた。

張りつめていた緊張が解ける。
「そこで、私は、この際、グループ内にはびこるすべての不正を調べ上げ、佐伯会長に報告することで、これらの腐敗を一掃する覚悟をした」
意外な提案に、その場にいた者は全員、驚いた。
「君たちには、その協力をお願いしたい」
神取は、彼等に丁重に頭を下げた。
「もちろん、その提案は私個人の責任において行うつもりであり、君たちを巻き込むつもりはない」
神取は、若手を代表して、現経営陣を告発すると彼等に約束したのだ。

第三章　デヴァシステム発動計画

1

［ミスター神取、実験は、とても順調だ］
ニコライ博士は、上機嫌だった。
［それは、良かった］
大きな液晶スクリーンに映るデヴァシステムを見ながら二人は、英語で話していた。
巨大なデヴァシステムのゲートの前には、数種類のセンサー類を付けた兎が数羽、研究員によって抱かれていた。
［彼の報告では、かなり難航しているようでしたが……］
［彼？］
ニコライ博士の顔が不機嫌になった。
彼とは、神取とニコライの後ろに立っている研究所長の山中のことを指していた。
山中は、英語が喋れないので、二人が自分のことを話しているのに気がつかず、ひたすら神取の機嫌を伺うように愛想のいい顔をしている。
［彼は、私の研究の意味を理解しておらん。おまけに、予算の事ばかり気にしている］

「申しわけありません。彼は凡人ですから、この研究の持つ意味を理解できないのでしょう」
山中を研究所長に選んだのは神取自身である。が、そんなことは、彼はおくびにも出さない。
「後で、私からも厳重に注意いたします」
「うむ」
だが、ニコライの機嫌はそんな言葉では戻らない。表情は不機嫌なままだった。そして、彼は神取に、こう言った。
「目下の課題は、空間ノイズの排除だ」
「ノイズ?」
「そうだ」
ニコライは、頷いた。
「それぞれの空間をねじまげて、接続させ、そして、その間に我々の空間で作ったゲートを接続することで瞬間移動を可能とするのだが、どうも、その空間にノイズが発生している」
ニコライが説明するノイズとは、一種のエネルギー波である。
「だが、心配いらん。九十九%のノイズの原因はわかった。いずれも単純に物理的な波動だ。すでに、ノイズのパターン解析は終わっている。デヴァシステムから出すエネルギー波長をずらすことで防止できる」
「博士、モルモットのセンサーチェック完了しました」
「電力ユニットへのエネルギーサプライ、システム作動容量に達しました」

「座標領域の指定をお願いします」
コンピューターディスプレイに向かった研究者たちが、次々に博士に報告をもたらし、指示を求めてくる。
「座標領域、X一六・Y二一・Z四二」
博士が、そう答えると、液晶スクリーンの巨大画面に、グリーンのワイアーフレームで描かれた地球のグラフィックが投影された。赤く光る点は、どうやら研究所の位置を示しているらしい。
[了解しました。移送座標X一六・Y二一・Z四二、設定します]
キーボードに入力する音が響いた。
それと同時に、ワイアーフレームの球体が動き始めた。そして、もう一つ、赤い点がついた。これが、博士の指定した移送座標らしい。
[移送計算スタートします]
神取は、じっとスクリーンを見ていた。
ワイアーフレームの球体が、ぐにゃりと歪んだ。赤い点の部分が球体の内側にへこんだ。そして、それは、もう一つの赤い点の部分にまで伸び、それと接触した。
接触した部分が拡大したグラフィックで別に映し出された。
赤い点と点は、重なっているわけではなかった。
一つのパイプのようなものが、それぞれの点の部分の間にはさまれていた。
[あのパイプの部分が、デヴァシステムのゲート部分だ]

そう、円錐形の装置のことである。
［モルモットは、このパイプを抜けるようにして、ロンドンの街頭に送られる］
画面上には、横長の棒グラフが一本現われ、左から右にグレイに塗りつぶされていっている。
グラフの下には、移送処理計算中と英文で表示され、処理終了予定時刻がカウントダウンされはじめている。二分三十秒と書かれた数字が、どんどん小さくなっていく。
その数字を見つめるうちに、ようやくニコライの機嫌が戻ってきた。
［しかし、わからない。日本の企業は、こういった研究には絶対に投資をしないと聞いているのに、あなたは、どうして、こんなどうなるかわからないような物に、これだけの金額をつぎ込んでくれるのかね？］
［博士の理論が証明されれば、佐伯グループは世界中の物流を支配することになります］
神取は、なんでもないという顔で答えた。
［しかし、その程度のことでは、投資した金額を回収できるとは思えんが……］
［むろん、地球レベルの規模ではそうでしょう。しかし、宇宙レベルで考えた場合、話は変わってきます］
［なるほど、理論を宇宙開発に応用するというわけか］
［そうです。宇宙ロケットを打ち上げ、ステーションを建設することを考えれば、十分、ビジネスとしては採算がとれるのです］
［なるほど、それなら理解できる］

博士は、納得したという表情を見せた。
「それだけの大規模な目的で、この研究をバックアップしてくれているのなら途中で手をひくなどと言うことはないと思っていいようだ」
過去に、ニコライは、アメリカやヨーロッパの会社や研究機関から資金援助を何度か受けたものの途中で打ち切られた経験が何度もある。
「君たちの会社から予算を貰っておきながらも、どうも不安で……。特に彼の態度が……」
ニコライは、後ろの山中の顔をチラリと見た。
「彼のことでしたら、とるにたらん人間ですから気にしないでいただきたい。すべては私の責任で行っていることですから……」
〈山中め……、役にたたん男だ〉

2

「町中、どこにいっても君のポスターだらけだよ。ほら、そこも」
陽介は、学園の近くにあるコンビニエンスストアの入り口を示した。
自動ドアの横のガラスのウィンドウに麻希の描いたポスターが貼られていた。
「ほら、道の反対側にも！」
いたるところに聖エルミン学園の文化祭のポスターが貼られている。
「なんだか、恥ずかしいわ」

麻希は、次々に陽介が指さす自分の絵に顔を赤らめた。
「恥ずかしがることないさ」
「でも……」
「ほら、あの子なんか、麻希のポスター、さっきからじっと見つめてるよ」
白い服の小さな女の子が、反対側の通りに貼られたポスターをさっきからじっと見つめている。
「ほんとだ」
今年のポスターは学園の外にも貼り出すとは聞いていたが、ここまでとは麻希は思わなかった。
おかげで、こうして陽介とのデートの最中にも何度も出くわし、そのたびに顔を赤らめてしまう結果となった。
しかし、それは、そんなに悪い気分ではなかった。
特に、陽介が、見つけるたびに、自分のことのように喜んでくれているのが嬉しかった。
〈千里に感謝しなきゃね……〉
これも、千里が自分に気をつかってくれたからだと、彼女は思った。
おかげで、今年は、去年以上に力を入れて描いた自分の絵がポスターとして選ばれたのだ。
「学園祭が終わったら、いよいよだなぁ」
「え？　陽介さん、試合なの？」
「だったら、もっと楽しい顔で言うよ」
陽介は、麻希に苦笑いを見せた。

「何かあったかしら？」
「ほら、あるでしょ、三年になる前のお説教会が」
「あ、進路相談」
「そう」
陽介は、大きく頷いた。
「まぁ、麻希には関係ないか。これだけの絵の力があるんだから、どこの美大だって合格間違いないよ」
「そんなこと……」
考えてもいなかった。
三年になったら、進路の問題があったのだ。今みたいなクラブ活動も春までで、そこから先は引退して受験に備えるのが習わしだった。
「麻希は、美大で勉強するんだろ？」
が、彼女は、そんな先のことまで考えていなかった。
ただ、毎日、絵を描いてすごせればそれでいいと思っていた。
「陽介さんは？」
「僕かい？　僕は、普通に大学を受けるのかなぁ」
「なりたくないな、三年なんか……」
「何いってんだよ、そんなことできるわけないだろ」

「だって……」
来年になったら、今みたいな生活はできなくなる。それなら、なりたくないと麻希は思った。
〈それに……〉
三年になったら、翌年は卒業……。
そうなったら、陽介ともはなればなれになってしまう。
今みたいに毎日顔をあわせられない生活なんて考えられなかった。
〈このままで、いたい……〉
二年のままで、このまま……。
「だって、学校が変わったら会えなくなる……」
会えなくなる？
麻希は、自分の言った言葉に驚いた。
話したこともない人なのに、なにを言っているのだろ、私？
そうよ、内藤さんは私のことなんて、きっと知らないわ。
なのに、どうして彼は、こんなに私と親しいの！
〈夢！〉
また夢なのだ、これは……。
〈夢なんてイヤ！　私は本当の学園に通いたいの！〉
「まいが作ってあげるです」

麻希の目の前に、いつのまにか白い服の女の子がいた。
「本当の学園を作ってあげるです」
「あ、あなたは、誰……？」
〈どうして自分の考えがわかるのだろう。そうだ、夢だからだ……〉
白い服の幼女は、どこから取り出したのかコンパクトを開いた。
「最初に、あのお兄ちゃんの本物を連れてくるです」
「えっ!?」
コンパクトが輝いた。
内藤陽介が行方不明になったのは、それからしばらくしてからだった……。

［おかしい。これで、空間と空間の接合には成功しているはずなのに……？］
ニコライ博士は、信じられないという表情で液晶スクリーンを見つめていた。
順調に実験が成功しているのなら、そこには、イギリスの首都ロンドンの映像が衛星回線を経由して送られてくるはずだった。
しかし、画面は砂嵐のようなザップ状態で、なんの映像も映っていなかった。
［モルモットの位置特定急ぎます］
［博士、何が起ったのですか……］
神取は、ニコライに尋ねた。

「計算は完璧だったはずだ……」
ニコライ博士は、首をひねった。
「モルモットからの電波キャッチしました。液晶スクリーンに投影します」
やがて、画面に映像が浮かんだ。
「これは……!?」
ニコライは、その画像を見て驚いた。
「位置も出してくれ」
オペレーターは、画面上に、もう1つのウィンドウを出した。
そのウィンドウには、ワイアーフレームの地球が映し出されている。
「ポイントX〇二・Y五一・Z〇一だと!」
「それが、この場所ですか……」
映像を神取は、見ていた。
あたり一面に広がる草や木は、熱帯特有の形をしていた。
「そうだ。アマゾンの原生林、モルモットがいるのは、そこだ」
ニコライは、複雑な表情で映像を見つめていた。
「制御に失敗した」
残念そうな顔でニコライは、そう言った。
「原因をこれから調査しなくてはならない」

「しかし、セベクとしては、大成功です。これで博士の研究に将来性のあることがはっきりしました」

神取は、賞賛を贈った。

〈これで、俺の目的はかなえられる……。

これから、行うことなど、それに比べれば、その時までの時間潰しにすぎない……〉

博士への賞賛にわくコントロールの中で、一人、神取の目だけが邪悪な輝きを見せていた。

3

「君も、考えたものだ」

社長室のデスクに向かいながら神取は、一冊のファイルを見ていた。

「しかし、今回ばかりは、君の辣腕さには感心したよ。常務一派を潰すために、新たな派閥をまとめあげるだけではなく、ここまで証拠を集めてしまうとはな……」

ファイルには、森川常務派の隠し口座と、その架空取引のすべてが記録されていた。

そのやり方は、巧妙をきわめたものだった。

外注や資材購入先と、各社が直接取引をせずに、間にいくつかの名前だけの会社の伝票を通し、そこで抜いた利益をストックするという方式だった。

グループ会社のうち、森川の息のかかった企業の十数社が同様の方法で数億円の金を蓄えていたのだ。これだけの証拠があれば、森川は、確実に背任横領で失脚する。

「これは、大スキャンダルだな」
　ここに記されている企業の社長たちが関与しているとしたら、グループの主要メンバーの半分は失脚する。企業としてのイメージダウンは、さけられない。
「すべて、鷹爪会のメンバーの努力によるものです」
「そうか……」
　そんなことは、神取には、どうでもよかった。
　とりあえず、真夜のおかげで、思ったよりも順調に自分の目的は果たせそうだった。これだけの取引材料があれば、たいていの要求は呑むだろう。
「肝心のデータは、どこに？」
「このフロッピーの中に……」
　真夜は、ケースに入った一枚のフロッピーディスクを神取に渡した。
「ここまでの証拠を集めた彼等の努力には、報いてやらなくてはな……」
「文社長のお言葉は、彼等に伝えておきます」
　東京の中心、丸の内は佐伯グループの本拠地である。
　そして、グループのトップに立つ佐伯商事は、十三階建ての近代建築で、それは、東京駅を見下ろすようにそびえていた。
　その佐伯商事の十三階の役員専用会議室では、グループ最高の協議機関徳心会の例会が開かれて

いた。ロの字形に広がる会議テーブルには、十名ほどからなる各社の代表が集まり、そして、テーブルの前には一台ずつラップトップのコンピューターが置かれ、その液晶ディスプレイには、協議事項のデータが常に表示されていた。
しかし、今、テーブルを囲んだ彼等の間に、容易ならざらぬ気配が漂っていた。
「信じられません、なぜ、セベクに、しかも御影町の支社だけにグループの優秀な研究員を集中させる必要があるのですか！」
不快な態度を見せているのは、佐伯電工の社長、吉永寛である。
ディスプレイに映っているのは、グループの新たな人事計画書であった。
「いったい、セベクは、どういうつもりかね。うちの研究部門をつぶすつもりかね。いくらグループといっても育てた逸材をセベクに取られる義理はないぞ」
吉永は、ギロリとセベク社長の神田泰夫の顔を睨みつけた。
「こんな無謀な人事、私は認めん！」
「それも、御影支社だけに人材を集中させるというのも理解できん」
あきれたように言ったのは、佐伯建設の岩沢則雅社長だった。
「天才科学者のニコライ博士だけで、御影支社は、いくら研究費を使っているのか、君も知っているだろうに。セベクがグループにどれくらいの売り上げを貢献していると思うのだね。寝言も大概にしたまえ」
「神田社長、あんたは何を考えて、こんな提案を持ってきたんだ？　あんたも技術者あがりなら優

秀な技術者の価値ぐらいわかっているのではないのかね？」
佐伯重工の河森社長が、自分の真正面に座るセベクの神田社長を非難していた。
しかし、神田は、何も言い返さない。
「神田社長、聞いているのか！」
河森が、神田の態度に腹を立てても、彼は、まるで魂の抜けたような目をして、ただ黙っている。
「話にならんな」
「神田君は、本気なのかね？」
会議室のあちこちで、ざわめきがおこった。
グループ各社は、それぞれ独立した企業体として、これまでやってきたのだ。その慣例を破る提案をしているには、あまりに態度が心もとない。
「森川常務、あなたは、どうお考えなのですか!?」
吉永は、森川に助けを求めるような視線を送った。
「左様、セベクが研究開発を強化するのは、グループとしても支援の必要はあるが……」
隣に座る佐伯会長に対して遠慮しながら、口を開いた肥満した老人が、佐伯情報通信の社長にして、佐伯商事常務の森川隆雄である。
「私は、この提案こそ、現在の硬直化した佐伯グループに与える刺激として適当なものだと思うがね」
そう言って森川が頷くと、数人が、同じように頷いた。

「細かなことについては、これを提案した神取君から直接聞くというのは、いかがですか、会長」
「任せる」
「では、神取君。許可が下りた、入りたまえ」
森川が、そう言うと、ドアがあいて神取が入って来た。
それを見て、吉永や河森は、驚いた。
〈仕組まれたのか!?〉
過半数のメンバーの同意を取り付けたような会議の進行といい、この神取の登場といい、あまりにもタイミングが良すぎる。
が、神取は、無表情のまま佐伯会長と森川常務の間に立っていた。
「では、今回のセベク強化計画について、私からお話しいたします」
それは、デヴァシステムの実験成果と、今後、佐伯グループ内で応用できる分野のビジネスについての話だった。
たしかに研究そのものは、画期的な内容であり、これが実用化されれば、将来にわたって莫大な利益がグループに転がってくること間違いないと誰もが思った。
しかし、吉永の疑惑は、その話で深まった。
〈おかしい。なぜ、森川常務は、こうも神取に目をかけるのだ……?
それに、神田の顔色がおかしい。何かあったというのか?〉
岩沢もまた、この席の不思議な空気に気づいていた。

〈何故、徳心会に、あの森川が神取を出席させたのか？
もしや、神田を見切って、神取をあの椅子につけるつもりか？〉
この徳心会は、あくまで佐伯グループ各社の責任者の会議である。なんらかの事情によって社長が出席できない場合にも代理は認められない閉鎖的なものである。
これまで、こういった参考人を招いたことなどなかったのに、なぜ、今回に限って神取が呼ばれていたのか？
森川派とは距離をおく立場の者たちは、それが気掛かりだった。
だが、それは、森川派と呼ばれる佐伯銀行、佐伯鉄鋼、佐伯証券などののメンバーにしても同じだった。
〈神取め、いつのまに常務にまで取り入ったのだ……〉
彼等の神取を見つめる目には、そういう色が濃く浮かんでいた。
〈ふっ、俗物どもめ……〉
神取は、彼等の感情などどうでもいいという態度で、出席者たちの顔を見渡しながら説明を続けていた。
「……という状況から、セベク御影支社においてのニコライ博士の研究を早急に実用化することこそ、今後の佐伯グループを左右するまでの力となりうるのです。そのため、早急に別紙の人材を補強いただきたい」
神取の説明は終わった。

「では、よろしいですか、会長」
佐伯会長に、森川が目配せした。
軽く佐伯が頷くのを見るや、森川は議事を進めた。
「では、この件の採択に関して挙手を」
さまざまな思惑を胸に秘めながら、出席者は、それぞれの結論を出した。
そして、上がった手を見て神取は、ニヤリと笑った。
セベク側の提案は、賛成八票、反対三票で、可決された。
徳心会は、デヴァシステム構築をグループ最優先事項とし、そのプロジェクトについては、一介の支社長にすぎない神取鷹久に全権を与えた。

会議室には、佐伯と神取の二人だけが残っていた。
窓の外の景色には、少し赤い色が下りてきていた。
佐伯孝三は、深々と椅子に体をうずめたまま、その景色を眺めていた。そして、神取もまた、その後ろに立って、ただ外を見つめていた。
「森川と、どういう取引をしたのじゃ、鷹久……」
佐伯は、ため息をついた。
「いえ、なにも……」
「わしには、だいたい想像がついておる」

佐伯が、鋭い目を神取に向けた。
そして、神取の目を見ると、再び、窓の外に視線を移した。
「まぁ、いいだろう」
今、この若者の胸の中にあるのは、自らの野心だけだ。
〈だが、それでいい……〉
それが若者というものだ。それに、かつての自分も、そうであったのだ。
そう佐伯は思っていた。
「鷹久、お前、これからどうする？」
「は？」
「森川をどうする？」
「いえ、なにも……」
意外な佐伯の言葉に、神取は驚いた。
〈すべてわかった上でのことだというのか……!?〉
いや、そんなはずはない。
「お前、驚いているようだな」
佐伯は、窓ガラスに写った神取の表情に笑った。
「い、いえ」
「ふっふっふっ。まぁいい。この程度のことで、敗れ去る男であるのなら、そこまでの男じゃ……」

その笑いには、なんとも底知れぬものがあった。
「どうも、年をとると、いろんな意味で守りに入ってしまう。いかんことじゃ。守りに入った人間は、いかん。森川たちの出方によっては、わしも、いろいろと考えなくてはならんな……」
佐伯の目が鋭く光った。
「鷹久」
「はっ」
神取は、佐伯の顔を見た。
「お前が頭の切れるというのは、誰もが認める。わしも、そう思う。お前は、頭脳だけで言うなら父親を超えている。お前の父親も頭は切れたがな……」
佐伯孝三は、政治家だった神取の父と手を組んで、荒稼ぎをしてきた。神取の父が、佐伯に有利な情報を流したり、政治力で政府の開発プロジェクトに佐伯の会社を指名する一方で、佐伯は、神取の政治資金を引き受けてきた。
「だが、いくらカミソリと言われるほど頭が切れても、カミソリで切れるものには限界があることを忘れるな。カミソリで、斧は切れん。しかし、斧は、一振りでカミソリを砕く。カミソリは斧に傷つけることもできないのにな。この意味が、お前にはわかるか?」
無言の神取に、佐伯は、優しい口調で言葉を続けた。
「頭だけで考えた事など、現実の修羅場を潜ってきた人間の強さの前にはもろいということだ。お前は、その斧にならなくてはいかん……。その意味では、お前の父親は、強い斧だった……」

神取は、黙って頷いた。
「お前も、斧にならなくてはならんぞ……」
「ありがとうございます」
神取は、頭を下げた。
「下がっていい。わしは、もう少し、ここで考え事をしたい」
「はっ」
神取は、再び、丁寧に佐伯に対して頭を下げ、それからドアに向かった。
そして、彼の手がドアノブにかかった時、佐伯が神取の方を振り返った。
「鷹久」
ドアを開けたままの状態で、神取は、首だけ佐伯の方を向いた。
「会長、何か……」
「森川だがな……」
「はい」
「深入りはするなよ」
それだけ言うと、佐伯は、また窓の外を向いた。

4

〈深入りするな……か……〉

御影文社に戻る車の中で、彼は笑っていた。
〈ご丁寧に、カミソリと斧などと、例えまで出してくるとはな……〉
斧とは、言うまでもなく森川の事を意味している。森川は、佐伯グループの中でも、学歴もない叩き上げの男だ。佐伯とともに、政界工作や、グループの暗部にまつわる仕事をこなしてきた、文字通り、グループのナンバー二（ツー）だ。それだけに、佐伯としても、簡単に森川を見切ることはできない。
森川を佐伯が切ろうとすれば、佐伯にとって世間に知られたくないことも暴露されるからだ。だから、絶対に佐伯は森川一派をかばう。
〈だからだ……〉
神取は、ほくそえんだ。
〈切り札は、有効に使うにかぎる〉
神取は、渡したフロッピーディスクの事を思い出した。
すべては、佐伯の反応を見越した上での行動だった。
〈カミソリは、斧に勝てないだと……？〉
神取は、おかしくてたまらなかった。
〈佐伯グループなど、今の俺にとっては、何の価値もないわ。だが、せいぜい佐伯グループ内での権力闘争だとでも思わせておくさ〉
神取にとってセベクも佐伯グループも、もう、どうでもよかった。

〈あのシステムさえ完成すれば、すべて解決されることだ……〉
それも、すぐだ……。
神取は、時計を見た。
時刻は三時十五分。
順調にいっていれば、四十五分後の四時ジャストには、新たな実験が行われるはずだ。
それさえ、成功すれば……。
神取は、満足げに車のシートにもたれかかり、しばしの休息に入った。

「……！、……！」
朦朧とした意識の中で声を聞いた。どこから聞こえてくるのだろうか。それは、彼の意識の内側から聞こえてきていた。声というよりも、弱々しく、まるで何かにすがるようなか細い音に近かった。
まただ……。
また、聞こえてくる……。
「……！、……！」
いつもの泣き声……。
神取の目の前に、あの黒服の少女がいた。
目の前で少女は、顔に両手をあてて泣いていた。

わからない。
これが、俺の無意識が作ったものだとしたら、なぜ、泣いていなくてはならないのだ!?
俺は、もう勝ったんだ。
もう、なにも恐れる必要などないはずだ!?
神取は、少女をじっと見下ろしていた。
と、泣き声がやんだ。
突然、少女が涙を拭いながら顔を上げて、こう言った。
「パパ。来てくれたのね……」
少女は、神取に抱きついた。
「あき、さみしかった……」
寂しく、切ない、まるで、何かの庇護を求めるような声だった。

「夢か!?」
車の急停車する震動を全身に受けて、神取は、目を覚ました。
また、あの少女の夢か。
が、所詮は夢だ。そんなことより……。
神取は、腕時計を見た。
時刻は四時。実験が始まった頃だ。どうやら、間にあった。と、彼は思った。

が、顔を上げてみると、そこにはセベクビルはなかった。が、見覚えのある御影町の景色の一つであることはわかった。
「おい、着いたのではないのか？」
バックミラーごしに、運転手の顔を見ようとして、神取は驚いた。
運転手が、いない。
「どうしたことだ……」
ドアが開いた気配は感じられなかった。
運転手の持ち物は、助手席に残されたままだった。黙って神取を置いて外に出たことなど一度もなかったはずだ。それに、車が止まるのと同時に自分は目をさましたのだ。
いったい、何が起こったというのだ？　運転手は、消えてしまったというのか？
「まさか」
神取は、否定した。そんなことはありえない。
「仕方がない」
彼は、後部座席の左側のドアに手をかけた。自分で運転して戻るまでだ。
が、一歩外に出て、彼は違和感を感じた。
「いったい、どうしたというんだ」
ないのだ……。いつもなら、この左側に警察署が、見えてくるはずなのに……。
「道でも間違えたのか？」

いや、いつも通りの通りだった。
「こんな花園……」
彼の目の前には、花園が広がっていた……。
「あの子は……」
神取は、見た。
その花園の中に、白いリボンに白い服の少女が、たった一人で立っているのを。五歳くらいの少女は、驚いたような顔で、彼の車を見ていた。
「いったい、どうなってるんだ……」
それに、あの少女の顔……、どこかで見たような気がする。どこだったろう……。
「夢だ……」
意識の裏側が反応した。
「夢の少女だ」
だが、どこかが、違う。どこかが……。
「ここには、警察署があったんじゃないのか？」
「まいが、消して、お花畑にしてあげたです」
「消した!?」
信じられない答えだった。
この子は、いったい何を言っているのだ？

これも夢の続きなのかと、神取は自分を疑った。

が、警戒した目つきを神取に向けながら、少女は頷いていた。

「このコンパクトで、病院も消したです」

少女は、右手に握ったコンパクトを彼にかざした。

「おじさんも、ここにいてはいけない人です！」

その目は、敵意に満ちていた。

「ここは、……のためだけの……です！」

この子は、俺の見た少女ではない。あの子は、もっと不安と寂しさに包まれた目をしていた。

目の前の少女は、ゆっくりと右手を振りかざし、コンパクトを神取に向けて開いた。

「消してあげます」

彼女は、何かの呪文を唱え始めた。

が、何かの気配を感じたかのように、彼女の唇の動きが止まった。

「まいの作った楽園に、たくさんの人が入りこんできたです……」

「楽園?、ここが!?」

少女の言葉に神取は驚いた。いつもの御影町と、ほとんど変わらないここの、どこが楽園だというのか？

突然の出来事に、茫然と立ち尽くしている神取の前に、見たことのある連中が姿を表わした。

「支社長!?　いつのまに、ここに！」

「浅田主任!?」
ニコライ博士の助手の浅田をはじめとした研究員たちが、さまざまな器材を手にして神取の顔を見ていた。いずれも、驚いたような顔をしていた。
〈俺は、夢を見ていたのではないのか……?〉
では、ここは、この空間はなんなんだ!?
「みんな、早く立ち去るです。じゃないと、まいが、みんな消してしまうです」
「消すだって!?」
どういう意味なんだと、思っているうちに、少女の姿は、消えていた。
「これは、夢なのか……、それとも現実なのか……」
どう考えても、夢としか考えられない。

浅田は、興奮した口調だった。
「とにかく、この空間が、我々のいる空間と、著しい程、似ているのに驚きました」
浅田の説明は、こうだった。
再び行われた転送実験もまた目的通りの場所にモルモットを転送することができなかった。しかも、驚いたことに、カメラから送られてきた映像はデヴァシステムルームと全く同じ装置のある場所だった。
だが、その周りには、誰も人間がいなかった。装置だけがあるガランとした空間の映像をモルモッ

トは送り続けていた。
「我々は、モルモットのいる座標を計測しましたが……」
その答えは、『設定領域外につき特定不能』だった。
デヴァシステムのために設定された領域は、この研究所を起点として地球すべての地理（海底や山頂など含めて）に対応している。その領域を超えたということは、どういうことか？
「では、ここは、地球ではないというのか？」
神取は、当惑していた。
「厳密に言うと地球であり、地球でない別の宇宙だそうです……」
そう、前置きをして浅田は、話し始めた。
それによると、ニコライ博士は、もう一つの仮説を持っていたのである。
我々の空間は、三つの座標軸で表現されているが、それ以外に、実はもう一つの座標軸があるのではないかと博士は考えていたのである。
その座標軸とは、時間を表わす座標軸である。
「時間？」
「博士の話ですと、ここは、別の時間軸上の世界だというのですが……」
「どういう意味だ？」
「いえ、自分は、ニコライ博士の受け売りですから、詳しいことは、博士に聞いていただきたいのですが……」

浅田は、頭をかいた。
「とにかく、一部分の違いは認められるにせよ、ここが、もう一つの御影町であることは間違いありません。後は、ニコライ博士に報告して……」
採取した科学データをもとに、この仮説を検証すると浅田は言った。
「では、戻れるのか？」
「はい。こちら側にあるデヴァシステムが使えますが……」
浅田は、怪訝な表情になった。
「支社長、デヴァシステムでここに来たのではないのですか？」
「いや。私は、ただ車に乗っていただけだ」
「まさか!?」
浅田は信じられないという顔をした。
「そんなこと、考えられません!?」
浅田は、激しく首を振った。
「我々の調査では、この町……、もう一つの御影町は、外部の世界から完全に独立した空間なのです」
「独立した空間だと？」
「そうです。御影町のはずれには、まるでバリアーのようなものが張られているのです。デヴァシステムなしで、あのバリアーを越えてここに入ってくるなど……」

「しかし、そうなのだ……」
神取は、真顔で浅田を見た。
「あの車ですか?」
浅田は、路上に止まる一台の車を指さした。
「そうだ」
「……信じられない。なぜ、あのバリアを越えられたのだ……」
どこから見ても、それは、普通のベンツであった。
「なぜ、デヴァシステムも使っていない私が君たちのいるこの場所にいるのだ?」
「それは、我々が支社長にお聞きしたいくらいです。そんなことがありえるのでしょうか……?」
「とにかく……」
ここが、別の空間というのなら、まず、元の世界に戻らなくてはならない。
〈この世に、どれほどの空間が広がろうと、俺の目的は一つだ……〉
興奮する浅田たちの中で、神取だけは全く違ったことを考えていた。

第四章　悪魔の宴の始まり

1

「いったい、いつになったら動くのかしら……」
真夜は、企画調整室の自分のデスクで、電話を待っていた。
これまで、真夜は、この大きなデスクに座るまもなく動き回っていた。それは、佐伯グループを支配する旧態依然とした考えの老人たちを追い落とし、神取のような若くて優秀な人間たちが、それに替わるためである。
そして、今、その最後の仕上げをするべく、ここに座って待っていた。
「あれだけの証拠なのに……」
真夜は不安だった。
「二ヶ月もたつのに、どうして常務たちの動きがないのかしら」
あれだけの証拠を佐伯会長につきつけた以上、何かの動きがあってよさそうなものである。
仮に、証拠の裏付けをとるにしても、佐伯会長の秘書にまで網をはっているのだから、何かの情報が真夜のもとに入ってきてもおかしくはなかった。
しかし、いまだに動きはなかった。

〈いったい、何をやっているのかしら……〉
会長が森川常務と、密かに接触した動きもなかった。
真夜は、常務派が秘密口座の抹消を図る場合にそなえて、いくつかの罠を用意していた。彼等が動きを見せたら、鷹爪会のメンバーが、すぐに真夜に報告し、彼女の指示通りに動く手はずになっている。
最悪の場合、すべての証拠資料をマスコミに公開することも彼女は考えていた。たとえ、それによって佐伯グループが社会的に大きなダメージを受けてもかまわないと思っていた。まずは、老人たちを一掃するのが先である。そして、その後で、神取を佐伯グループの救世主として内外にアピールしてゆく。
それが、彼女の描いたシナリオだった。
しかし……。
いまだに、何も動かない。
〈変だわ〉
あきらかに、これはおかしい。
考えていくうちに彼女は不安になってきた。
何か、彼女の予測のつかない事態になっているのだろうか……。
〈まさか、失敗した……!?〉
今まで、一度も思ったことのない考えが浮かんだ。

いや、そんなはずはない。
私は、何もミスを犯してはいない。完璧なはずだ……。
とにかく、神取は待てと言った。
今は、言われた通りに、その指示に従うしかない……。
気分を変えようと彼女は、デスクから立ち上がった。
その時、電話がなった。

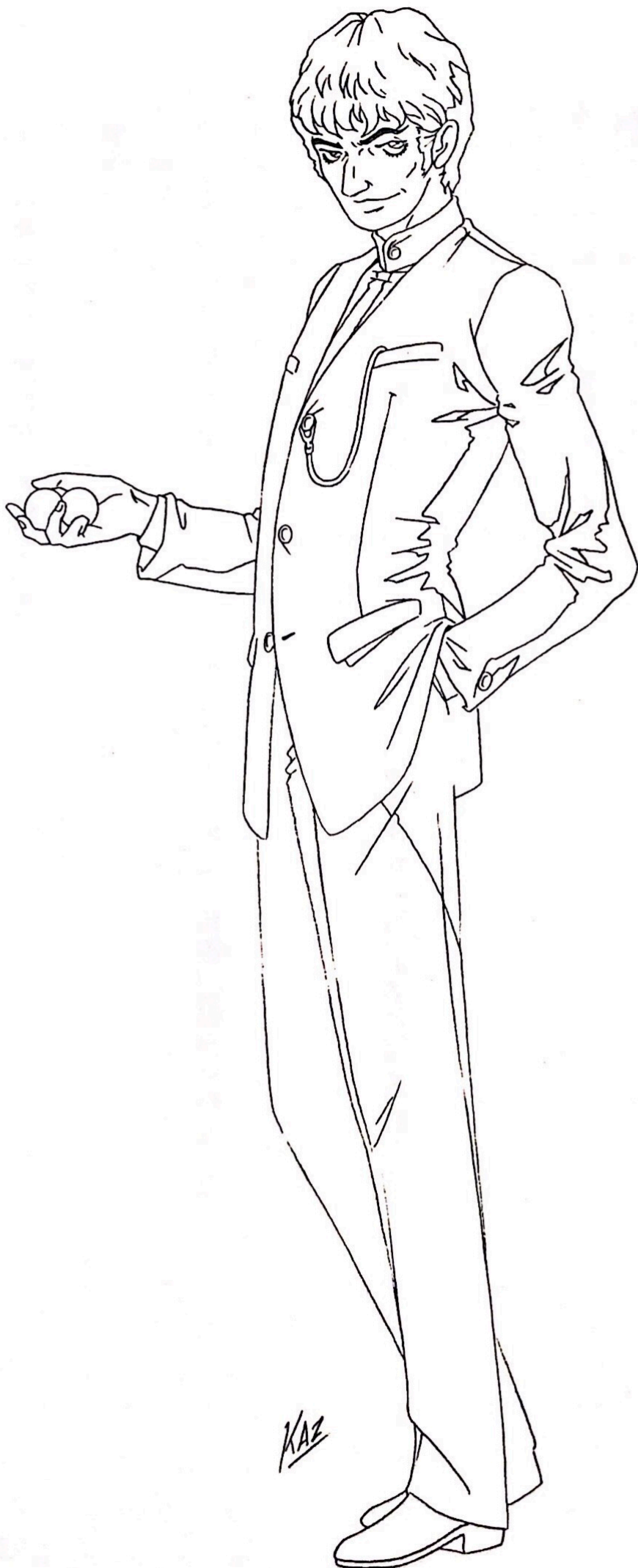
2

「くっくっくっ……」
押し殺したような声が洩れた。
それは、神取の声だった。
神取は、支社長室のデスクに肘を立て、うつむいていた。握りあわせた両手を額につけながら。
その肩は、さっきから小刻みに震えていた。
〈いよいよだ。
いよいよ、その時が訪れる……〉
声は、笑いだった。
「佐伯グループの全勢力をつぎこんで完成したデヴァシステムが、何に使われるか知ったら、驚くだろうな……」

神取の脳裏に、佐伯会長の顔が浮かんだ。
「会長、私がカミソリかどうか、これでわかりますな」
そろそろデヴァシステムの最終調整が終了する頃だった。
当初懸念されていたエネルギーノイズの問題も、あれ以後、聞いていない。おそらく佐伯電工や、情報通信などから送り込まれた技術陣の協力で解決できたのだろう。
〈それにしても、ただの瞬間物質移送機だと思っていたが……〉
「偶然とはいえ……」
神取は、思わぬ発見に口元をゆるませた。
「素晴しい発見だったな」
自分のために用意されたような発見に、神取は満足していた。
そして、まもなく自分は、その力を使って目的を果たす……。
と、その時、デスクの電話が鳴った。
「終わったか……」
それは、コントロールルームからの直通電話だった。
最終調整が終了したら、ニコライ博士から、彼に報告が入ることになっていた。順調に進んでいるなら、そろそろ電話のある時間だった。
期待に胸を膨らませながら彼は電話をとった。
が、受話器を耳にあてて、彼の表情が曇った。

「どういうことだ……？」
電話からは、何の音も聞こえなかった。
「いったい、どうなっているんだ」
回線が不調だとでもいうのか？
そう思って、自分からかけ直してみようと受話器を置いた時、突然、セベクのマークが大きく描かれた壁がゆっくりとスライドした。
「!?
!?」
〈博士か？〉
この壁の裏側には、神取と一部の者しか知らない部屋があった。
その部屋には、地下研究所への直通エレベーターが隠されていたのだ。
ニコライ博士は、このエレベーターを使って支社長室に無条件で入ることを許されていた。
どうやら、直接、博士は報告に来たらしいな……。
スライドしていく壁を見ながら神取はそう思った。
が、壁の裏から現われたのは、ニコライ博士ではなかった。

「……し、支社長……」
「お、おまえは、沼田!?」
そこにいたのは、ニコライ博士の助手を勤める研究員だった。

が、神取は、その姿を見て絶句した。
体が、燃えている！
沼田の体から炎が上がっているのだ。
それは、ただ燃えているのではなかった。
火は、回りに燃え移ることなく、沼田の体だけを確実に焼いていた。
「た、助けてください……」
炎に包まれながらも、沼田は神取に向かってヨロヨロと歩んできた。
「ひっ！」
神取は、思わずあとずさった。
「し、支社長」
〈い、いったい、なにが起ったのだ！〉
言葉にならなかった。
「じ、実験の最中に……」
すでに、炎は、男の体のほとんどを包もうとしていた。
黒焦げになりながらも、最後の最後まで、彼は何かを伝えようとした。が、すでに全身は、人間の原形をとどめていなかった。彼の体が崩れ落ちた。そして、炎は消えた。
「こ、これは……」
神取は、信じられないという顔でそれを見た。

もはや、人間の原形をとどめていなかった。
そこにあるのは、炭になった物だった。

「事故か……」
〈しかし……〉
地下研究所には、ありとあらゆる事故に備えて何重もの安全装置が設置されていた。
それが、作動しなかったというのか？
それだけではない。
この支社長室の天井にある火災検知器
〈これだけの高温で人間が燃えているのに火災検知器が作動しないなど信じられん〉
「いったい、地下で何が起ったのだ」
〈ニコライ博士は、無事なのか……〉
「武多です」
その声に、神取は、我に帰った。
「お呼びにつき参上しました」
武多と名乗る男が、十名ほどの部下を従えて支社長室に入ってきた。
黒のスーツに黒のネクタイは、佐伯セキュリティサービスの社員たちであることを意味していた。
通称ＳＳと呼ばれ、佐伯グループの裏側を支配する闇の軍団と言われて社員たちから忌み嫌われて

いる彼等だが、表向きには佐伯グループの施設管理が仕事の一つであった。
彼等は、それぞれに黒いアタッシュケースを手にしていた。
「これを見てくれ」
神取は、沼田の死体を見せた。
「いったい、これは……?」
「わからん。実験事故が発生したらしいのだが……」
「この部屋でですか?」
「場所は、地下だ」
「しかし、地下に研究所などありましたかな……」
武多は、不思議な顔をした。
「君たちが知らんのも無理はない。これは、佐伯会長と一部の人間しか知らん特別な施設なのだからな」
「わかりました。詳細は極秘扱いということであれば、我々の立ち入るべき筋のものではありません」
武多は、頷いた。
「図面は、ございますか」
「用意してある」
彼は、デスクの上に広げてあるものを指さした。

「拝見させていただきます」
「なるほど、放射性物質の拡散に備えた構造か。ここから直通のエレベーターで行くわけですね」
武多たちは、図面を検討していた。
「各種警報装置が全く作動しなかった」
神取は、図面を見ている彼等に、そう言った。
「この部屋のもだ」
「おかしいですな」
武多は、首をひねった。
「とすると、警報装置が人為的に切られていたという可能性もあります」
「人為的？」
「我々は、どちらかというと、そちらの事故の始末の方が得意でして……」
「テロだとでも言うのか？」
武多は、こともなげに頷いた。
「それを、これから確かめるというわけです」
武多は部下たちに手短に段取りを指示した。
「これより、防護服を着用の上、現場に向かうぞ」

3

ゆっくりとエレベータのドアが開いた。
そして、まるで宇宙服のような防護服に全身をすっぽりと包んだ男たちが姿を現わした。銀色のメタリックなそれの背中には重そうな酸素供給装置がついている。
そして、顔は大きなヘルメットのようなもので覆われ、顔の部分はマジックミラーのようにコーティングされたもので覆われている。中から外は見えるが、外から彼等の顔は見えない。
彼等は、その手に銃を持ち警戒した雰囲気で、ドアの向こうに狙いをつけていた。
正面に続く通路は、左に折れ曲がっている。
「第一班は、通路の安全の確保。第二班、ＡＢＣ反応チェック急げ。第三班はエレベーターにて待機しろ」
ここは、セベクビル地下研究所。合計十一名の防護服姿の人間たちが、その指示に従ってエレベーターから研究所の通路に散開した。
最初にエレベーターから出た三人は、通路の向こうに銃を突きつけた姿勢で目だけを素早く動かしている。そして、次の三人は、その手に数種類の探知器を持ち、さまざまな方向にそれを動かせた。そして、後の五人のうち二人を守るように三人がエレベーターの中で壁を作っていた。
やがて、彼等の報告が聞こえた。
「第一班、通路正面に外敵なし！」

「第二班、A反応なし」
「B反応問題なし」
「C反応、異常なし」
頭をすっぽりと包んだ防護服の内側についている超小型マイクとスピーカーでの彼等の会話だった。
「一応、念のためにとは思いましたが、やはりABC反応なしということです」
他の連中よりも一回り大きな防護服の男が、隣の男に向かって言った。
「バイオハザードの類ではないということです……」
武多は、そう言った。
Aはアトミック反応、Bはバイオ、Cは、ケミカルの略である。核や細菌、毒ガス等が研究所から漏れたのではないということが、これではっきりした。
「よし。では、前進。手前の部屋を制圧する」
武多の言葉に、先頭に立つ三人が扉にとりついた。
「ロック解除します」
一人が、扉の横に取り付けられたカードリーダーにIDカードを差し込んだ。扉は簡単に開いた。
「突入！」
三人は、扉が開くと同時に突入し、四方に銃を突きつけた。
「部長、敵の姿は、ありません」

「トラップも発見できず」
突入した男たちの報告が防護服のスピーカーに聞こえた。
「一班の制圧した場所まで第二班、第三班前進」
その報告に、残った人間たちも前進を開始した。
そして、三班に護衛されるように二つの防護服姿が最後に部屋に入った。
あくまで、警戒を崩さず彼等は銃を構えながら部屋の入り口に近い壁に立つ。
「この部屋は……」
「言ってしまえば、ただの倉庫だ」
そこはガランとした部屋だった。器材も何もない殺風景な部屋の隅に、ただダンボール箱だけが
雑然と置かれていた。
「分解して搬入した器材の組立ぐらいにしか使っていないはずだ」
「そうですか」
ずんぐりした男が頷いた。
「図面によると、この部屋の向こうがサブコントロール室でしたね」
「そうだ」
サブコントロール室までいけば、研究所の状況がすべてわかる。
「ともかく、そこまで急ぐとしましょう。第一班、扉へ」
「はっ」

三人は、前進した。
が、扉から数歩のところで、彼等の歩みが止まった。
「部長……！」
「どうした」
「開いています！」
「なんだと!?」
ロックされていたと思っていた扉に隙間を彼等は発見した。
「待て、トラップかもしれん、注意しろ」
ＩＤカードで自動開閉するはずの扉が、途中で動かなくなっているなど不自然であった。
「それから、二班は援護態勢」
「はっ」
彼等は、検知器をイングラムに持ちかえ、扉の向こうに狙いを定めた。
「それらしきトラップは発見できません」
三人のうち一人が扉を調べて、そう報告した。
「よし、では開けろ」
鈍い音がして扉が、ゆっくりと動き始めた。
半分ほど開いた時、ドアの向こうから血に染まった腕が伸びてきた。
「!?」

ゆっくりと男の体が、彼等の目の前に崩れ落ちてきた。
死体だった。
「部長、やはり外傷は見当たりません」
「そうか」
武多は、しばし考えこんだ。
「いったい、どういうことでしょうか？」
「ＡＢＣ反応はないのだな？」
「はい」
武多は、その返答に頷いた。
「では、これより対テロ装備に切り替える」
「了解しました」
武多の言葉とともに、彼等は、防護服をそれぞれに脱ぎはじめた。
「第一班はコントロールルームまでの通路の索敵に移れ」
「はっ！」
武多の指示に、三人の男が扉の向こうに消えた。
「もう、防護服を脱いでけっこうです」
武多は、自らの防護服に手をかけながら、隣に立つ防護服の男に、そう言った。

「わかった」
その言葉に、彼もまた息苦しい防護服を脱いだ。
そこから現われたのは、セベク御影支社長の神取鷹久の姿だった。
「支社長も、これを」
彼は、神取に武器を渡した。
マシンガンである。
「使い方をお教えします」
武多は、安全装置を解除してみせた。
「後は、トリガーをしぼるだけです」
「わかった」
「しかし、何もご自身で、こんな危険なことをされなくとも……」
神取は、それに答えず周りを見回した。
「人間業とは思えんな……」
そして彼等は、サブコントロールルームの中に入った。
部屋の中央には、合計六台のデスクトップコンピューターが置かれ、ディスプレイ画面には通常通りにデータが表示されていた。そして、それぞれの端末の前には白衣の研究者たちが向かっている。全くいつもと変わりのない様子に、最初、神取たちは安心した。
〈やはり、ちょっとした事故であったか……〉

扉の内側に足を踏み入れた時、神取はそう安堵した。
が、そうではなかった。
そこでは、時間が止まっていたのだ。
つまり、神取の目の前の彼等は、全員死んでいたのだった。
SSの人間たちが、全員の死を確認した時、神取は茫然となった。
信じられない話だが、目の前の彼等は、まるで魂だけが抜けてしまったように、いつも通りの仕事をしている状態のままで、心臓を停止させていたのだ。
マウスを握りディスプレイを見つめたまま！
画面を覗き込んで、何かの指示をしようと口を開いたまま！
全員そのままの姿勢で、蝋人形のように硬直している。
彼等の表情には、苦痛も恐怖も何もなかった。ただ生きていないというだけであった。
だが、武多を含めてSSの人間たちは、神取のような驚きは感じていなかった。
〈こんなことがありうるのか……!?〉
「簡単なことです」
武多は、無感情に神取にそう答えた。
「倉庫の扉で見た死体と同じ方法で殺されたのです」
「同じ方法？」
「ええ、テロリストたちの中でも化学知識のある連中の常套手段です。毒針を使ったんですよ」

武多は、死体を解剖すればすぐわかると答えた。

ある種の毒は、ごく微量でも体内に入ると心臓麻痺に似た症状を引き起こすというのだ。それを小さな針に塗って刺せば、これと似たことはできると語った。

「どういうタイプの毒を使ったのかは、血液を調べればすぐわかります。なに、たいして難しいことではありません」

「毒針だと……？」

「おそらく、毒そのもので目に見えない大きさの針を作り、それを何かに仕込んだのでしょう」

「しかし、全員が気づかずに殺されるなどありうるのか？」

「後で、もっと細かく調べなくてはなんとも言えませんが」

武多は、自信ありげに頷いた。

「たぶん、倉庫の扉に倒れていた人間は、それに気づいて逃げようとした途中で見つかって殺されたのでしょうな」

「だが、それでは焼死体の説明はどうする？」

「それは、あと二つの部屋を調べればわかるでしょう。それよりも……」

「なんだね」

「これで事故の可能性は消えました。それから、もう一つ。残念ながら犯人は内部の人間と思われます。それも、この手際のよさから考えると複数名です」

武多の目は、獲物を見つけた猟犬のようだった。

「これは、セベクの研究データを狙った犯罪と思って間違いありませんな」
「まさか……」
この研究施設の事を知っているのは、ごく少数の人間だ。
「単純なテロ行為の場合は、外部の注目を集めるように爆破など派手な方法をとりますが、今回のケースは、この殺しの手口から見て、情報奪取が目的と判断して間違いありません」
確かに武多の言う通り、人間は死んでいるが器材には一切手がつけられていなかった。
「ともかく、そのデータがなんであるにせよ、佐伯グループに害をなす者の存在がわかった以上、これを排除するのが我々の仕事です」
武多の言葉が意味することは神取にもわかった。
事故でないことがわかった以上、敵の発見と駆逐を第一目的とし、その際の損失にSSは一切責任を負わないということである。
信じられない話だが、それが佐伯セキュリティサービスのやり方である。
それは、佐伯グループ各社と結んでいる契約書にも、微妙な言いまわしで記載されていた。そのため、たとえビルが一個吹き飛ぼうとも、社員の生命が奪われようとも、それはSSを呼んだ側の責任となるのである。
しかし、たとえ、テロリストといえども民間の警備会社に殺人が許されるはずもない。だから、起こったことすべては事故として記録される。
その後始末もまた、依頼があれば佐伯セキュリティサービスが演出する。

そして、死んだ人間が引き起こした事故と称する隠蔽工作が行われることとなる。常に会社のイメージが悪くならない方法が選択され、時には、罪もない人間に責任をかぶせる場合もある。が、その事を知るものは少ない。

だが、佐伯セキュリティサービスが一般の社員たちからSSと呼ばれる時の口調には、やはり、何か暗い含みがあることは確かである。そして、黒で統一された制服には、まるで第二次世界大戦のナチスドイツの時代に、ナチス党が、党の威信を保ち、反対派を弾圧するために作った親衛隊（SS）と共通するカラーがあった。

〈誰が何人殺されようとかまわん。しかし……〉

デヴァシステムとニコライ博士だけは失うわけにはいかない。

研究員が何人死のうとも、いくらでも補充はきく。しかし、デヴァシステムと、その生みの親ニコライ博士は、そういうわけにはいかない。もし、彼までも同じように死んでいたら、神取がこれからやろうとしていたことのすべてが水泡に帰すことになる。

〈それだけは、困る……〉

神取の頭に不安がよぎった。

望みは、あと一歩のところまで来ている。

それに、時間も残り少ない。いずれ、自分の計画に気づく人間も出るに違いない。

「とにかく、これは、会長直轄のプロジェクトだ。セベク単体の事業と思ってもらっては困る」

「それは、我々も理解しております」

「それならよい」
神取は、頷いた。
「ニコライ博士の命が失われた場合、SSにも責任を取ってもらわなくてはならないからな」
「しかし……」
〈やはり、SSだ……〉
もはや、敵を見つけて殺すこと以外考えていないようだった。
「武多君……」
「はっ」
「これは、佐伯会長のお言葉だ」
「了解いたしました」
武多は、頷いた。

4

コントロールルームへは複雑に折れ曲がった通路を通る。
これは、火災や放射線もれに備えた設計である。
武多から索敵を命じられた矢沢、島田、佐川の三人は、通路前方に神経すべてを集中させながら歩いていた。手にした銃は、常に前方に向けられていた。そしてまた、対テロ装備ということで、彼等のスーツの下には防弾チョッキが着込まれている。

そして、今、彼等は二つ目の曲がり角に達した。
通路は右折している。
「状況確認」
小声で、真ん中の男が言った。三人の中では最も背の高い男、矢沢である。
左の島田と右の佐川が頷く。そして、しばし、彼等は周囲に耳をすました。待ち伏せを警戒しているのである。
「三人、同時に出る」
矢沢の言葉に二人は頷いた。
三人は、飛び出し、体を右にひねって正面に銃を一斉に向けた。
そして、見た。
血の海を……。
「こ、これは……」
赤い体液で染められた床には、ちぎれた腕、二つに切り裂かれた死体。飛び散る内臓。通路には、かつて人間を作っていたパーツが散乱していた。
「なんてことを……」
彼等は、その残虐なまでの殺し方に衝撃を覚えた。
ＳＳの社員である以上、人も殺してきた。死体など見慣れているはずである。だが、その彼等にしても目の前にいくつも転がる死体には背筋が冷たくなった。

「およそ人間が殺したと思えませんな……」
島田の目は、驚きで見開かれていた。
「警戒を怠るなよ」
矢沢は、左右の二人に注意した。
「あたりに敵が潜んでいないとも限らん。佐川、死体を確認しろ」
「了解しました」
佐川は、血の海に足を運び、横たわった死体を一体ずつ確認する。死体を装った襲撃者の存在を確認しているのだ。いつの時代のゲリラ戦でも、死体にまじって待ち伏せは基本的な戦術であった。
「これが、トラップとは……」
少々考えられなかった。佐川が確認した五つの死体のうち、五体満足な状態のものは、一つもなかったからである。
「それにしても、こんな殺し方があるものだろうか」
佐川は、死体を見ながら当惑していた。
プロの彼等は、人を殺す場合は一撃できめる方法が主だった。すなわち銃を使うなら頭。ナイフを使う場合は心臓。
それが、どうだろうか。ここにあるのは、まるで、虎や豹が鋭い牙や爪で人間をズダズダに引き裂いたような死体だ。床には、内臓が飛び散り、血は床だけではなく天井や左右の壁にまで飛び散っている。

おまけに、頭の半分がザックリと何かに噛み砕かれたようになっているものまであった。これなどは、脳髄が血と混じってたれ、その部分の床だけを赤茶色にしていた。残った半分の顔から伺えるのは、この世のものならざらぬものを見たといわんばかりの表情だった。

「まるで、何かに食われたとしか思えん……」

ぞっとする光景だった。

「前進しますか、矢沢さん？」

少し青い顔になりながらも島田は、次の指示を求めた。

「ま、待て。武多部長に報告する」

矢沢は、ネクタイにつけられた小型マイクのスイッチを入れた。

「ぶ、部長……」

矢沢の声は、少しかすれていた。

それは、内心の動揺を物語っているようでもあった。

「矢沢です。コントロールルーム手前の曲がり角で死体発見」

武多の声が、矢沢の右耳にいれられたイヤホンから聞こえたのだろうか、矢沢は、それに対して応答した。

「はっ、細かく状況を報告します」

矢沢は胸がむかつき、胃液が逆流してくるような不快感を感じながらも、ありのままの光景を報告した。

〈いったい、何がどうなっているのだ……〉
　矢沢が武多に報告している間、島田と佐川は周囲に警戒を怠っていなかった。鋭い目を前方に向け、銃もまた視線と同じ方向を狙っている。
「そうです、死体は推定五体、いずれも研究者のものと思われます」
　彼の足元には、目を見開き悲鳴をあげたまま死んだような表情の首が転がっていた。
「武器は鋭利な刃物のようですが、それだけではなさそうです」
　正しく表現するならば、これは噛み殺されたというべきなのだろうか……。
　報告をしながらも矢沢は、そう考えた。
「はい、そうです。はい」
　果たして、自分の報告で武多にこの意味が伝わっただろうかと矢沢は思った。
「それで……」
　矢沢が、その後の言葉を続けようとした時、銃声が轟いた。
「うをっ、うわっ、うわーっ!!」
　隣の島田が、突然、狂ったような悲鳴をあげて発砲を始めたのだ。
「どうした島……」
　言葉は、そこで止まった。矢沢の目もまた大きく見開かれた。
「な、なんだ、こいつらは……」
　そこから先は、言葉にならなかった。

気がつくと、彼もまた悲鳴を上げながら目の前にゆっくりと迫ってくるものたちに弾丸をぶちこみ続けていた。

「矢沢、応答しろ」

武多は、マイクで矢沢を呼んでいた。

「どうした」

イヤホンからは、激しい銃声だけが聞こえ続けている。

「矢沢！」

絶え間ない銃声の間に、かろうじて聞こえるのはうなり声や叫びだけだった。

〈いったい、どうなっているのだ……〉

敵と遭遇したことは、この様子から伺えた。

だが、最後に言った言葉はなんだ？

冷静な矢沢に似つかわしくない響きがあった。

〈あの三人は、ＳＳの若手では最も優秀な連中だ。それが、いったいどうしたというのだ……〉

人を殺すことをビジネスと割り切れる彼等は、これまでいかなる状況でも沈着冷静に標的を倒してきた。

〈大丈夫なはずだ〉

危険な状態であれば、彼等は武多に指示を求めるはずだ。

しかし、何か胸騒ぎを感じた。
聞こえてくる銃声だ。
その音の響き具合は、まるで闇雲に撃っているとしか思えなかった。
「どうしたというのだ？」
神取の声で、武多は我に返った。
耳の中では、まだ銃声が聞こえている。
「索敵に出した第一班が敵と遭遇しました」
武多は、神取に、そう報告した。
「なんだと」
「現在、応戦中の模様です」
「大丈夫なのか？」
「彼等の実力は確かです」
武多は、頷いた。
が、聞こえてくる銃声の数が減っていくのを武多は感じていた。

「あうおぁ、ぅおぁ、ぅおあぁ」
島田は、目の前に迫る声の主に向かってトリガーを引き続けていた。
〈こ、こいつらは、なんなんだ……〉

目の前のものが吹き飛んだ。
〈これで、いくつ片付けたんだ〉
数え切れないくらいトリガーを引いたはずだが、それは、次々に彼等の目の前に現われてくる。まるで、きりがない状態が続いていた。だが、撃たなくてはならない。それだけが、自分を恐怖から救う唯一の行動なのだ。
そうしなければ、自分も佐川と同じように……。
さっきまで、彼の手前でトリガーを引いていた佐川は、両手を奪われ全く抵抗のできない状態で……。
思い出すのもおぞましかった。
佐川は、群がりくる奴等に両腕を食いちぎられたのだった。
そして、血の海で苦痛にのたうちまわっているところを……。
〈食われた〉
生きながら食われたのだ。
その時の佐川の顔が目に焼きついて離れない。その目は、島田に食われる前に殺してくれと哀願しているようだった。おそらく。そうだったのだろう。
だが、できなかった。
佐川を人間として死なせるよりも自分が生き続けるためである。
自分の身を守るだけで精一杯だった。

「ちくしょー！」
島田はトリガーを引き続けた。
カチッカチッカチ……。
〈弾が……〉
切れてしまった。
「くそっ！」
島田は、拳銃を捨てた。そして、腰のベルトに下げたナイフを抜こうとした。
だが、ナイフを抜くよりも早く、彼の喉笛に何かが食らいついた。
「なんてことだ……」
目の前で起こっていることは、矢沢の常識を超えていた。
佐川に続いて島田まで……。
〈食われている……〉
島田の体から内臓をつかみ出しては、彼等はむさぼるように食っていた。どうやら、ここに倒れた死体は、すべて食い殺されたものだったのだ。
「次は、俺の番か……」
矢沢の体は恐怖に震えていた。次は自分が生きながら食われる番なのだ。彼は覚悟を決めた。すでに弾も残り少ない。

〈自分としたことが、冷静さを欠いていた……〉
と、矢沢は、さっきから自分の耳の中で声が聞こえていたことを思い出した。
「矢沢、矢沢、どうした……」
武多の声だった。
「た、武多部長……」

「何が起きたのだ、矢沢」
武多の耳に、ようやく矢沢の声が返ってきた。
「なにっ、佐川と島田がやられただと！」
武多は驚いた。
「なぜ、貴様は、応援を求めずに……、い、いや、待て！」

「こうなったら……」
交信を切った矢沢の目は、奴等を見ていた。
その手には小型のスイッチが握られていた。
そのスイッチからは、いくつかのコードが矢沢が先程から左手に持って歩いていたアタッシュケースに繋がっていた。
「……これしかない」

このアタッシュケースの中には、プラスチック爆弾がつまっていた。扉のロックを吹き飛ばしたりする目的で用意されていたものだった。
そして、今、彼は、それを使うつもりだった。
「これで、一気に片をつけてやる」
彼は、そのタイミングを待っていた。
奴等が島田を食いつくし、自分に向かってきた時、ひきつけるだけひきつけて爆発させるつもりだった。だが、この密閉された環境でそれを使うのは危険だった。厚さ一メートル近い鉛の壁は、この爆発にはびくともしないだろうが、使った彼も爆発に巻き込まれる危険があった。そのために彼は通路の曲がり角まで後退していた。自分に向かって襲いかかってきた瞬間、通路の向こう側に身を隠してスイッチを押すつもりだった。
〈さぁ、こい。皆殺しにしてくれる……〉
矢沢は、その時を待っていた。

彼等は前進を続けていた。
先頭には武多が立ち、そして、その後ろに六人の部下が神取を守るようにしながら銃を構えながら歩いていた。
〈それにしても、これだけの苦戦を強いられるとは……〉
ＳＳとはいっても、たいしたことはないと神取は思った。

〈もう少し使える連中かと思っていたがな……〉
地下に下りて以来、神取は噂のSSの働きぶりをだまって観察していた。しかし、彼が期待したほどの能力はないようだった。
〈部長の武多は、図体だけで頭は悪い。他の連中もだ……〉
やはり、知性のない奴は駄目だと彼は思った。
〈これで、本当に無傷のままデヴァシステムを取り戻せるのか?〉
こんな奴等をあてにしなくてはならない神取は、内心、複雑な心境であった。
〈しかし、他に手駒がない以上、黙って従うしかないということか……〉
その神取の思いをよそに、彼等は仲間の遺体を探していた。
矢沢が、血の海と言ったこの場所で、ついさっき大きな爆発があった。
それは、敵をひきつけた上で一気に全滅させるという矢沢の大勝負であった。が、矢沢がなぜ、そこまでしたのか彼等にはわからなかった。
戦力的に敵に劣っているのなら後退し、態勢を立て直してから再びあたれば良いはずだった。それが、なぜ、彼等はそれをしなかったのだろうか?
大きな疑問だった。
「やはり、矢沢も一緒に吹き飛んだとしか考えられません……」
SSの一人が、そういった。
「そのようだな……」

武多は、残念そうに頷いた。
〈いったい、何があったというのだ……。そして、矢沢ほどの男が、これだけの判断ミスをなぜおかしたのか？〉
武多には疑問だった。
「何もかも爆発で吹き飛んでしまっているようです」
「ああ」
果たして、矢沢たちが戦った連中は何者だったのだろうか。彼等にはわからなかった。

第五章　人の創りし地獄の門

1

何層にもわたる分厚い鉛の外壁で覆われている地下研究所、仮に地上が核攻撃を受けたとしても、ここだけは、放射能の恐怖とは無縁な構造になっていた。地下二十メートルに作られたコントロールルームを含む施設の内壁は、ミサイルの直撃にも耐えうる厚さ一メートルの鉛の壁に覆われている。研究所内で、事故が起こったとしても、三千五百度の熱までは耐えられる。

だが、今ここにいる彼等は、たった一人を除いて死の恐怖と対面していた。

〈こいつは、いったい何を考えているのだ……〉

こんな状況になっても食い入るようにスクリーンの映像を見ているニコライの神経が山中にはわからなかった。目の前の老人は、まるで興奮したような表情で早口でなにかを口の中でつぶやいていた。

その手には、メモがとられ、何かを思いついたごとに計算式を書きつづっている。

あの事故があってから、ずっとニコライはそれを続けていた。

〈部下が、食われたんだぞ……〉

山中は、液晶スクリーンに映るおぞましい光景にへどの出る思いだった。

事故が起こった時、彼を含めてこの部屋の全員が、そのスクリーンで研究員たちが、次々に死んで行く姿を見せられた。見るもおぞましい光景だった。

デヴァシステムのゲートから、見たこともない醜悪なものたちが現われ、たちまちシステムを制御していた浅田や沼田をはじめとした五人に襲いかかった。

それから先は、この世のものとは思えなかった。もしも地獄というものが本当にあるというのなら、それがまさにそうだったのではないかと山中は無神論者でありながらそう思った。生きながら食われるものや、生きているとしか思えない炎に身を焼かれていくもの……。二度と見たくない光景だった。

〈それを見て、この老人は何も感じていないというのだろうか?〉

ひょっとして……。

この事故も、ニコライにとっては、研究を完成させるためのステップの一つに過ぎないというのか?　何が起きようとも、彼にとって、自分の研究を完成に導くためのアクシデントでしかないというのだろうか……。

山中は、自分とニコライの違いを感じた。

〈冗談ではない。こんな状態で何が研究だ!〉

彼は、一刻も早く、こんな場所から逃げ出したかった。

「もう一度、支社長のところへ電話を!」

ディスプレイのある席に座った女性オペレーターに山中は声をかけた。

「しかし……」
彼女は、首を左右にした。
「いいからかけるんだ！」
「……わかりました」
絶望的な表情をしながら彼女は再び受話器をとった。
「なぜ、電話が繋がらないのだ……」
事故発生から、地上に何度連絡しようとしても電話は繋がらなかった。
〈これでは、ここで、何が起こったのか伝えられないではないか〉
「所長、どうします」
研究員たちは、山中をすがるような目で見た。
「あと三時間で支社長との定時連絡の時間だ。その時には、ここの異変に必ず気がつくはずだ」
山中は、毎日一時と五時の二回、神取に報告を入れることになっていた。山中が一分でも電話を入れるのが遅れると神取からかかってくるくらいだから、もし、電話が繋がらなければ必ず何かがあったと気づくはずだ。
「しかし……」
若い男が、不安な顔で口を開いた。
「奴等、それまでここに入ってこないでしょうね……」
「バカな。ここは、ミサイルの直撃にもびくともしないんだぞ。心配するな」

「ですが……」
「それにパスワードなしでは、このロックは絶対解除できん。ここは、絶対安全だ!?」
山中は、そう言い切った。
が、内実、自分の言葉を信じていなかった。
あれだけの力を持つ奴等だ、この中まで入ってこないという保証はない。
もし、この中まで、入ってきたら……。
この扉が、開いた時、自分も、外の連中と同じように、一瞬にして怪物の手にかかってしまうだろう。
〈デヴァシステムルームの扉のロックがもう少し早くできれば、奴等をあの中に封じ込めておけたものを……〉
見た時から嫌な予感はしていたのだ。
と、何か音がしたように感じ、山中は目を扉に向けた。
「!?
!?」
どうやら、彼の恐れていたことが現実になろうとしていた。
「と、扉が……!?」
彼ら目の前で、ゆっくりと音をたてて、扉をロックするパイプが収納されていく。このパイプが、すべて収納されたとき、扉は開く。
〈まさか！　そんな!?〉

あんな人間とも似ても似つかない醜悪な奴等がパスワードを解除したというのか！
しかし、目の前で起こっているのは幻覚ではない。
〈では、俺も、死ぬのか……〉
山中は、呆然となった。
やがて、すべてのパイプが壁の内側に収納された。
「と、扉が、開きます！」
鈍い音がして、扉がスライドを始めた。
この扉が開いたら、外にいる奴等がいっせいになだれ込んでくる。もう逃げ場はどこにもない。
「我々も、ここまでか……」
山中の体から、力が抜けた。
が、そうではなかった。
開いた扉の向こうには、黒いスーツに身を包んだ男たちが立っていた。それは、血に染まって、赤黒く彼らの前で光っていた。
それを見て、閉じ込められていた全員が歓声を上げた。
「え、ＳＳ……。では、助かったのか……」
山中は、額に、じっとりと浮かんだ汗を拭った。
そこにいるのは、まぎれもない人間たちだった。
と、正面に立ったＳＳの男たちが、左右に、道をあけた。その後ろからオペレーションルームに

入って来た男に山中は驚いた。
「し、支社長!?」
「実験は、どうなったんだ、山中」
支社長自らが、SSを引き連れて、ここに現われたことに山中は驚いた。
「デヴァシステムは無事なのか？」
「は、はぁ……」
放心状態の山中は、何を聞かれているのかわかっていなかった。
「と、と、とにかく……地上に。私を……地上に戻して下さい」
山中は神取にすがりついた。

「こ、これは……」
液晶スクリーンに映ったデヴァシステムルームの光景に彼等は驚きのあまり、形容する言葉を失った。
「実験中に計測不能のエネルギーが感知された瞬間、機械の内部からすさまじい光りが現われ、システムは、制御不能となった」
ニコライ博士は、神取に説明した。
「あの見た事もない生物たちが現われ始めたのは、それからしばらくたってのことだ」
デヴゥシステムルームは、奇怪な形状の生命体たちの巣窟となっていた。

彼等の目の前では、不気味な姿の生き物たちが、群れをなしていた。
「ば、化け物だ……」
剛復でならす武多も、この光景にはショックを受けていた。
〈これなら、矢沢たちがやられたのもわかる……〉
相手が人間でない以上、プロの論理は通用しない。
矢沢が爆死覚悟で彼等を葬り去ろうとしたのは、プロとしての最後の意地だったのかもしれないと武多は思った。
[ミスター神取。君は、ソロモン王の伝説を知っているか?]
信じられないという表情でスクリーンに目を奪われている神取に向かって、ニコライ博士はまるで大学の講義のような口調で語り始めた。
ソロモン王……、紀元前九百七十年のイスラエル王国に現われた、この異端の王と呼ばれる人物は、イスラエル王国史上、最も思慮に優れていたと伝えられている。
[彼が、何故、異端の王と呼ばれたのか記憶しているかね?]
神取も、それはよく記憶している。
ソロモン王が異端の王と呼ばれた理由……。
それは、彼が、今から七千年前に神との戦いに敗れた悪魔軍七十二将を秘術によって呼びだしたことにある。
どのような秘術を使ってソロモン王が悪魔を呼びだしたかは、今に伝えられてはいない。しかし、

彼はその秘術によって、地獄の王バアルや、地獄の大伯爵ハルファス、地獄の大公ヴァッサゴなどの悪魔界の実力者たちを、自らの手足として、まるで奴隷を扱うがごとく動かし、悪魔の力を利用することで王国に栄華をもたらした。

そして、悪魔の力によって集めさせた世界中の財宝を使って築いた超絶的な美を誇るソロモン神殿が完成するや、王は呼びだした悪魔たちを真鍮の容器に封じ込めたと伝えられている。

「ソロモン王は、神に敗れ、天界にある星々の陰に隠れ住む七十二の悪魔を呼びだした。が、しかし、その後、悪魔たちはソロモン王の封印から逃れベリアル以外は天界に逃げ出したというのが伝説の終わりとして伝わっていましたな……」

結局、ベリアルはなおも地上にとどまりソロモン王に使われているふうを装って、人間どもに災厄の限りをつくしたと言われている。

「では博士は、かのソロモン王の操った悪魔を呼びだしたとお考えですか?」

神取の眉が、ピクリと動いた。

「そうかもしれん」

博士は、頷いた。

「しかし、私は科学者だ。デヴァシステムがソロモン王の秘術と同じように、何かを呼びだしたというのなら、その正体を探らなくてはならない。あのもう一つの御影町のすべてを調べたように」

もう一つの御影町……。

今回の実験は、あの時に得た空間データを元にして行われたのであった。

「御影町が我々の世界の別の形の姿だとしたら、今回のあの生物たちはどうだ？」
博士はスクリーンの中のデヴァシステムを指さした。
今なお、動き続けるデヴァシステムは、一定時間の間隔でゲートを開閉させ、時折、醜悪な生物をこちらの世界に送り出していた。そのありさまは、さながら地獄の門のようであった。
「あれは我々の世界とは全く関連しない別な空間の生物なのだ。どういった細胞組織を持ち、どういった肉体組成で生きているのだ？　そして、彼等がここに現われた時に見せたのはいったいなんなのだ？　あきらかに我々の世界とは全く異なっている！」
ニコライの口調は興奮していた。
「言うならば、このシステムは、我々の感知できない世界との接点を持ったということなのだ。今こそデヴァシステムによって人類はすべての空間の謎が解明できるチャンスを手に入れたのだよ」
ニコライは、われわれ人間の住む別な時間軸の存在を証明した事を強調した。
「我々は、まず、あそこにいる忌まわしき物たちが、どこの世界から来たのか、つきとめなくてはならない」
「すばらしい……」
神取は、感嘆の意を示した。
しかし、それは、博士の研究の発展に対してではなく、スクリーンの向こう側にいる物たちに対してであった。だが、誰一人として、そのことには気付いていなかった。
……いなかった。

デヴァシステムが、ソロモン王の行った秘術を、今また科学の力で再現させたかどうかなど、神取にとっては、どうでもいいことであったのだ。
神取は、忌むべき姿の彼等に見とれていたのだ。
〈俺は、こいつらの姿をどこかで見たような気がする……〉

2

［まず、あの生物を排除し、デヴァシステムルームを我々の手に取り戻さなくては。すべては、それからだ……］
博士は、神取の言葉に頷いた。
そして、武多の顔を見た。
「あの部屋の怪物を排除し、正面に見える装置を奪回しろ」
「はっ」
武多は、感情を見せずに答えた。
「怪物は殺してもかまわんがデヴァシステムに傷はつけるな」
「我々には、あの装置の取扱方法の知識がありませんが……」
「それは、ここにいる山中所長が同行するから大丈夫だ」
「そ、そんな！　中にいるのは、怪物ですぞ！」
ホッとして座り込んでいた山中が血相を変えた。

「殺されてしまいます！」
「そのためにＳＳが貴様を護衛する」
神取は、そう答えた。
「冗談じゃありません、でしたらニコライ博士を！　もともと、こんなことになったのはニコライ博士の実験のせいじゃないですか！」
「ニコライ博士には、他にやってもらうことがある。それに、この研究所の責任者は貴様だ」
「し、しかし……」
「となると、事故の責任は、誰にある……」
確かにそうだった。地下研究所ではニコライ博士の研究が行われているが、組織上の責任者はあくまで研究所長の山中にあった……。
「これは、貴様の仕事だ」
神取は、冷たく言い捨てた。
「すみやかに事態を収拾しろ」
〈そ、そんな……!?〉
その博士に、この実験をさせたのは、あなたではないかと、山中は思った。が、それを口にすることはできなかった。
「言っておくが、この程度の事故の後始末もできない男は、私には不要だ」
神取は、抑揚のない冷たい口調で言った。

「デヴァシステムを守れ。貴様の失点は、それで取消にしてやる」
これが異次元から呼びだした生物だろうと、ソロモン王の呼びだした悪魔だろうと神取にはどうでもよかった。問題なのは、デヴァシステムだけなのだ。
「急げ!」
その言葉に山中は行くしかなかった。

〈どうして、俺が、こんな目に……〉
山中は、デヴァシステムルームの扉の前に立って、セキュリティカードを右手に、握りしめていた。その手が、震えている。恐怖のせいだった。
彼の額からは、汗が、いくつも流れ落ちていた。
〈ちくしょう、神取め!〉
山中の顔は、口惜しさと恐怖にゆがんでいた。
〈俺を所長にしたのは、こういう時のためだったんだ!〉
自分は、捨て駒だったのだと山中は、今、初めて気づいた。
今まで、神取に、潰されてきた人間たちを横目に、自分だけは巧妙に立ち回ってきたつもりが、とんだところで……。
山中は、わが身の不幸を嘆いた。
すべては、ニコライのせいではないか。それを、なぜ、自分が……。

山中は、ＩＤカードを持った手をブルブルと震わせていた。
「山中所長」
後ろからは、武多の声が聞こえた。
「ドアロックを早く解除しろ」
「は、は、はい」
しかし、山中は、出来なかった。恐怖に体が、凍り付いて動かないのだ。
「仕方がない」
武多は、隣に立つ屈強な男に目配せをした。
男は、黙って頷くと、山中のところまで歩き、そして、震える山中の右手を、むんずとつかんだ。
「ひいっ！」
山中が、我に返った。
男の手が、自分の右手を掴み、手に握りしめたセキュリティカードをゲートのセンサーに読み込ませようとしている。
「や、やめろっ、やめてくれっ！」
山中は、狂ったようになって抵抗するが、男の左手が彼の腕や胸を抱え込むようにして動きを封じる。そして、抵抗しようとする山中の右手のカードは、センサーに入った。
ピーッと、機械音が響く。
「ロック解除しました」

扉のセキュリティが解け、ロックしていたパイプを収納するモーター音が響いた。山中の目の前で、まもなく扉が開こうとする。
「総員、突入準備」
武多は、ゆっくりと開いていく扉の前で、銃を構えたままの部下たちに指示した。
「これより、敵を駆逐しつつ、扉前方左の電源供給ユニットを手動で停止させる」
デヴァシステム本体の電源装置を停止させる以外に、方法はなかった。
やがて、ゆっくりと扉が開きはじめた。
「ひいっっっーっ」
山中は絶望の叫びを口にした。
地獄の門が開いたといわんばかりの声だった。
扉は開いた。
山中は、武多に背中を押され、システムルームの中に足を踏み入れた。足元は血で汚れていた。
部屋の中をわがもの顔で動き回る異形の怪物たちが、山中の顔を見た。
背中に翼をのばした裸の女のようなものが口元に怪しい笑みを浮かべ、獅子のような頭の獰猛な怪物がにらみ、牛のような頭のものが山中の動きを目で追っていた。
血にまみれたシステムルームのあちこちにいる彼等は、やってきた山中たちの力を値踏みしているようだった。少しでも隙を見せたら一瞬にして、彼等は襲いかかってきそうだった。
〈もう、だめだ……〉

山中は、足がすくんだ。
目の前にいる怪物は五体や十体ではない。二十体は超えている。侵入してきた彼等よりも数が多いのだ。
〈俺も食われてしまうんだ……〉
山中は、足元に転がる研究員の死体を見た。
白衣を血に染めて倒れた死体……。
と、その死体の一つが彼の足を引っぱった。
「ひっ」
反射的に飛び上がろうとして、彼は驚いた。
「所長、ひどいですよ……」
「き、君は、浅田くん」
血に染まった白衣の男が、うつぶせに倒れていた。それは、ニコライ博士の助手を勤めていた浅田であった。
「……ひどいですよ、僕たちを見捨てて、自分だけ……」
「ぶ、無事だったのか!」
頭を上げた浅田は、白衣の背中を血で赤くしてはいたが、手も足もあった。
「所長でしょ、ロックさせたのは……」
そう、言いながら、起き上がりながら浅田は、血まみれの手で山中の肩を掴んだ。

「い、いや、私は、けして、そんな……」

そこまで、言いかけて、山中は、絶句した。

「き、君、浅田くん……」

浅田の腹部に、ポッカリと大きな穴があいていた。そして、その穴から、血まみれの床が見えていた。

「ここの連中に、食われてしまったんですよ……。おかげで、寒くてたまらないんです」

「た、助けて……くだ、さ……」

後ろに立つSSに救いを求めようとするうちに、山中は、自分の体が凍り付いていくのを感じた。

「た……すけ……」

彼等の目の前で、山中の体が完全に凍り付いた。

SSの社員も、思わず後ずさりをした。

浅田は、SSの彼等を見てニヤリと笑った。

「あなたたちも、僕を……暖めて下さいよ……」

凍り付いた山中の体から、手を放し、かつて浅田だった男は、待機するSSに向かって近づこうと歩き始めた。

「焼き払え」

武多は、あくまで冷静な口調で命令した。

武多の前に立つ三人が、肩にかついだ小型の火炎放射器を使った。一斉に火炎が踊った。

「ふぅはは、あた、暖かいよぉ」
炎を喜ぶように浅田の体は燃えていった。
それが、死闘の始まりだった。
システムルームに巣食うすべてのものが、彼等を敵と判断し、殺意に満ちたまなざしを向け始めた。
「戦闘開始。各自の判断に任せる、奴らを皆殺しにしろ!」
武多は叫んだ。
「所詮は、獣だ。火には弱い。焼き払え!」
火炎放射器隊の三人が炎の壁を作り、そして、後の三人と武多が炎に気をとられたものたちに弾丸を次々にぶちこみ始めた。
だが……。
〈山中め。とうとう役立たずのまま終わったか……〉
神取は、山中の最後をスクリーンで見た。
スクリーンでは、今、武多の率いる七名のSSの連中が、異形のものたちと死闘を繰り広げていた。当初、火炎放射器で一瞬にして怪物たちを焼き捨ててデヴァシステムルームを取り戻すかに見えた彼等だが、スクリーンの向こうの怪物たちは、炎をものともせずに動き回っていた。
〈火を恐れないのか……〉

それどころではない。
怪物たちの中には銃で撃たれても全くダメージを感じないものまでいる。
SSは、怪物たちに押されていた。
一人、そしてまた一人、襲いかかるものたちの爪や牙に倒れていく……。
〈武多、なんとかしろ……！〉
神取は、無力なSSに苛立ちを感じていた。
〈何があっても、デヴァシステムを取り戻せ！〉
〈奴等を殺せ！〉
〈殺せ！〉〈殺せ！〉〈殺せ！〉〈殺せ！〉〈殺せ！〉〈殺せ！〉〈殺せ！〉〈殺せ！〉〈殺せ！〉
〈殺せ！〉〈殺せ！〉〈殺せ！〉〈殺せ！〉〈殺せ！〉〈殺せ！〉〈殺せ！〉〈殺せ！〉〈殺せ！〉
〈殺せ！〉………〈殺せ！〉〈殺せ！〉〈殺せ！〉〈殺せ！〉……
SSの繰り広げる死闘は、神取の中にある何かを刺激しつつあった。
スクリーンの向こうでは、翼のはえた女の爪が男の眼球から脳髄まで突き刺していた。その鋭い爪は後頭部にまで突き出た。脳味噌がグチャグチャと爪にまとわりつくのを楽しみながら、女の姿のそれは笑っていた。突き刺した手を押し戻そうとしてあがいていた黒服の動きが止まった。
〈死んだか……〉
神取の口元が歪んだ笑いを浮かべていた。
〈人間など脆いものだ……〉

神取の意識が醒めた。

〈だから滅ぶべきなのだ、人間は……〉

裸の女の姿のものが、突き刺した自らの腕を引き抜いた。まるで、壊れた人形のように男は力なくその場に崩れた。

女は、血と脳味噌のついた腕を長い舌でペロリとなめた。

そして笑った。残虐な笑いだった。

〈こいつらに滅ぼされるのも悪くないかもしれん……〉

神取の内部で抑えていた衝動が湧き上がって来た。

精神が高揚してくる。こんな感覚は今までになかったことだ。

〈いっそ、こいつらを……〉

その女の冷たい笑いの奥に潜むものを神取は見た……。

それとおなじものを彼は、かつてどこかで見た。

〈どこで見たのだろう。しかし、どこかで見た〉

そうだ、これは……。

あの時の神父の笑いだ！

3

「我々は、あなたが考えているような新興宗教の類ではありません」

神父は、浅黒い肌に薄気味の悪い笑みを浮かべていた。すらりとした長身に、聖職者とは珍しくどす黒く赤い、まるで血で染めたような色のローブを着ていた。

［我々の教えは、今あるどんな宗教よりも古いものなのです］

その落ち着いた語り口は、どことなく古い家柄の出を偲ばせる何かがあった。

そこは、ロンドン郊外にあるひっそりとした教会だった。

神学部にいるアルバート・ブロックから、この世には、キリスト教の教える悪魔とは、全く違った悪魔を信じている教会があると聞いて訪れたのである。

神取鷹久はその頃、イギリスに留学していた。

オックスフォード大学の大学院にである。

日本にいる時は、どこに行っても彼は政治家の息子、旧家神取家の後継者という目でしか見られなかったが、ここでは、誰もが彼を神取鷹久という一人の人間として見てくれる。

ここでは、父親の重圧を感じなくてよかった。

イギリスに来て彼は、初めて絶対的存在の父親から解放されたのだ。

解放されてみて、初めて彼は疑いを抱いた。

父親が彼に叩き込んできた思想についてである。

幼い頃から、父親に徹底した英才教育を受けるのと同時に、彼は選民思想をも叩き込まれた。

彼の人格は、神取一族は選ばれた者なのだというプライドと、プレッシャーによって作られたといってもいい。

ふと感じた疑問は、自由を満喫するほど強く深くなっていった。
本当に自分は選ばれた人間なのだろうか？
だとしたら、選ばれた自分のすべきことはなんなのか？
根源的な疑問を感じた。
それを解消するために彼は、手始めにさまざまな宗教書や哲学書を読みあさることにした。日本にいた時は、これらの本は読むことが許されていなかったこともあって、それに書かれていることは神取にとっては新鮮だった。
特に、彼の興味は『選ばれし者』についての記述であった。
その中に、彼の答えを求めたのだ。
そこで神取は、選民思想は、すべての宗教や思想の源であると初めて知った。
ユダヤ教においては、ユダヤ人だけが選ばれた民族であり、キリスト教においては、イエスを信ずる者。神取は、それ以外にもイスラム教や仏教など、ありとあらゆる宗教書から、選ばれし者の本質を探ろうと努力した。そのため、彼は、オックスフォード大学の図書館で、その方面の文献を読みあさった。しかし、どの書物にも彼を満足させる理由は書かれていなかった。選ばれた存在は選ばれた存在でしかなかった。
「こんな不合理なことがあるものか……」
何をもってして人は選ばれた存在として自己を誇れるのか？
書物にその答えを求める行為は、自分が選ばれた人間であることへの合理的な理由を求めてのこ

とだったのだろうか。しかし、書物を読めば読むほどに彼の頭の中に父親によって植え付けられた自分が特別な人間であるという思いが揺らいでいく。
その疑問が、やがて人間とは何かということに達するのに時間はかからなかった。
アルバートの情報で、その教会を訪ねたのも、疑問への答えを求めてのことである。
「人間の存在意義をあなたはお知りになりたいのでしたな……」
神父は、ニヤリと笑った。
「よろしい、お聞かせしましょう」
最初、神父の話が始まった時、神取はまたかと思った。
それは、外宇宙で誕生し、人類が誕生する以前に地球に到来し支配していた者、つまりは旧支配者と彼等の呼ぶ者たちの話であった。その言葉に彼は、新興宗教にありがちな宇宙人話だと失望した。
思った通り神父は、旧支配者たちは、この地に人間と動物、植物を作ったと語った。
〈しょせんは、キリスト教のどこかの宗派の焼き直しか……〉
神を宇宙人としてあがめるのは、よくある話だ。
最後の審判の日には、UFOが飛来して選ばれた人間だけを救済するというオチを神取は、過去何回聞かされたことだろう。
だが、そこから先の話は、意外にも神取の注意をひいた。

「旧支配者たちは、自らの食物として、人間と動物をこの地に作り出したのです」
「人間を!?」
「そうです」
神父は頷いた。
「動物と植物を人間に食べさせ、そして、人間を自らの食物として食べていたのです。人間は万物の霊長などと言っていますが、旧支配者の食物でしかないのです」
「しかし……」
「いいえ」
神父はかぶりをふった。
「食べるといっても我々の肉体を食べるのではありません。彼等は、我々の精神を食べるのです。その中でも、特に恐怖と絶望を好んで食べるのです」
神父は、人間は恐怖と絶望を生むためだけに生きていると語った。
旧支配者たちは、我々が作物を育てたり、動物を飼育しているように我々を飼っているのだと。
恐怖と絶望……。
キリスト教は愛で、仏教が慈悲で人を救うと言っているのに対して、この教えには救いというものは一切なかった。
救いを保証しない宗教は、中国や日本などアジアにはよく見られた。
いわゆる土地神という存在である。

多くは山や海といった自然を象徴する神の彼等は、時に人間の脅威となり、時に人間に恵みをもたらす人間以上の存在としてあがめられていた。
それは、神取も書物で知っていた。しかし……。
〈人間がただの食物など……〉
聞いたこともない教えだった。
悪魔崇拝や、また東洋の神々に関しては、それぞれ生贄を捧げるという行為はあったが、それは、それと引き替えに何かをしてもらうための儀式である。
いずれも、どんな形をとろうと、信仰とは、信ずる代償として、人間に何らかの利益を保証する約束で行われるものであると神取は結論づけていた。
それだけに、まっこうから人間の存在意義を否定するこの宗教は、新鮮だった。
いや、むしろ、西洋の宗教の持つエゴイスティックで傲慢な部分に辟易していた彼にとっては、この概念の方が、正しいとさえ思えた。
［それでは……］
［その疑問にもお答えしましょう］
神父は笑った。
「その旧支配者は、どこに消えたのか……ですね？」
神取は頷いた。
まるで自分の心が読まれているような、そんな感覚を彼は受けた。

〔数千年前、世界に起こった大変動です。いえ、それで滅んだというのではありませんよ。彼等は逃げ出したのです。身を守るために別の世界、そう我々の言葉でいう異空間に……〕

〈異空間！〉

神取は、我に返った。

〈デヴァシステムの繋げた空間というのは、まさか……〉

デヴァシステムが、あの時、神父が言った旧支配者たちをこの世界に呼び戻してしまったというのか！

〈確かに似ている……〉

怪しくうごめく彼等は、神父から見せてもらった書物に記されている旧支配者たちの姿に生き写しといってよかった。

〈だが、待て〉

本当にそうなのか？

その疑問は、怪物たちの雄叫びに掻き消された。

聞く者を震えさせるような音……。

人間の言葉とは、全く違った響きを持った音。

まるで、何かを唱和しているような響きだった。聖なる者を称えるような響き。

人間の耳が、音として聞き取ろうとして、ようやく、そう形容できる響き。

〈これは言葉だ……〉

たった一度しか聞いたことのない音が、彼の頭脳の奥から、やがて脳の思考全体を支配しようとするかのように、どんどん大きな響きとなってゆく。

〈アザゾース。ヨグ＝ソトース。シュブ＝ニグラス〉

それは、彼の精神に恐ろしい苦痛を与えた。

声は、今、自分の頭の中のすべてを支配しようとしているようだった。

〈アザゾース。ヨグ＝ソトース。シュブ＝ニグラス〉

「俺は、今、どうなっているんだ……」

彼は、自分が想像を絶した闇の渦の中に巻き込まれていくのを感じていた。その闇の渦の中では、恐怖の叫び声が充満していた。彼もまた、大きな恐怖を感じながら、渦の中心へと流されていく。言葉では伝えることの出来ない錯乱の後、彼が流されたのは、腐敗してゆく宇宙であり、死に行く暗黒、そして、吹き渡る死の風によって病み衰えていく世界であった。

彼の体は、それらをよぎるように運ばれて行く。まるで、何者かにひきよせられるように、幾多の宇宙を越えた後に、彼は虚空の中で輝く神殿の無数の柱の前にいた。

そして、そこで、彼は、不気味にして至高の存在を見た。

響き渡る狂気の音色に満ちたドラムの音と、神を冒瀆するかのような暗黒のフルートの調べの向こうで……。

第六章　ニャルラトホテプ

1

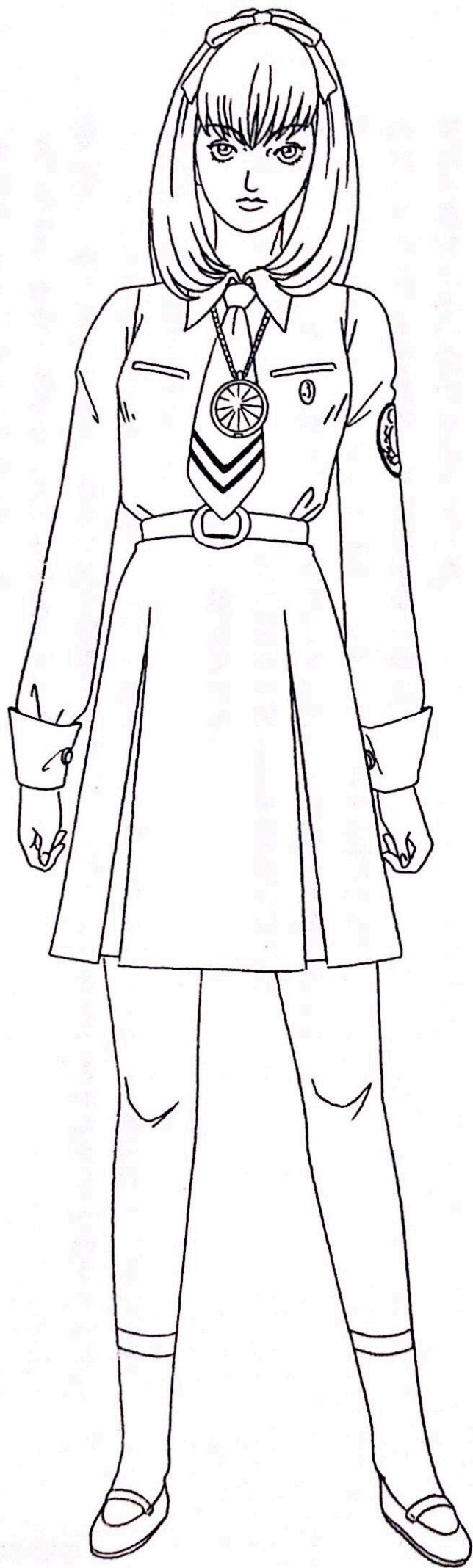
「この人事……」
次々にファクシミリから流れてくるリストを見ながら、真夜の顔は青ざめていった。
リストを持つ手が震えている。
「まさかとは思ったけど……」
手にした数枚のリスト、その一枚には佐伯情報通信新組織人事表と記されていた。
次々に流れてきているのは佐伯グループ全社の新しい組織表である。
それぞれの会社ごとに一枚にまとめられたリストは、徳心会の協議によって作られた。佐伯グループ全社全部門に渡った新たな人事の発表であるが、真夜の知っているかぎりこの時期にここまでおおがかりに行われたことはない。
一週間後にグループ幹部に通達予定のこのリストを真夜が手に入れることができたのは、鷹爪会に加わる経営企画室の若手が密かに入手したものである。リストには極秘扱いのスタンプの跡があった。
彼女は、送られてくるリストのすべてに目を通し続けていた。

「信じられない。どうしてこんなことに……」
送られてくるリストのどれもが、真夜にとって最悪の知らせだった。
「まるで、狙い撃ちだわ、どうして……？」
彼女は、新たに流れてきたリストを手にとった。
「これもだわ」
リストには、佐伯電機工業と記されていた。
「やはり、星川と波多野が左遷させられている……」
総務課長の星川と経理課主任の波多野は、鷹爪会のメンバーだった。その二人だけが、現在の役職から降格された上に関連会社に出向と決まっていた。
「これも……、これもだわ……」
体中の力が抜けた。
「……負けたんだわ」
森川常務に敗れたのだと、彼女は思った。
「報復人事というわけね……」
佐伯不動産、佐伯銀行、いずれも鷹爪会のメンバーだけが降格されている。
そして、彼等がいたポストには、なぜか森川常務の子飼の連中が収まっているのである。
「工作は、完璧だったはずだのに、どうして……」
神取を支える若手たちの集めた不正資料は、完璧だったはずだ。いかに、佐伯会長としても、あ

れを見せられたからには、動かざるをえないはずなのに……。
　仮に、森川一派が失脚に追い込まれないにせよ、少なくとも、神取が神田社長に替わり、セベクの社長にはなれる。運がよければ、グループの中心、佐伯商事の役員もありうるはず。そうなれば、神取派が、これまで以上に、グループの中で、より高い地位につくはずだと、彼女は思っていた。
　それが敗れてしまった。
「甘かったわ」
　真夜は唇をかみしめた。
〈森川を甘く見ていた私の失敗だわ……〉
　真夜は森川の権力の強さに愕然とした。
「支社長に報告しなくては……」
　このままでは、自分はもちろん神取が失脚するのは間違いない。
　真夜は、目の前がまっ暗になるのを感じた。
　しかし……。
〈発表まで、まだ一週間あるわ〉
　真夜は、自分にそう言い聞かせた。
　それまでに、何か打つ手があるかもしれないと彼女は考えた。
　せめて神取だけでも守らなくてはならない。
〈それにしても……〉

いったい、どういう手をつかったというのだろうか?
あれだけの汚職の証拠をつきつけられながらも失脚を免れるとは……。
それどころか……。
「まさか、鷹爪会を根こそぎ左遷させてくるなんて……」
と、つぶやいて真夜は、はっとした。
〈鷹爪会!〉
「なぜ、鷹爪会のことが……!?」
真夜たちメンバー以外に、この事を知っている人間がいるというのか!?
〈そんなはずはない〉
真夜は自らの問いかけに首を左右にした。
「常務たちが、知っているはずがないわ……」
会合は、すべて秘密に行われ、その連絡もすべて自宅に行われていたのである。
「けど……」
森川常務派の不正経理資料を作ったのは鷹爪会の中で総務や経理担当者たちである。資料に記載された情報から告発者を割り出したとしたら、左遷人事は経理や総務どまりのはずである。なのに、この告発とは全く関係のない営業や企画部門のメンバーまで左遷させられているのだ。
この左遷人事は、鷹爪会の存在を知った上での報復としか思えなかった。
とするなら……。

〈もしや!?〉
可能性は一つしかなかった。
鷹爪会の中に裏切り者がいる……。
それしか考えられなかった。
〈だとしたら……〉
真夜の前にあるファクシミリからピーッと音が鳴った。それは、ファクシミリが、最後の一枚の受信を完了したという信号音であった。
「裏切り者は、残りのリストの中にいる!」
真夜は、まだ見ていない残り数枚を手にとった。
そして、探した。
この報復人事を受けていない人間が裏切り者のはずだ!
やがて、彼女は、最後の一枚の中にそれを見つけた。
「そ、そんな……!?」
真夜の肩が大きく震えた。
〈信じられない。こんなことがあるはずないわ……〉
何かの間違いだと真夜は思いたかった。

2

エレベーターは地上に向かっていた。
そこには、神取と武多の二人だけが乗っていた。
神取は、押し黙ったままの武多の隣で緊張と興奮に包まれた笑いをさっきから浮かべ続けていた。
〈この俺の手で……〉
目の前に彼は両手を広げた。
そして、その指の一つ一つを見た。震えていた。
〈やれというのか……〉
それが条件だった。
〈やるしかない〉
わかりきったことである。やるしかないのだ。
彼は、自分に言い聞かせようとした。
だが、指の震えは止まらない。
それどころか、どんどん激しくなってくる。
その情景を頭に浮かべようとすると、呼吸は乱れ、喉は渇き、息苦しさに襲われる。
彼は、思わずネクタイをゆるめようと震える右手をのばそうとした。
だが、手は思ったように動かない。

やっとの思いで、彼はネクタイをゆるめた。
しかし、ネクタイをゆるめ、シャツのボタンをはずしても、首をしめつけられるような圧迫感から逃れることはできないでいた。それどころか圧迫感は、ますます強くなっていく。
「支社長、まもなくです」
武多が落ち着きはらった態度でエレベーターが着いたことを告げた。
「あ、ああ」
神取の返事は、かすれた声だった。
チーンという音とともにエレベーターは停止し、ドアが開いた。
神取はエレベーターを降り、ゆっくりと支社長室への隠し通路を歩いた。
武多が、壁のボタンを押し、彼の目の前に見慣れた部屋が広がった。

「来ていたのかね?」
スライドしてゆく壁の向こう側で一人の女性が、うつむいた姿勢でソファに腰掛けているのを神取は見つけた。
宮下真夜である。
「支社長」
彼女は立ち上がった。
その顔は、何かに苦悩しているように深刻なものだったが、女の顔であった。

が、神取の後ろから歩いてくる男の姿を見た時、それは消えた。
「!?」
なぜ、ここにSSの武多が……。
真夜の顔は一瞬にして警戒感をあらわにした。
が、武多は、気にすることもなく真夜に頭を軽く下げると黙って支社長室から立ち去って行った。
「いったい、どうしてSSがここに!」
デスクに戻った神取に彼女は駆け寄った。
「SSは森下常務の親衛隊じゃありませんか、それをなぜ!」
佐伯セキュリティサービスは、表向きは警備会社だがその実態は森下常務の握る私設警察であることは社員なら誰でも知っていた。
「気にすることはない」
神取が、真夜の不安を読みとったように言った。
「地下の研究所で警報装置の異常があったのを調査に来てもらっただけだ」
「だとしたら、企画調整室になぜ……」
「君は不在だった。だから私が直接連絡した……」
「しかし!」
「心配するな」
だが、神取の口調は、どこか不自然だった。

どこか、そわそわした様子が見え隠れしていた。
「それよりも、私に何か用か？」
その言葉に宮下は頷いた。
そして、神取に分厚いリストを差し出した。
「これを見てください」
彼は、宮下の差し出す書類を一瞥した。
「グループ全社の新人事か」
「鷹爪会は、ことごとく左遷させられています」
「そうか」
神取は、たいして興味のないそぶりでリストを真夜に返した。
「それが、どうかしたのか？」
「支社長！」
真夜の目から涙がこぼれた。
「森下常務との間に何があったのですか！」
真夜は、リストの一枚を神取に突きつけた。
セベクの組織図だった。
そこには真夜の名前はどこにもなかった。
が、支社長としての神取の名前に新たに役職が付けられていた。

取締役と記されていた。
「君の言う通り、取引をした。それだけだ」
神取は、悪びれずに答えた。
「まさか！」
「そう。君たちの作ってくれたあの資料は、森下常務との取引に使わせてもらった」
「なんということを……。私たちを裏切ったのですね……！」
「ああ」
ためらう素振りもなく神取は答えた。
真夜は、愕然とした。
〈支社長、いったい、あなたは、どうしてしまったのですか……〉
あの野心に満ちあふれた神取鷹久は、どこに行ってしまったのだろうか。
よりにもよって森下常務と取引など。彼女には、今の神取を本当の神取とは思えなかった。
「何かお考えでもあってのこと……ですよね」
真夜は、神取が裏切ったなど信じたくなかった。
「心配する必要はない……」
神取は、真夜の目をみつめ返した。
「すべては、予定通りのことだ」
「予定通り？」

「そうだ」
神取は、怪しい笑みを浮かべながら頷いた。
「君は、私を佐伯グループのトップにまで上らせると言ったが、最初から私には佐伯グループなど眼中にはない」
神取は、不気味な薄笑いを浮かべている。
「デヴァシステムさえ完成してしまえば、他のことなど……」
「そ、そんな……」
宮下は、愕然とした。
「しかし、君たちのおかげで、それももう一歩のところまできた」
「まさか、そのために、私たちを……」
「ああ、利用させてもらった」
神取の無機質な声が、真夜の耳に響いた。
「う、嘘です……」
「嘘ではない。君の作った鷹爪会の貢献は、森下常務たちを黙らせるのに役に立ったよ。おかげで、デヴァシステムの開発は佐伯グループの中での最優先事項として承認された……」
「では、先月から増員された研究スタッフたちも……」
神取は、満足げな顔を見せた。
「あの資料との引換だ」

「ど、どうして、こんな研究に……」
「デヴァシステムは、ただの研究ではないよ」
力のこもった声が返った。
「これさえあれば、私は神の領域にまで駆け上がることができる」
「神の領域……？」
「そうだ」
神取の口元がゆるんだ。
「地下二十メートルにある実験施設にある装置を使えば、何でもできるさ」
神取は、ニコライ博士に進めさせている研究のすべてを語った。
それは、真夜が耳にしたこともない内容だった。
「もはや、セベクも佐伯グループもない。わかるか、私は、新しい神としてこの世のすべてを支配することができるのだ。
愚かな人間どもに、天罰を下すことすら可能となるのだ！
このことがわかるか!?」
神取の目が、強烈な輝きを見せ始めていた。
「もう、私は、何も恐れなくていいのだ！
もう、だれも私を死んだ父親と比べることなどできん、できんぞ、ははははは
どうだ、どうだ、どうだ！　素晴しいではないか！

もうすぐ、私は真に選ばれた者となる……」
神取は、狂ったように笑った。
「はっはっはっ、宮下君　素晴しいじゃあないか！」
神取は、口からよだれをダラダラとたらしながらも尚も笑い続けていた。
「そ、そうだろ、宮下君……」
「し、支社長……」
「喜んでくれるだろう、君は」
神取は、笑いながらソファに倒れ込んだ。
「私は、力が欲しかったのだ、力が」
「……支社長」
神取は、笑い続けていた。しかし、その狂ったような笑いに真夜は、何かひっかかるようなものを感じた。
〈これは、虚勢？〉
女の直感だった。
何かに怯えてあがいている？
「私は、私は君を裏切って、神になろうとしたのだよ、君を裏切って！」
〈そうかもしれない……〉
さっきからのそわそわした様子は、これだったのだ。

自分を裏切ったことへの罪の意識なのだ。
そう思うと、彼女は、神取が哀れに思えた。
「鷹久……」
神取の手に、真夜の手が伸びた。
「真夜」
神取の手が、それを握りしめた。
そして、彼は初めて彼女を名前で呼んだ。
「真夜、俺を助けてくれ」
神取は、すがるように彼女を見た。
真夜は頷いた。
「あなたが勝者となるためなら……」
「そのためには、何でもしてくれるか、俺のために……？」
そして、彼女は、ゆっくりと、それに応えた。
「はい」
「真夜」
神取が真夜の目を覗きこんだ。
「私のために死ぬことができるか？」
試すような言い方だった。

が、彼女は、はっきり答えた。
「あなたのためなら……」
その言葉に神取の目が、突然、歓喜に輝いた。
それは、まるで、長い間、この時を待ち望んでいたような光り方だった。
「そうか……」
神取は、暗く怪しい光りを瞳に灯しながら、満足気に頷いた。
「その言葉を待っていたよ、宮下君」
「鷹久？」
真夜は、神取の表情が変わるのを見た。それは、氷の仮面のように冷たい顔だった。
そして、神取は真夜の握った手を、ゆっくりとほどきながら、こう言った。
「ならば……」
神取の両腕が、ものすごい早さで伸びた。
「ならば、私のために死んでくれ」
一瞬にして、その手は彼女の首にかかった。
「!?」
神取の指の爪が、彼女の喉に食い込んでいく。
「嬉しいよ、君が私のために死んでくれるなんて」
そう言いながらも神取は、ぐいぐい首を握る両手に力をかける。

「君でなくてはならないのだ……宮下君……。奴等の力を手に入れるための契約には……」
真夜は、自分に何が起ったのかわからなかった。
〈ど、どうして……〉
そんな目を神取に向け続けていた。
「こうして、私自身がだね……生贄の女を締め殺すことが条件なのだ……」
〈生贄……、私が……〉
苦痛に歪んだ真夜の顔が、そう語りかけていた。
「そうだ、生贄だ。
話していなかったが、デヴァシステムは異空間に穴をあけて、そこから悪魔のような連中を我々の世界に呼びだしてしまった。
私は、驚いたよ。
昔、私が本で読んだ悪魔にそっくりなんだ……。そいつらの力ときたら、君、人間なんて虫ケラみたいにひとたまりがないのさ」
狂ったような目をしながら神取は、彼女の首を絞め続ける。
「まだ聞こえているかい、宮下君。
私はねぇ、人間が万物の霊長で選ばれた存在だなんて信じることができないのだよ。だって、人間なんて醜く汚れて、嘘と偽り、独善の塊じゃあないか。
誰かが、こんな人間に罰を与えなくてはいけないんだよ。

私は、デヴァシステムを使って人類に罰を与えるつもりだったのさ。
え？　それと君の死とがどう繋がるかって？
いい質問だよ、聞いているかい？
声が、私に約束してくれたんだよ。
どうして私の心がわかったのか知らないが、私に力をくれるとね……。
神にも匹敵する力をだ。
そして、悪魔のような奴等も私の命令に従うようになる。
素晴しいことじゃないか。
私は、この力で悪魔のような連中を従え、そして、デヴァシステムによって人間たちに裁きを下すのだよ」
神取は、その手をゆるめない。
「だから、宮下君。死んでくれーーーーっ!!」
薄れゆく意識の中で、真夜は見た。
目の前に、闇が、大いなる闇が広がっているのを。
自分と神取は、その闇の中に浮かんでいる……。
その闇の中で、何かが動いた。
巨大な影が動いた。
のたうつ影は、闇の中でどんどん大きくなった。

〈あれは、………、なに………？〉
そのシルエットから、黒々とした闇で被われた姿が、彼女の視界のすべてを被った。
彼女は、その本当の姿を見た。その瞬間、声にならない絶叫をあげ、息絶えた。
後には、宮下真夜だったものが残った。
真夜は絶命した。
「ニャルラトホテプよ、約束だ、私に力をくれ！」
闇の中に、神取の叫びが轟いた。
「アザトースへの生贄だ。契約を‼」
「よかろう、契約は成った」
虚空から、もう一つの声が響いた。

どれくらい時間がたったのだろうか、神取は、胸に重みを感じて我に返った。
「こ、これは……」
ソファにもたれかかった神取の胸に女の体が倒れかかっている。
「み、宮下君」
その赤いスーツは、間違いなく彼の秘書のものだった。
「いったい、私は……」
頭の奥に鈍い痛みがあった。まるで悪夢から醒めたような不快な感じがした。

「起きろ、宮下君」
神取は、真夜の体をどけて立ち上がろうとした。
そして、初めて気がついた。
自分の両手が、真夜の首にかかっていることを
「ひっ！」
両手の爪が、真夜の喉に食い込んでいる！
そして、気がついた。
喉に食い込んだ指を伝った血が、彼の両腕を赤く染めているのを！
「宮下君！」
そして、見た。
真夜の顔を！
白目をむき出しにし、喉の奥からだらしなく舌を覗かせ、そして、髪は総毛立っていた。美しかった肌には、老婆のような醜悪な皺が寄っていた。その顔は、恐怖と苦痛に歪んでいた……。それは、もはや、彼が知っている女ではなかった。
「ひぃぃぃぃぃぃぃぃぃっっっっっっっ」
神取は、悲鳴を上げた。
文字通り恐怖の悲鳴だった。
その時、彼は、すべてを思い出した。

「お、俺が殺したんだ……、この俺が……」

愛情すら感じたことさえあったこの女を、俺がこの手で殺したんだ。

神取は、死体の喉にかかった自らの指をほどこうとあせった。しかし、彼の指は硬直しているのか、なかなかはずれなかった。

「た、助けてくれ、だ、誰か、はずしてくれ……」

エピローグ　当日

「どうだね、ニコライ博士」
巨大なデヴァシステムのゲート前で大勢の科学者とともに作業するニコライ博士の前に、神取が現われた。
「たったいますべての計算を終えることができた。あと、一時間後には再起動できる」
「と、いうことは、午後二時ですな……」
神取は時計を見た。
「ミスター・カンドリ。先日の事故の事だが……」
「ああ、あれでしたら亡くなった遺族への補償もセベクが責任を持ってすませてあります。博士が気にされることはありません」
「しかし……」
一ヶ月前のデヴァシステム実験事故は、十五名の研究員と九名の佐伯セキュリティサービスの社員を失った。そして、デヴァシステムそのものも損傷を受け、ようやく昨日になって完全修復が終わったところであった。
「我々が見たあれは、いったい何だったのだろうかね……」
「あの生物のことですか」

「まるで悪魔としか言いようのないものたちだったが……」
「それも、今回の実験で博士が解明して下さることを期待しています」
神取は、そう答えた。
あの時、このシステムルームに現われた怪物たちは、武多の手によってすべて葬りさられたのだが、その記録は残っていない。システムルームをモニターするカメラが、すべて故障してしまったからだ。そして、その時、デヴァシステムの制御装置の一部分も損傷した。
すべてが終わってシステムルームを開けた時、爆風で吹き飛んだような怪物たちの死骸が転がっていたことから、武多が爆薬を使ったのだと彼等は判断した。
だが、神取だけは、本当のことを知っていた。
武多もまた神取と同じ力を手に入れたということを……。
「支社長……」
「武多か、どうした」
神取の前に武多が部下たちを引き連れて現われた。研究所に似合わない黒服の彼等だが、あの事故以来、セキュリティの完備ということで彼等は常駐していた。その陰には武多の神取への服従の意志があることは間違いがない。
彼等は、神取を新たな主として選んだのだ。
武多は、あたりをはばかるように神取の耳元に小声でささやいた。
「また、例の少年が、この周りをうろついております」

「玲司のことなら、放っておけ。今の我々にはゴミにもならんよ」
「それと、悪魔たちですが……」
「うむ」
「最近は満月の夜以外にも出没するように。このままでは隠しきれなくなるかと……」
デヴァシステムの事故の影響なのか、あれ以来、満月の夜になると御影町に奴等が姿を現わすようになった。
「そうか。だが、もうかまわん」
「と、言うと……」
「そうだ。貴様には言ってなかったが、今日が裁きの日となる」
神取は頷いた。
「いよいよ、人間どもに罰を与えるのですな」
「そうだ」
神取は、暗い笑みを浮かべた。
〈そして、その罰は我々も例外ではないぞ、武多……〉
神取は、心の中で密かにつぶやいた。
〈人間は生まれながら罪を背負っている。生き続けるほど、その罪は重くなってゆくのだ。その罪を消すには死ぬしかない……。
私は、今、すべての人間を抹殺し、人間という種の持つ罪のすべてを消し去るのだ〉

が、彼の陶酔が破れた。
「ひっ！」
彼は見た。自らの両手が真っ赤に染まっているのを。
〈まただ、また血が！〉
「どうかなさいましたか？」
武多が、神取の様子に心配そうな顔をした。
「い、いや、何でもない」
蒼白なその顔に、武多は神取が疲れているのだと思った。
「少し、休まれた方が？」
「あ、ああ……」
彼は、改めて自分の手を見た。血など、どこにもついていなかった。

神取は、洗面所で思いきり石鹸をつけた両手をこすっていた。
〈なぜだ、なぜ、血が見えるのだ……〉
神に等しい力を身につけた自分が、何に怯えているというのだ。
〈まだ、あのことが気になるというのか……、バカな！〉
真夜をくびり殺してから毎日、こうだった。あの時の血が彼の体にしみついているといわんばかりに、この幻影は彼につきまとっていた。

単なる脅迫観念だと頭ではわかっていても、それを捨て去ることはできなかった。一日に何度も、何度も手を洗わなくては落ち着かないのだ。

しかし、洗っても洗っても、あの時の血はとれた気がしなかった。

狂ったように神取の手は、石鹸をこすりつけている。

その震える背中を見下ろす影があった。

二本の腕と足を持ち、大きな翼を背中から生やし、蛇のように長い尾をくねらせた異形のもの。

それは、冷たく邪悪な目で神取をあざ笑っていた。

あとがき

全国五十万人のペルソナファンのみなさん、こんにちは。

『女神異聞録ペルソナ』の小説版いかがでしたでしょうか？　小説版は、入院中の園村麻希とセベク御影支社の神取鷹久、それに隠れキャラの城戸玲司にスポットをあてて、ゲームが始まる直前までに、いったい何があったのかというゲームのプレストーリー形式でまとめてみました。

よく考えてみると、他にゲームのキャラで出て来たのは、まい、あき、南条くんと山岡老人、マーク、それから麻希の母親園村節子、ニコライ博士、武多、香西千里、内藤陽介、あと名前だけだけどアヤセ。ゲーム設定上のキャラとして佐伯会長、神取の父、あと完全オリジナルで佐伯グループの役員たちに政治家、ニコライ博士の助手数名、SSの隊員、謎の神父、これに紅一点で神取の秘書にして腹心の部下宮下真夜がいなかったらオリジナル部分は、完全におやじキャラ大集合になるところでした（笑）。なもんで、「ちょっと待て！　私の好きなキャラクターは、何をしていたのよ」というお叱りの声もあるかもしれません。出したかったんですけどね、エリー、ゆきのさん、冴子先生、金田さん、姫野さんも（金田さんはウソ（笑））。彼女たちのファンのみなさんは、とりあえず、ビクターブックスに『雪の女王篇プレストーリー』の出版希望のお手紙をお寄せ下さい。反響いかんによっては実現するかも？　実際、冴子先生のストーリーとかも書いてみたいものです。

あと、ご感想とか送っていただけると嬉しいです。

今回、この小説を書いていて高校時代の事を思い出しました。私は高校受験失敗して一年浪人した経験がありまして、競争率が低くて二十五人しか落ちないはずの田舎の学校なのに落ちちゃいまして、暗い一年間過ごしました。ショックで白髪がドーンと増えて、一ヶ月くらい毎日、合格する夢ばっか見るの。まるで麻希だよなーっ、ほんと。あの頃は、夢が現実だったらと真剣に思いましたよ。おまけに家は借金でサラ金地獄にはまってるし。翌年、高校に入ったら、あたりまえだけど浪人なんてほとんどいないし、みんな、最初は腫物にさわるように扱うし、憂鬱でしたねぇ。こんな私でも、今は楽しい日々を送ってますから、この春、挫折があった人も明日を信じてがんばって下さい。あと、周りに挫折した友人を持っている方は、過度に気を使わないで、今まで通りに接してあげて下さいね。私は、そうしてもらうのが一番よかったです。

さて、個人的な情報になりますが、同じビクターブックスより六月下旬、今度はオリジナル小説を出します。タイトルは『竜馬の陰謀　探偵更紗事件帖』です。日本初の探偵小説ブームのまきおこる明治二十六年、伊藤博文ら明治政府高官の前に現われた竜馬の亡霊の目的は？　そして、その影に隠された竜馬暗殺の謎！　美少女探偵更紗は亡霊の正体を解き明かせるのかという文明開化ロマンあふれる伝奇推理小説です。書店で見かけたら、ぜひ手にとってくださいね。

では、最後になりますが、アトラスの里見さん、岡田さん、どうもありがとうございました。

Ｐ－セッション　南原　順

（ニフティサーブＩＤ　ＨＱＩ０１３４２）

女神異聞録ペルソナ
神取の野望

発行日　1997年５月26日　初版発行

著　者　南原 順

発行人　加藤靖雄

発行所　ビクターブックス／ビクターエンタテインメント株式会社
〒150東京都渋谷区神宮前6-19-13　J6ビル9F
TEL.03-3486-4361　FAX.03-3486-4273

印刷所　凸版印刷株式会社

編集人　小川原智

Design　D'STUDIO

ISBN4-89389-146-4 C0293

ISBN4-89389-146-4

C0293 ¥838E

定価：本体838円（税別）

ビクターブックス
ビクターエンタテインメント株式会社

『佐伯グループ』の研究機関・セベク御影支社長に就任した、神取鷹久。科学の常識を覆す空間移転装置、D・V・A（デヴァ）システムの開発が、もう一歩の段階まできた。しかし、最終実験段階において異次元空間と接触してしまい、この世の物とは思えない生物を呼び出してしまった。『佐伯グループ』での勢力争いにはもともと興味のなかった神取は、D・V・Aシステムの完成に全力を傾けていたが、真の狙いは何処にあるのか、異空間の生物と人類の覇者となるべく契約を交わす。そして……。『女神異聞録ペルソナ』の裏設定も楽しめる小説版、堂々の刊行！